
数多の世界を回りし者

幻想を望む人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

数多の世界を回りし者

【Nコード】

N69810

【作者名】

幻想を望む人

【あらすじ】

これからずっとこの平凡で平和な日常が続いていくものだと、疑いもしなかった。

こんな退屈な日常だから、漫画やゲーム・ライトノベルの世界に行ってみたと思うてもしよぅがなぃことだろう？

しかし、空想の世界は何処までいっても空想なのだと……。そんな常識が覆されて想いが叶ったら。

一人の青年が数多の世界を、時には転生して渡り歩いていく物語です。

注意事項です（前書き）

よくご確認ください。

注意事項です

* 注意事項 *

今回は、この作品に目を通す前の注意事項をお知らせします。
以下の内容に該当するものが嫌いな方は、お戻り下さい。

- 1 ・ハーレムもの
- 2 ・チート主人公
- 3 ・原作ブレイク
- 4 ・一部のキャラクターのTS化
- 5 ・えっちなのは嫌だ（R - 15）
- 6 ・非難しに来た
- 7 ・感想板を荒しにきた

以上です。

何か、問題があればさらに追加していきます。

私は今回が初めて書きますので、解からない所もあり拙い物となつてしまいます。

物語を書く上で、他者の方の書いたものと似てしまう事が出てくるかもしれませんが、

盗作している訳では御座いません事を先に書かせて頂きます。

何か、問題点や批評がございましたら、感想の方にお書きください。
参考にさせて頂きます。

作者は、リアルの事情により更新が不定期となっております。

長くなりましたが、ここまで目を通して頂きありがとうございます。
た。

注意事項です（後書き）

初めまして、幻想を望む人です。

小説を書くのは初めてなのでよろしくお願いします。

次は、主人公のプロフィールです。

主人公プロフィール（前書き）

主人公のトリップ後のプロフィールとなります。

主人公プロフィール

名前：秋風 火焰

偽名？：スコール・ストラス・レオンハート

誕生日：11月9日

身長：187cm

体重：78kg

種族：人？

容姿：FF？のスコールを中性的な顔にして髪型は同じです。傷はありません。

瞳の色：FF？のクラウドと同じ青色です。

趣味：読書（ライトノベル 漫画） ゲーム 美味しいものを食べる
こと

武器：合体剣、正宗、巨大な十字剣、エクスピアティオ戦術砲機、ブロンテ・クラフト、
時を刻む懐中時計、銀のナイフ×100、大岩で作られた斧剣、グ
ラスヒール&リボルバーナックル

乗り物：フェンリル零

備考：何処にでもいた学生。容姿は黒髪黒目と普通の日本人だった。

大学四回生で実家から大学に通学している。

卒業研究を一旦終わらせ自室に戻り、メールチェックをして
いた時に、PCの不良かと思い

マウスをクリックしていると、画面がひかり、ある世界の狭
間に飛ばされたところから始まる。

性格は、若干の人見知りな所があり、ガンコな部分もある。

好きな事には、集中力がとても高く周りに気付かないことも
ある。

争い事には極力関わろうとしないが、自身が気に入らない事
にはとことん反発する。

る。

また、滅多な事では怒らないので、怒った時はとても怖く
そして、軽度？のオタクである。

第0話 プロローグ（前書き）

初めてですがよろしくお願いします。

第0話 プロローグ

ここは何処だ？

目覚めて最初に思ったことはそんなありふれたものだだった。

視界に飛び込んでくるのは黒一色、ただそれだけだった。

普通なら混乱する事態のはずなのだが、そんなことは無く、少しでも情報を得ようと視線を周りに向けるが、黒一色である。

一時の間、そんな景色を見ていたが自身が寝ていたことを感じ、いつまでも寝ているわけにもいかずに体を起こす。

視界が高くなり、全体を見回してみたが、やはり黒一色の世界が広がっているだけだった。

どうしようもないので、なぜこの様な事になったのかを振り返ってみた。

夕暮れの光が差し込む道路を一人の人物が歩いていた。

「はあゝ、つまんねえ」

最近とても冷え込んできた外を一人の人物が愚痴をこぼす。

青年の容姿は平凡で、日本人特有の黒髪を全体的に短くしており、耳にも髪がかかっていない。

瞳も黒で、若干の細目である。

服装は、緑のタートルネックを着てをり、その上に白の長袖を着て

いる。

下は、青のジーパンを穿いており、靴は、黒である。
現在は、大学の帰りの途中である。

「就職かあ、どうすっかなー」

また、零れ落ちる言葉。

彼は現在大学4回生であり、就職もとうに決めておかなければならない時期なのだが、どうにも上手くいかずにいる。

「だいたい。働いてる姿もイメージできないし、働きたいとも考えていないんだよ」

そんな事を呟くがすぐに、
ハア

と、ため息が出てしまう。

彼は現在一人暮らしをしており、この大学に通うのに親に無理を言っ
て一人暮らしをしながら通っている。

当然、少しでも親の負担を減らすために、アルバイトをして教科書
代や食費などにあてている。

だが、大学に通い始めて勉強をしていくうちに自身のイメージとか
け離れていってしまった。

しかも今年は就職が困難な年になっていて、周囲の友人達も未だに
決まっていない人もいた。

足取りが重い中、取り留めのないことを呟きつつも目的地のアパー
トに着く。

彼が現在住んでいる場所だ。

外観は白い壁が少しくすんでおり、そこそこの年月がたった見た目をして
いる。

しかし、建物の中はしつかりしていて、セキュリティは新しいものをつけている。

階層は、8階まであり、彼は5階に住んでいる。

部屋の間取りは、2LDKとなっている。

このアパートは父親の知り合いの叔父さんが経営しているので多少の融通をもらえて、月4万で住ませてもらっている。

普通はこんな物件、6万や7万近くするのだが、こちらの大学に通うことが決まり、その合格祝いと最初はタダで住んで良いと言われた。

だが、あまりにも恐縮する思いになり、叔父さんを説得して今の値段にしてもらっている。

叔父さんには頭が上がらない事だ。

彼は知らないことだが、叔父さんはそのお金を全て貯めていて、卒業の時に祝い金の一部として渡そうと画策している。

そんな事はさておき、彼は自宅に入り自室に戻ると、机の上に設置しているパソコンを起動させた。

このパソコンは、バイト代を貯めて買った最新モデルである。

ハードディスクの容量はとて高く1TBもあり、メモリは4GBある。

グラフィックボードやサウンドも良い物を使っている。

液晶モニターは、21.5インチで、値段は相当したのだが、それに見合うだけのものだと思っている。

パソコンを起動して少し待つと、デスクトップ画面が出てきた。

彼はいつものように最初にメールチェックをするためにメールのアイコンをクリックして画面を開く。

すると、新着が3件ありますと表示される。

「誰からかね」

そう呟き、新着メールを確認するために受信トレイを開くと、内二つは両親と友人からの飲み会にたいするお知らせだった。

そして、最後の一つは送信者の名前が意味不明の文字の羅列がされており、件名は、

あなたの願いを叶えます

となっていた。

「なんだこれ、スパムメールか？」

そう思い、ゴミ箱に入れるためにカーソルを合わせ、削除しようとする

カチッ

「あれ？おかしいな」

カチ、カチカチッ

「こんな時にフリーズかよ」

何度押しても動かない為に、そう結論付け、電源を切って再起動をしようとするが

「何で消えないんだよ」

さすがにヤバイと感じ始めて電源を引っこ抜くが

「おいおい……嘘だろ」

そこには、未だに真っ黒になっていないモニターが目映る。
あり得ない事に呆然としてしていると、

ピロン

と、メールが表示される音が響く。
そこには、

「ようこそ、新たに選ばれし生贄よ。
その退屈な時間は今、終わりを迎える。
非日常である日常にようこそ。
君の願いはようやく叶う。」

その文章を見た瞬間

パアッ！！！！

部屋全体が目が眩む様な光が覆い尽くす。

「おいつ、ウソだろっ！！」

その言葉を言った瞬間に意識が遠のいていった。

・ ・ ・ ・ ・

誰もいなくなった部屋に起動していたパソコンは、

ブツッ

正常な状態に戻り、画面が暗くなった。

この時を持って、彼を知っていた者達は、記憶から彼に関するものが全て消去された。

後に残るものは、この静かに時を刻む音だけが響く部屋だけだった。

記憶の整理が終わり、現実に戻ってくると、

「ということ、ここに跳ばされたという事か」

そう結論付けて下を向いていた顔を前に向けると、
静かな世界から、

カチッ、カチッ

「これは時計が時を刻む音？」

遠くから、僅かな音が響いてきた。

「しょうがない、何も情報がないんだしあの音が聞こえる方に進む

か」

そう一人ゴチで、音が聞こえる方に歩き出す。

しばらく、といっても、どれだけ歩いたかなど見当も付かないが、足が少しだるくなるくらいは歩いていると、前方から大きな時計が視界に入ってくる。

その頃になると、音もかなりはつきりと聞こえてくる場所まで来ている。

もう少しだなと思い、歩みを止めていた足を再び動かそうとすると、

ピカッ！

「うわっ」

視界を防ぐようなまばゆい光がおこり、手で視界を防ぐようにして守る行動を取る。

光が収まり、手をどかすと

「ようこそ、新しき管理者となりうるものよ」
「いらっしゃーい、新人君」

呆然とする俺の目の前に、二人の美女がいた。
右にいる女性は、腰より少し下まである長い白金の髪にパツチリとした碧の瞳の美女。

服は黒いローブが全身を隠しているが、その上からでも分かる自己主張をしている大きな胸を持っている。

左の女性は、黒髪を結って上の方で髪が垂れる様にしており、少し釣り目がちな紅い瞳の美女である。

服は、黒いスーツを着ており、スーツは胸元が大胆に開いており第二ボタンでしか留めていなく、扇情的な格好になっている。

靴は、ヒールに似た物を履いている。

まあ、約一名は誰なのか気付いたものもいるだろう。
当然、彼も気付き目を見開いて驚いている。

「ナ・・・ナイアルラトホテップだと・・・」

その言葉に黒髪の女性は

「へえ、ボクを知ってるんだあ。それと、ボクのことはナイアでいいよ」

妖艶な微笑をたたえて、嬉しそうな声をだす。

「ああ、まあな。それと、これからはそう呼ばせてもらつよ。ところで、隣のあなたは？」

「これは申し遅れました。わたくし私は時を司る神でクロノスと言います。
お見知りおきを」

「こちらこそよろしく、クロノスさん」

「クロノスで構いません。火焰さん」

「分かったよ、クロノス」

彼女がぺこりと頭を下げたので、こちらもお辞儀をして言ったのだが、呼び方が御不満だったらしく、訂正を言ってきた。その言葉に苦笑しながら、訂正して呼びなおす。

「ふふ〜ん、仲が良くなっただけだね、お二人とも。なんだか焼けちゃうね〜」

「そ、そんな別に／＼」

「そうか？」

ナイアが会話に加わり、からかう様に言うと、クロノスは少し慌てるように言葉を返し、俺は普通に返した。

それを見てナイアは、クスクスと笑い、クロノスは少し頬を紅くして沈黙する。

そんな二人を見ると、いつのまにか微笑んでいた。しかし、このままでは話が進まないと思い

「それで、お二人さんは何故ここにいるんだい？」

「それはですね、あなたをここで待っていたのです」

「そうそう、ちなみにこの空間に連れて来たのはこのボクだよ」

「なっ、じゃああのメールも・・・」

「そうさ、ボクがやったことだよ」

「すみません火焰さん。この空間に来て貰うためには、こうするしかなかったのです」

尋ねてみると、この真つ暗な空間に来た理由は、彼女達が俺を呼ぶためにやった事らしい。

その事でクロノスは、すまなさそうな顔で謝ってきた。

しかしこれで、何故この空間に来たのかという疑問が解決し、少しスッキリした。

だが、肝心の理由の方は、まだ聞いていない。

「来た方法は分かったし、別に怒ってないよクロノス。しかし何故俺を呼んだんだ」

「それについては、ボクの方から説明させてもらうよ、火焰君」

「頼む」

「いま、クロノス達神は非常に危険な状況に立たされている」

「それはどういうk」「はいストップ、話は最後まで聞いてね」分かった」

「うん、よろしい。と言つてもね、別に死んじゃうとか、そういう事ではないんだよ。」

ボクたち神には、死という概念はないんだよ。神話で倒されたうんぬんは、人間側がそう思っているだけで、

実際は、復活するために寝ているに過ぎないんだ。

おっと、話がそれってしまったね。

つまり、管理する世界が余りにも膨大に増えてね。世界の管理システムが危険な状況になってきてしまつてね。

このままでは全ての世界が消滅してしまうんだ。もちろん君の世界もね。」

衝撃の事実が、ナイアの口から紡ぎだされる。

余りの事に驚き、呆然となるが、それでも此処に呼ばれたのは何故なのか分からない。

その事を思い出し、再び話を聞こうと意識を戻す。

「それで、どうしてその話が俺が此処に来た理由になるんだ」

「いい質問だ。つまり君は選ばれたんだよ。新たなる神の一人として、管理者としての資質があるからね」

「つまり俺に管理者になれということか」

「ご名答、そういうことさ。しかも、管理システムがバグを起こしかけていてね、幾つかの世界が、危険な状況になろうとしている。

おっと、何も今すぐどうこうなるわけじゃないんだ。

だからそこで、君には修業をつんでもらつて、力つけた後にバグが入った世界の修復と管理をお願いするよ」

以上だね。と彼女は締めくくる。

あまりにも夢幻ゆめげんのような話だが、彼女達の目を見ると真実のようだ。その事実^{じじつ}に少し考えるが、心は手伝つと決めていた事に少し笑つてしまう。

だから彼女達に向かつて、結論を伝える。

「分かった。その仕事、俺がやろつ。これからよろしく頼むよ」

「ふふ、よろしくね。火焰君」

「よろしくお願いしますね。火焰さん」

二人に了承の意を伝えて、挨拶をすると、二人も微笑みながら返事をくれる。

そんな会話を終えて、今更ながらのことだが、何故自身の名前が分かるのかと思ったが、神様だからだろうと結論付けた。

結論が出て、二人に意識を戻して、話を進めるために口を開く。

「ところで、修行をするのは良いが、能力も何もない状態でも大丈夫なのか？」

「そこは心配いりません。私達があなたに能力を授けます」

「と言っても、多く能力はあげられないんだよね。せいぜい三つくらいかな？その分、強力な物でも大丈夫だよ。

しかし、多すぎたり、強力すぎると副作用が必要になってくるから気をつけてね」

二人の返答を聞き、さっそく考え始める。

数多の世界で、どんな世界に行くのかも分からないし、どんな事態にも対応できるようにしないといけない。

住む場所もその時代に合わせたものにしないといけないだろうが、それはなんか嫌だな。

特に、今の時代よりも昔の住処は、とてもじゃないが衛生面でも色々と納得できないものが有るかもしれない。

「一つ目が決定した、なりきり師の能力をくれ、どんな人物の能力や経験の引継ぎはもちろん、本人よりも強くなれるようにしてくれ」

「二つ目は、俺だけの部屋をくれ、もちろんガスや水道、電気が通ってる状態のモノを」

「三つ目は、容姿や血統の事なんだが、俺の考えを読んでいいからその通りにしてくれないか？以上だ」

三つ？の、要求を言って、二人に確認を取る。

「うん、それじゃあ、頭の中を覗かせてもらうよ。ふむ問題ないよ。しかし、強力すぎるから、副作用を付けるのが条件だね」

「ええ、そうですね、条件付なら大丈夫です。部屋の方は、別次元にある惑星を一つあなた様に改造してプレゼントします。

もちろん、食材の方面などは気にしないで下さい。こちらで手配しておきますね」

「後は、もしその世界で大切な人が出来たら、こちらの事情を話して了承をもらえたら、契約したらいいよ。

そうすれば、キミの眷属となつてその家に一緒に住めば良いし、他の世界でも呼び出せるようにしておくね」

ナイアに俺の考えている容姿などを見てもらったが、副作用が必要なのか。

やはり、強力すぎたのだろう。

まあ、それは仕方がないと思う。

それに、使用すると死ぬような副作用なものはないだろうし、出来

ないだろう。

そう結論が出て、

「解った、副作用ありで頼む」

「了解したよ。副作用の方は・・・うん、これとこれとこれが付くみたいだね。これで大丈夫かい？」

「副作用の方は・・・おい、これは不味いんじゃないのか。変更は出来ないのか」

「変更は出来ないね。大丈夫だって、相手も同意したら大丈夫だろうし、そういう所に行けばいいんじゃないか」

「ちなみに、一定の年齢に達した時点で、周期的に来る様になっておりますので、気をつけてください。

それまではもう一つの方で、代わりをするようにしておきますね」

副作用の内容を見て絶望をしている側で、ナイアは笑いながら言い。クロノスは、副作用についての補足を苦笑しながら話した。

「まあ、このままじゃ可哀想だし、君にこの能力をプラスしてあげるよ」

ナイアが提示したのは、

幸運 A、金運 A

「あとはこれだね」

そういつて、複数の武器と衣装をくれた。

「おい、良いのかこれは」

「大丈夫だよ。むしろこれがないと、これから先は、とてもじゃないけどきつすぎるからね。

ちなみに衣装の方はおまけだよ」

「そうですね。これくらいないと大変かもしれませんね」

「どんな世界なんだよ、まったく。まあ、ありがとう」

どんな世界なんだよと、一人頭を抱えていたが、ありがたく感じお礼を言う。

「どういたしまして」

「気にしないで下さい」

微笑みながら言われた。

「さて、そろそろ修行するために、世界を移動してもらおうよ」

「ちなみにその世界では、あなたの住んでいた時代より科学技術はとても進んでいます。

法律の方は、少し違いますね。奴隷なども普通にいますし、売買の方もされています。

ちなみに、その世界の収入の大部分にダンジョンが関係しているようですね」

「ちようど良かったじゃないか。君には必要なものだからね。その法律は。」

それに一夫多妻制ときたか、ハーレムだね、ハーレム。しかもダンジョンがあるらしいから、冒険者として頑張れば、お金も普通に稼ぐよりかは楽に貯まるだろうね」

「どんな歩みをしたんだその世界は、まったく」

二人の面白そうな顔で話す内容を聞いていると、愚痴が出てしまう。しかし、そこで修行をしないといけないのだろう。この副作用もある事だし。

ある意味、渡りに船だ。

そう思わないとやってられない。

「それじゃ、そろそろ渡つてもらうよ」

「そうですね、向こうの世界での部屋や住民登録と住む為のお金は用意しておきますので頑張ってください」

「何から何までありがとう、二人とも。それじゃ行ってくるよ」

「いつてらっしゃい、火焰君」

「いつてらっしゃい、火焰さん。」

向こうに着きましたら、部屋にいますので、机の上の手紙を読んで下さい。」

「了解。それじゃっ」

片手を上げて笑顔で言うと、二人も笑顔で返してくれた。

それから、足元から光り輝く陣が浮かび、俺の視界を光が覆うと、意識が遠くなっていく感覚に身をゆだねて、そのまま意識を失った。

第0話 プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

これから修行世界編が始まります。

第1話（前書き）

お待たせいたしました。

第一話をお届けいたします。

最初はオリジナルになりますが、これが終わりましたら、いよいよです。

それまでは、ご了承の程を。

あと、お気に入り登録と評価をして頂き、ありがとうございます。
この場を借りて感謝を。

第1話

「ん、んん・・・」

体が柔らかい物の上に乗っている感覚が伝わってくる。

意識が戻り最初に感じたものは、何かの上にいるというものだった。それを確認するために目を開くと、天井が見えた。

次に顔を横に向けると、布団が視界に入り、その先に机と扉が見える。

どうやら、ベットの上にいたようだ。

その事を理解して、ベットから降りると視界がいつもより高く見える。

どうやら願いは叶っているみたいだ、なら此処は異世界？

その事を確認する前に、机の上に手紙があることに気がつきそれを手にとって中身を確認する。

「これの事が、中身は住民票と通帳？と手紙が数枚か」

中身には、個人情報の載ったカードと幾何学模様の入ったプレートと数枚の手紙が入っていた。

二枚のカードを置き、手紙の内容を確認することにした。

この手紙を見ているという事は、どうやら無事に目的の世界に着いたようですね。

まず最初にあなたの能力の詳細を説明したいと思います。

一つ目、なりきり師についてです。

なりきり師の力は、最初は基本的な職にしかねませんが、一定のLvを超えたら、技や魔法を覚えたり、なりきることが出来ます。

特定の人物の場合は、見た目も本人と同様にすることが出来ます。

また、この能力には、部分的ななりきりと言うものが出来ます。例えば、剣士の格好で魔法やアサシンの技を使えたり、ある作品の登場人物の使えない技や魔法が使えたりします。

二つ目は、あなたの部屋についてです。

今いる部屋は、あなた専用のプライベートルームです。なるべく、住んでいた時と同じ感じにしました。

現在の住所は、高級マンションとなっておりますが、マンション一室の空間を弄っているので、部屋数も何部屋か空き状態があります。

また、一室全体に対魔法、対物理防御と認めたもの以外の魔法使用禁止、

侵入者撃退装置、能力などの隠蔽魔法が掛けられています。

部屋数を増やしたい場合は、増やす部屋数と中の装飾や広さを想像して念じれば

増えます。

玄関から出ても出来るようになっていきます。

有効に活用してくださいね。

食料の方は、常に満タンになるようになっていますが、その星特有の物は入っていないので、買いに行ってください。冷蔵庫に入れると、勝手に登録してくれます。

その後はその食べ物や食材は普通に出てきます。

三つ目は星についてです。

あなた専用の星なのですが、緑豊かで水も豊富な世界ですが、一部、大陸が浮いていたりしている所です。

所有者はあなたですので好きに使って下さい。

四つ目はステータス確認についてです。

現在のあなたのステータスは以下の通りです。

Lv	1
体力	: 285
魔力	: 105
攻撃力	: 82
防御力	: 70
魔法攻撃力	: 75
魔法防御力	: 66
俊敏力	: 65
幸運	: ??? (ふふ、秘密さ)

となっています。

この世界の初期値ではかなり良い方です。

これになりきり師の力を使って、剣士や魔法使いになるとプラス値が付きます。

もう一つの能力値表がありますので、そちらも見せておきます。

属性 混沌・悪

筋力	F +	幸運	A
魔力	F +	敏捷	F
耐久	F +	宝具	E X

となっています。

この切り替えは、頭の中で念じると切り替えます。
通常は、こちらの方が表示されます。

他のサブ能力が見たい場合は、こちらも念じれば切り替わります。

五つ目は副作用についてです。

副作用の方は、強い魔法や技、長時間の使用でなる場合と、
周期的に来るものがあります。

これについては、一つだけ救済処置をとれるようにと、させて頂きました。

これは後程、確認してもらいます。

それは念じれば切り替えが出来ますので、混乱せずにやってください。

他にも色々とありますが以上となります。

それではこれより、能力に対しての知識とその他の知識の植え込み、

どのような処置なのかを確認して頂くための作業に入ります。

ちなみにこの手紙は自動的に消滅します。

それでは、頑張ってください。

またお会いしましょう。

クロノスより

最後まで読んだ瞬間

バチバチッ

手紙から紫電が走り、魔方陣が現れる。

「こういつことかつ!!」

そう叫んだ後に意識が途切れた。

・ ・ ・ ・ ・

「いててて、頭が・・・」

意識が戻り、痛む頭を右手で抑えながら体を起こす。
書かれていた処置が、どのようなものなのかを確認するために体を見してみると、

「む、胸が・・・ある・・・だと・・・」

視線を下に向けると、地面が見えなくなっている。

本物かどうか気になり、両手で掴んでみるが、柔らかい感触が手から伝わってくる。

信じたくないと思い、一縷の望みをかけて下のほうも触ってみるが、

「な、無い・・・無いよ」

男性の象徴とも言えるものが無く、手がポフポフと空しい音がする。声もよくよく聞いてみると、音域が高くなっていて完全に女性の高さになっている。

そう、”女性の身体”なのだ。

これが、クロノスの言っていた処置なのだろう。

容姿が気になり、ベッドの近くにある姿見が出来る鏡が有るのでそれで確認してみると。

胸は大きく、所謂、巨乳というもので、括れもあり、足はモデルのようにほっそりしている。

顔は、余り変わっていないが、髪の毛の長さが耳を隠すほど長くなり、後ろは首より少し下まで長くなっている。

服装は、下にグレーのインナーを着ているが、胸がかなり押し上げている。

グレーのインナーの上に、黒のベストを着こなし、手には、黒のグローブを着けている。

ベストは、襟に白い毛が使われ、フサフサしている。

裾の長さは腰付近まであり、ジッパーが付いていて、袖は、長袖になっている。

ベルトは皮製の物で、その上に、太い物と細めのベルトをクロスして身に着けている。

黒い長ズボンは、右の太ももに三つのベルトで締めしており、黒い靴を履いている。

FF？のスコールの私服と同じ状態である。

スコールが女性になるとこんな感じ？という姿になっている。

つまり、クールビューティーな女性になったということだ。

しばらく呆然と見ていたが、手紙の内容が頭を過ぎり、確認作業に戻ることにした。

「しょうがない、この事は置いておいて、知識の確認といこうか。書かれていた内容の知識はあるようだな。他には、衣装チェンジの仕方や

武器の出し方、この世界の常識か。

衣装の方は、女性版でも男性版でも勝手にサイズを合わせてくれるのか、

便利だな。

武器の方は、剣が大剣が一振りにガンブレードとバスターソードにクラウドが使っていた合体剣とセフィロスの正宗か。

後は、杖にナイフに槍に弓矢にグローブに特殊ガントレットとブーツ一式に

二挺拳銃か。

他には、大鎌に大斧、乗り物としてクラウドの乗っていたフェンリルの改造

したものか。

大剣の方は、プリズムアークのテレサが使っていたやつか、
名前はエクスピアティオ、ラテン語で「贖罪」の意味を持っている
十字剣

だったか。

こんなものか。

次は衣装だ。」

一通りの確認を終えると、どんな衣装があるのか確認するために
頭の中で念じてみる。

すると、特殊職と書いてある一覧と一般職の一覧が出てきた。
まず最初に一般職を確認してみる。

剣士

魔法使い

銃士

ヒーラー

拳闘士

鎌闘士

格闘家

アーチャー

ランサー

忍

アサシン

ウォーリア

侍

特殊形態（ワーウルフ狼人間、吸血鬼、鬼、ドラゴン）

となっていた。

次に特殊職を見てみると、

テイルズシリーズ

リリカルなのはシリーズ

ファイナルファンタジー？ / ？

ネギま！？

・hack//G.U.

東方project

アルトネリコ1、2、3

プリズムアーク

平成仮面ライダーシリーズ

無限のフロンティアEXCEED

「一通りの職業にはなれるな。

しかも、特殊形態もあるのか。

そにしても、特殊職の方の衣装が少ないのは何でだ？

FFの一部のキャラクターとプリズムアークのテレサに

無限のフロンティアEXCEED版のアシエン・ブレイデルしか
なれないぞ。

きつと何かあるんだろう」

少し悩んだが、無駄だと思いきえるのをやめた。

この後も、次々と確認していると

グゥ

と中の音がなった。

時間が気になり、ベッドの上に立て掛けて置いてある時計を見るとお昼の13:00と表示されていた。

「どつりでお腹がすく訳だ。一通り終わったし、キッチンの確認もするために

お昼ご飯としますか」

そう口にして、扉を開けると廊下に出たので真直ぐに進み、少ししたら右手側に扉が見えたのでそこの扉を開くと、

「やつほー、火焰君」

「こんにちわ、火焰さん」

二人ともイスに座って、ナイアは笑顔でテーブルに肘をついて手を振り、

クロノスは微笑して、軽く頭を下げて挨拶をする。

今回の二人の格好は、ナイアは以前と同じく、黒い妖艶なスーツを着ているが、

クロノスは、クリーム色のゆったりした長袖の服を着用しているの
で、

ローブを着用していた時よりも胸の大きさが判る。

下は、薄い紫色のロングスカートを穿いている。

「何している」

自分が今感じている思いを、そのまま声に出していた。

「何って、君を待っていたんだよ火焰くん」

「それと、一緒にお昼ご飯を食べるためですよ」

用意は出来ています。と視線をテーブルの上に向けるとオムライスが、

彼女達の分と向かい側に一つ置かれていた。

俺の分なのだろう。

釈然としないものも有るが、まずは先にオムライスを食べてしまおう。

そう考えた俺は向かいの席に座り、

「いただきます」

「「いただきます」」

そう言って、三人で食べ始めた。

「この卵のとろとろ感とデミグラスソースが良く合っているな。」

「ライスはケチャップじゃなくてバターか」

「ボクが作ってみたんだけど、お気に召したみたいだね」

「ああ、俺好みだ」

「その姿で俺と言っても違和感がありますよ」

「気にするな、俺は気にしていない」

女性が三人の食卓は賑やかに過ぎていった。
30分経ち、

「」「ごちそうさまでした」「」

「それでは、食器を洗ってきますので、くつろいでいて下さい」

「手伝おうか？」

「大丈夫ですよ」

「ボクはゆっくりさせてもらおうよ」

「じゃあ、頼んだ」

「はい、任されました。少しの間待っていてくださいね」

微笑しながらそう言って、クロノスはキッチンに汚れた食器を洗いにいき、

俺達のはんびり待つことにした。

少しすると、水の流れる音が聞こえ始め、カチャカチャと食器の洗う音が

聞こえ始める。

それをBGMにしてボーっとしていると、ピタッと音が鳴るのが止んだ。

洗い終わったのだろう。

音が止んで少ししたあとに、

「お待たせしました」

「そんなに待ってないよ」

「そうだね」

クロノスの言葉に、俺、ナイアの順に答える。

「食後のお茶です」

「ありがとう」

「さんきゅ」

クロノスが、熱い緑茶の入った湯飲みをそれぞれに渡して席につい

た。

貰ったお茶を少し飲んで一息つく。

「ふゝ。それで、どうして二人は此処にいるんだ」

「それはあなたに説明しきれていなかったことの説明補足とこの世界で修行が終わった後の事についてです」

「そういうことでだ、火焰くん。この修行後には、バグのある世界に飛んでもらう訳なんだけど・・・。どんな世界かは覚えているかい？」

「ああ、確か俺の元いた世界で言う所のゲームやアニメ、漫画、ライトノベルの
パラレルワールドに行って貰うんだったか？」

「そうです。バグはかなりの数があるので、一つの世界に複数ある事もあります。

また、その世界を消滅させてしまう事があり、とても危険です」

「しかも、その世界の住人じゃ、いくら戦っても勝てないからね。つまり、その世界じゃ唯一君だけが勝てる存在だ」

責任重大だね。とナイアは人事のように言ってくる。

まあ、人事なのだろうが。

そんなナイアを見て、

「負担をかけさせないで下さい、ナイア」

と、クロノスが嗜める。

それを聞いてナイアは、はいはい分かりましたよ。と堪えた様子が無く言う。

その姿を見て、クロノスがまた言おうとしたが、

「大丈夫だよ、クロノス。そんなに気にしてないよ」

笑顔で言っていると、クロノスは言葉を引つ込めて、 はあゝ と溜息をついた。

「すみません火焰さん。 気を使わせてしまいましたね」

「本当に大丈夫だよ、クロノス。 それより続きを頼むよ」

「分かりました。 バグは当然あなたが倒さないと消えないのですが、姿がだいたい人と同じものを取ることが多いのです。

今の状態のあなたでは、その時に躊躇してしまう可能性が十分にありますので、

あなたの脳と意識を少し弄らせて頂きました。

当然、悪影響はないのですが、感情に対する表情が、少し表に出しにくいものになってしまいました」

バツの悪そうにクロノスが言ってきたが、

「そうなのか。大丈夫だよクロノス、これは当然のことだよ。
俺は今まで人を殺したことがない。
いざその場面に来たら、躊躇してしまうだろうし、下手したら攻
撃できないかも
しれない」

だから気にしなくて良い、と答えると、僅かに表情を緩めて、あり
がとう と、
クロノスは答えた。
そのまま二人で見つめ合っていたが、

「ラブラブしているところ悪いんだけど、続きは良いのかい？」

「「わっ!?!」」

横からナイアが面白そうに笑いながら声をかけてきた。

それに驚いて声を上げてしまうが、さっきまでの状況を思い出して
しまう。

その事に対して、二人して赤面してしまい、少し俯いてしまう。

おやおや、妬けるね」

そう言いながらも意地悪そうな笑顔が消えないナイアを恨めしそう
に見た。

「こ、コホン。話に戻ります／＼」

まだ頬が若干赤いがクロノスは咳払いを一つして、場の空気を戻して続きを話し出す。

「それで、なりきり師の能力ですが。衣装が当然少ないと感じていらっしやる筈ですが、

残りはダンジョンの方にランダムで設置させて頂きました」

「やっぱり。疑問に感じてたけど、どうしてそんな事をしたんだ？」

「それはね、その方が面白いというのもあるけど、その力に慣れてもらうためだよ、

火焰くん。

それに、お宝があった方がやる気も違うだろう？」

違うかい？と、ナイアは言ってきた。
それを聞いて、

「そうだな。そのほうが面白いし、やる気も上がるしな」

「そうだろう。ちなみに武器としてあるから、それを手に入れたら、勝手に容姿や服装が登録されてなりきれるようになるから」

「当然、特殊使用の物もあります。例えば、hack／／G・Uのハセヲが良い例ですね。

最初は1stモードしかありませんが、大剣と大鎌と双銃を手

入れると2nd、3rd、
Xthフォームになります。
憑神もそのようになっていきます」

「そうなのか。最初っから最強だと、慢心や油断をしやすくなるし、
状況に応じての衣装選択や判断が出来なかったらダメだもんな」

衣装の少なさに納得した俺は、クロノスに続きを促した。

「そういうことです。次に、その姿になったのは、暴走して女性を
襲わない様に
する為です」

「同意の無いものはダメだからね。だから、その姿というわけさ。
相手が出来るまで自家発電して静めてくれて事さ。
ちなみに相手が出来れば、その姿でも男のあれを出すことも出来
るからね。フフ」

「ちよつ、何て事してるんですかナイアさんっ！！私は聞いてませ
んよ！！」

それに、そういう事は、もうちよつと言い方があるでしょう！！」

ナイアの発言に、クロノスは慌てて怒るが、ナイアは何処吹く風か
のように笑いながら受け流す。

どうやらクロノスは、その事について知らなかったのだろう。
そんな姿を見たクロノスは、何を言っても無駄だと悟り、ため息を
一つついて

落ち着いた。

でも、ナイアもさりとそんな事を言わなくても良いんじゃないかと、心の中で愚痴る。

さも、自然な流れで言うもんだから、スルーしてしまった。

クロノスが突っ込まなかったら気付かなかったよ。

しかも、クロノスに黙って肉体を弄っていたのは、きっとその方が面白いと思ったから

だろう。

そんな事を思いながら、クロノスが落ち着くのを待って、続きに入る。

「お見苦しい所を見せてしまいました。すみませんでした、もう大丈夫です。

それでは続きなのですが。

残りの副作用は、性衝動が出る前の身体は、病弱なものになります。

かといって、重いものに掛る訳ではなくて、風邪を引きやすいぐらいのものです。

衝動が出始めると、これがさらに薄まります。季節の変わり目などに罹りやすくなる

程度です。

ですが、この病弱については、他の世界に転生する場合にないことがあります。

次に、女性に対して魅惑するフェロモンが出てしまうことです。

これはとても強力で、私達でも下手したら、貴方の虜になってしまう可能性が

あります。

しかし、この強力な方は常時発動してはなく、衝動と同時に発動が強力な力を使った場合の衝動の変わりに出てしまう事もあります。

これは非常に厄介で、低い効力の方は、汗でもその効果が出てしまうので、

帰ってきたらすぐに汗を流してください。

まあ、低いといっても、人間にとっては媚薬のように堪らないものがあるでしょうね。

副作用については、こんなところですね。

後、副作用とは関係ないのですが、限界以上の力を使うと、休息の為に肉体が子供ぐらいに縮む事ですかね。」

何かありますかと、クロノスは聞いてくるが、これといって特に無く。

副作用の方はどうしようもないだろうし。

せいぜい、汗をかいたらすぐに風呂に入るよう、気をつけるしかない。

子供ぐらいに縮む方も、無理をしなければ良い話だ。

その時がきたら、躊躇無く使うが・・・。

話された内容を整理していき、特に何もないので、大丈夫だと返した。

その返事に二人は満足して、頷く。

「それじゃあ、最後だよ。

乗り物なんだが、バイクが在ったよね。

それは念じればどんな場所でも現れるようになってるよ。

走れる場所も、陸だけではなく、空も飛べるようにしているからね。すごいだろう。

それに、形態変化として、大人数でも乗れるように、車にもなるから」

これが鍵だよと、俺に渡してくる。

それを受け取り、ズボンのポケットになおす。
全ての話が終わり、二人の身体が透け始める。

「さて、そろそろお別れの時間みたいだ。修行の方、頑張つてね。
火焰くん」

「無事、終わる事を願っています」

「それじゃ」

「それでは」

そう言つて二人は消えてしまった。

二人が座っていたイスは、引かれたままで存在している。

外から夕日が差し込んできている事もあり、何か物悲しくなつてしまふ。

だが、何時までもそのままにいる訳にもいかず、夕飯の準備に入る。

その後は、夕飯を食べて、お風呂に入るが、今までに無いものがあり、

無くなったものがあつたので洗いくかつたが、

無事に洗い終わり、何故かあつた女性モノの下着を着けてパジャマを着た。

途中で男に戻った時、下着はどうなるのだろうかと思ったが、男から女になった時は下着は別物になっていたので大丈夫だろうと結論を出した。

自身の部屋に戻り、明日はギルドに登録しに行く事と、初のダンジョンに挑戦しようと思い、ベットに潜り込んで眠りについた。

第1話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

何か、誤字脱字がございましたら連絡をお願いいたします。
それでは。

第2話（前書き）

第2話となります。

第2話

窓から差し込む光が、閉じている目蓋を刺激する。

ちゅんちゅん、ちちち・・・

雀の鳴き声が聞こえる。

朝になったみたいだ。

ベットの上にある時計を見ると、8：20分と表示されている。

ベットから身体を起こし、布団を退ける。

伸びを一つしてベットから降りると、扉まで歩き、扉を開ける。

廊下に出ると真直ぐ歩いて、左手にある洗面所の扉を開き、冷たい水で顔を洗う。

残りの眠気が飛び、意識がはっきりとする。

その時になってまだ女性のままだった事に気付き、男性に戻る。

洗面所から出ると少し戻り、リビングに入り、キッチンで朝食の準備をする。

今日のメニューは、スクランブルエッグにトマトのサラダに焼いたトーストが3枚だ。

トーストに、冷蔵庫にあったマーガリンとブルーベリージャムを塗って、飲み物に紅茶を淹れる。

全てを準備し終わった後は、リビングにあるテーブルに並べて、

「いただきます」

まず最初にトーストを一かじり。

口の中にバターの甘さと、ブルーベリーの甘酸っぱさが広がる。

そうして、20分程で食べ終わり、

「ごちそうさまでした」

手を合わせて言うと、食べ終えた食器をシンクに持っていく。

食器を洗い終わり、乾燥機にかけると、自室に戻り、昨日と同じ服に着替える。

今日は、昨夜考えていたスケジュール通りに行く予定だ。

内容は。

まず街に出て、銀行からお金を下ろしアイテムを買った後、ギルドに登録しに行きダンジョンに挑戦する事だ。

頭の中で内容を確認した後に、銀のプレートとバイクの鍵を右ポケットに入れて、

財布を後ろポケットに仕舞うと部屋を出る。

真直ぐ歩き玄関を出ると鍵を閉めてエレベーターに向かう。

右奥に見えるエレベーターまで着くと乗り込んで、1階のボタンを押して、下まで降りる。

エレベーターが一階まで着いて扉が開くと、そのまま外に出る。

外は少し肌寒い程度だ。

左側に駐車場があるので、そこに停めてあるだろうフェンリル零に乗るために向かう。

駐車場に着き中を見回すと、右斜めに少し行った所に、かなり大きい黒いバイクが停まっていた。

前輪は、二輪でタイヤが少し太めになっている。

後輪は一輪だが、前輪の二本を足したような太さのタイヤがついている。

マフラーは、二連式と少し楕円形になったものと逆三角形の物がつ

いている。

フロントには、サスペンションギミックが着いていて、タイヤを下に下げることが出来る。

フロントの左右アーム部分は、武器が締まっており、カウル部分が開くと

武器が出てくる仕掛けになっている。

スピードは、最高速度が300km/s出せるようになっている。

そんな大型バイクに跨り、太いステップに足を乗せ、エンジンをかける。

グウオン！！！！

と、大きな音が普通なら駐車場に響く筈なのだが、そんな音響はせず静かな音だけが

聞こえてくる。

ナイアが改造したのだろう。

騒音が出ないことに感謝しながら、ハンドルを握り右側を捻り、スピードを出して銀行を目指す。

バイクを走らせて、15分ほどで目的の銀行に到着する。

バイクを駐車場に止めて、銀行に入る。

中は暖房が弱めにいれられていて、外で冷えた身体にとっても心地よい。

入り口から見て、左側にATM機が置いてある場所の通路案内のプラカードに

従って歩く。

すぐにATM機が見えたので、右ポケットに入れていた銀のプレートを差し込み口に

入れて、引き落としを選択する。

暗証番号は無い様だが、代わりに右人差し指の指紋と目の紋様認証を求められて

したが、初めての登録の時はどうしたのだろうかと疑問に思ったが、きつと俺そっくりに化けて登録したのだろうと、結論を出した。

そんな益体の無い事を考えていたが、残高が表示されたので確認してみると、

「おいおい、嘘だろ」

そこには、500億3,000万の数字が表示されていた。

余りの額に驚いていたが、奴隷はとても高価なんだろうと思い、納得した。

それに人数が増えれば、その分の食費や回復アイテムなどの経費もあるのだろう。

先の事を考えながらも、アイテムの値段や何が必要になってくるか分からないので、

とりあえず、100万を下ろして、後ろポケットにある財布にプレートと一緒になおした。

用事が済むと銀行を出て、再びバイクに乗って、次はギルドを目指す。

銀行から10分ほど大通りを行った所に、役所兼ギルドと書かれた看板をつけている

建物が見えた。

建物の隣にある駐車場にバイクを停めて、役所に入る。

中に入ると、大勢の人達で賑わっている。

受付をしている人やパーティを組んでいるのか、数人で集まっている姿が見える。

そんな中、さつさとハンター登録を済ませるために受付に向かう。

受付のカウンターで、一箇所空いている場所が見つかり、そこに向かう。

受付カウンターには、グレーの上品なスーツを着ている、肩に掛かるくらいの黒髪の女性がいた。

「すみません。ハンター登録をしたいのですが」

「ハンター登録ですね。こちらの用紙に必要な箇所に記入をお願いします」

笑顔で対応されて、用紙を貰う。

その記入用紙に、名前、性別、年齢、生年月日を記入していく。最後に、

ダンジョンで死んでも当方は一切の責任を負うことが無いことを承諾しますか

この項目にチェックを入れて、

「記入終わりました」

「はい……、記入に問題はありません。少々お待ちください。
お待たせいたしました。それではこちらを」

そういつて個人情報載っているカードを貰う。

個人情報以外には、ハンターランクがあり、そこにはEとなっていた。

時計機能もついているのか、9:50と表示されている。
カードを繁々と眺めていると、

「今からハンターに関する説明をさせて頂いてもよろしいでしょうか」

「あつ、お願いします」

「かしこまりました。

まずハンターランクなのですが、こちらは下から、E、D、C、

B、A、S、EX

となっております。

特定の階層を突破すると、自動的に更新される仕組みになっております。

EXになった場合は、現段階で最も下の下層までいった人にのみ与えられるもの

となっております。

次にお金の入手方法なのですが、ダンジョン内で手に入れたアイテムなどは

その方の物になります。

モンスターを倒すことで、白い輝く結晶球が手に入ります。

弱いモンスターの場合、輝きが弱く値段も安いのですが、輝きが強ければ、

高価なものになっていきます。

100階層事に色が変わり、最初が白。次に青、緑、赤、黒と現段階で判明している色はこれだけです。

結晶球の持ち運びは、そのカードを結晶球に向けると勝手に収納します。

換金したい場合は、こちらに持ってきて下さい。量と輝きの強さによって

お金をお渡しします。

次にダンジョン内の事ですが、ダンジョンは潜る度に通路が変化しますので

気おつけて下さい。

また、宝箱も常に新しい物が出てきています。

たまにかなり離れた下層のモンスターが現われたり、隠し通路があつたりします。

10階層事にワープ装置がありますので、到達階層に行きましたら、カードを使って

登録して下さい。

次回からは、入り口に入つてすぐ隣にある装置に乗ると、その階層から始められます。

次に、ギルドについてです。

ギルドは、人数が三人から作る事が出来ます。

作った場合、ギルド専用の部屋と専用の紋章がつきます。

紋章の方は、絵を描いてこちらに持ってきて下さい。

所属された方には、装備品などに専用の紋章を刻まさせて頂き、所属をわかるようにさせて頂きます。

ギルド部屋は、ギルドリーダーのハンターランクによって部屋のランクが

上がります。

上のランクに成る程豪華な物になっていきますので、頑張ってください。

他には、決闘システムというものがあります。

こちらは、ギルド同しや個人と個人、個人とギルドの対立があった場合に

使用されることになります。

決闘に勝った者は、敗者に絶対命令権があります。

以上です。

何かご質問はございますでしょうか」

長い説明を聞いて、情報を整理していく。

これといって聞きたい事も特に無かったので、

「いえ、大丈夫です」

「かしこまりました。それでは、ダンジョンの入り口は解りますか」

「そっちも大丈夫です」

ダンジョンはいつでも入る事が出来るし、出る事も出来る。入り口の方も、昨日の知識の中に入っているので大丈夫だ。

「それでは、お疲れ様でした。お気をつけて」

受付の女性が笑顔で終了の言葉を言ったので、貰ったカードをポケットに仕舞い、建物から出る。

隣の駐車場に停めていたバイクに乗り、アイテム屋に向かう。

役所から出て、10分くらい進んだ所で、丸フラスコのような絵が描かれている看板を吊るしてある建物が見えた。

ここがアイテムを売っている店なのだろう。

店の脇にバイクを停めて、店の中に入る。

「いらつしゃいませー」

自動扉をぐぐり中に入ると、恰幅の良い女性が入店の際の言葉を言ってくる。

入ってすぐにカゴがあったので、それを持って中を見回す。

店内は、様々な薬が棚の上に所狭しと並んでいる。

その中から、体力回復と魔力回復、異常状態の回復の薬をそれぞれ10個ずつカゴに入れていく。

ちなみに、体力の方は120円、魔力の方は150円、異常状態回復の方は200円だ。

それら必要な物をカゴに入れ終わりレジに持っていく。

「お会計お願いします」

「はいよ。合計で4、700円になります」

「ちょうどで」

「確かにちょうど貰ったよ。後これはサービスさ」

そういつて、ポーチを貰う。

「これは？」

「異空間に繋がっているポーチさ。これに入れておけば、かさばる事もない

便利なものさ。

ベルトに通せるようにしてあるから、邪魔にならないよ」

「ありがとうございます」

「なに、気にしなさんな。丁度キャンペーン中だっただけさ」

「それでは。これで」

「またのお越しをー」

貰ったポーチをベルトに通して、右側につける。

おばさんにお礼を言って、店を出る為に入り口に向かって歩き出す。出る際に、おばさんの声を背中で聞きながら、またこの店で買おうと思ひ

自動扉をくぐる。

外に出て現時間を確認してみると、10:30と表示されている。

入り口の脇に停めていたバイクに跨り、いよいよダンジョンに挑戦するために、

ダンジョンの入り口に向かい、バイクを走らせる。

途中で、お昼ご飯用のサンドウィッチと飲み物を買って行くのも忘れずにする。

バイクを走らせて20分して、ダンジョンの入り口に着くが素通りする。

実は、ダンジョンから5分くらい行った所に住んでいるマンションがある。

なので、一旦バイクをマンションの駐車場に停めて、歩いてきた。

入り口前に来ると、人がたくさん出入りをしていた。

人々の表情はそれぞれで、嬉しそうな笑顔や悔しそうにしている人たち等、

様々だ。

そんな人たちを避けて、入り口にたどり着く。

そこには大きな門がついていて、門や入り口周辺を大きな魔方陣が囲んでいる。

どうやら、入り口からモンスターが出て来れない様になっているのだから。

門を通り抜け、地下に続く階段を下りていく。

地下一階に下りると、辺りは薄っすらと光っていて、少し先の通路まで見ることが

出来る。

地面は石を敷き詰めたものになっていた。

辺りに誰かいないかを確認すると能力を使用する。

頭の中で、ガンブレードと職業は剣士を選択する。

すると、右手にガンブレードが現われて、身体には軽くなった感じと力が増した感覚が来た。

ガンブレードを一振りして、思考を戦闘用に切り替える。

辺りの気配を探ると、前方に何かの気配を感じることが出来た。

おそらく敵だろう。

初めての实战なので、なるべく足音を立てずに慎重に進んでいく。

少し進むと目の前に、ゼリ状のモンスター、スライムが見えた。

スライムは目とかは無いのだが、真ん中に核のような丸い物がある。あれが弱点なのだろう。

というか、テイルズでお馴染みのモンスターと同じ姿をしている。まだこちらに気付いていないみたいだ。

「先手必勝、魔神剣！！」

右手に持つ、ガンブレードを左側から逆袈裟に切り上げると、

衝撃波がスライムに突き進む。

技を放った後に、スライムは気付いたようだが遅すぎた。

そのままスライムを半分に切り裂き、悲鳴を上げることも無く消えた。

スライムのいた場所には、輝きが弱い白い結晶が一つ落ちていた。結晶に近づき、ポーチに入れていたハンターカードを取り出して、結晶球に向かってかざす。

すると、カードと結晶球が淡く光り、カードに吸い込まれた。

吸い込まれたのを確認すると、カードをポーチの中に直す。
仕舞い終わると、再び敵を探しながら、次の階層に行くための階段を探す。

階段を探している途中で、スライム4体と戦闘をしたが、さして強くも無く。

魔神剣や袈裟切りの一撃でやられていった。

粗方歩き回り探索したが、未だに階段が見つからない。

次の広間が見えてきて、これで最後になれと思い進んでいくと、

「ん、モンスターの気配か？」

この先の空間から複数のモンスターの気配がした。
気配を感じた事で慎重に進んでいく。

広間の前まで着き、身を隠しながら中を覗く。

「ビンゴだ」

広間には下の階に続く階段が見えた。

しかし、その前には棍棒を持ったモンスターがいた。

肌は緑で、ボロボロな皮鎧を纏い、耳の尖った醜い顔をしていた。
ゴブリンだ。

ゴブリンは二匹おり、通路の前に立ち塞がっていた。

今までは、一体一体だったのだが、今回は複数だ。

少し骨が折れそうだ。

だが観察をしていると、まだこちらに気付いていない状況だ。

まだ複数で攻撃されると対処しきれないので、各個撃破を狙う。ゴブリン達が後ろを向くのを待ち、

「今だっ、魔神剣っ」

通路から飛び出し、一体を牽制する為に技を放つ。

こちらに気付いた2匹いるゴブリンの左側の奴に、魔神剣が当たり遠くに吹き飛ばされる。

それをちらりと見ただけで確認すると、もう一匹に突っ込む。既にゴブリンは迎撃体勢に入っていた。

「いくぞ、ふっ」

ガンブレードを敵めがけて叩き付けるが、棍棒で防いでくる。

棍棒とぶつかり合い、鏑迫り合いになる。

体格が小さいくせに、一体何処にそんな力があるのか不思議に思ってしまう。

このままだと、吹き飛ばしたもう一匹のゴブリンが此方に来てしまう可能性が

高くなる。

こうなったら、

「吹き飛ばっ！」

ガンブレードのトリガーを引き、

ガウン！！

銃弾が射出され、ブレードが振動する。

その勢いで、吹き飛んだゴブリンを追い、

「虎牙破斬つ！！」

ガンブレードを斬り下ろし、すぐに斬り上げる。

切り裂かれたゴブリンは、悲鳴を上げて消える。

それを見た後、結晶球を確認せずに、すぐにもう一体のゴブリンの方を向く。

瞬間、

ガキーン！！

すぐ近くまで迫っていて、棍棒を振り下ろすところだった。

一か八かの賭けで、防御する為にガンブレードを振り下ろす。

何とか間に合ったが、体勢が悪く、軽く吹き飛ばされてしまった。

すぐに体勢を立て直し、相手を見ると5mも離れた位置から、こちらに向かってきている姿が見える。

この距離なら、

「職業ランサーにチェンジ」

職業をランサーに変更して、持っていたガンブレードも手から消失した。

代わりに、全長2mもある鉛色をした槍が手の中に納まる。

槍を両手で持ち、身体を半身にする。

あと、3m。

「この一刺しで決める!!」

全神経を穂先に集中させて、力を溜める。

2m30

2m

・

・

・

1m30

今だっ!!

次の瞬間、今まで溜めていた力を解放し、高速の突きを繰り出す。
槍の先端は、相手の心臓に向かい。

ザシュッ

「ぐえっ!？」

ゴブリンの心臓に突き刺さり、そのまま貫通する。

一瞬、時間が止まったような感覚がした後に、ゴブリンの声が聞こえた。

刺し貫いたゴブリンは輝き始め、だんだん消えていく。

キィン

石で出来た床に、スライムの時よりも幾分輝きの強い結晶球が落ちる。

結晶球は、何回かバウンドしたあとに少し転がり、止まった。

「ふう、終わった」

突き出した体勢から体を元の体勢に戻し、手に持っている槍を消す。結晶球の前まで来てそれを拾うと、最初に倒したゴブリンの場所まで戻る。

そこにも同じように落ちている結晶球を見つけると、ポーチに入れていたカードを取り出して、収納する。辺りに何も無いことを確認すると、地下に続く階段に向かって歩を進める。

階段に向かいながら、最初がこの調子だと

これから先はどうなるのだろうと、少し不安と暗澹としたものになってしまう。

しかし、考えてもしょうがないと気持ちを切り替える。

「どんな相手でも油断をしない。それだけだ」

小さく言葉に出して決意を固めると、歩みが自然と少し強めになる。次は地下二階。

気を引き締めて、階段を降りて行く。

第2話（後書き）

誤字脱字がございましたら、報告をお願いします。

第3話（前書き）

第3話になります。

第3話

地下2階に着いた。

この広間には、敵がいなみだ。

気が緩み、ホッと息をつく、

グ

腹の虫がなる音が聞こえた。

地下1階では、初戦闘や探検で気を張り詰め過ぎたせい、時間を気にしていられなかった。

だが、この階に敵がいな事で気が緩み、お腹が空腹を訴えてきたのだろう。

現在の時間が何時なのか気になり、ポーチに入っていたカードで時間を確認する。

13:40

と、表示されていた。

通りでお腹が空くわけだ。

周りに敵の気配が近づいて来ないかどうかを探る。

どうやら大丈夫の様だ。

ここで、遅い昼食を取る事にしよう。

ポーチにカードを仕舞い、昼食用に買っておいたサンドウィッチと飲み物を取り出す。

サンドウィッチの具は、ツナチーズとカツとトマトレタスだ。
飲み物は、アップルジュース。
袋から取り出して、

「いただきます」

手を合わせて言った後、サンドウィッチに手を伸ばして食べ始める。
関係ない話なのだが、俺は好きな物を最後に食べる方だ。
なので最初に、トマトレタスサンド↓カツサンド↓ツナチーズサ
ンドの順で食べた。
途中で、口の中が乾くので、ジュースで口を潤しつつ食べていった。
最後まで食べ終わり、残り半分になっているジュースを飲み干す。

「ごちそうさまでした」

手を合わせて言い終わると、袋にゴミを入れて縛ると、ポーチに仕
舞う。

「さて、満腹になった事だし。探検を再開しますか」

気を引き締めなおし、何も持っていなかった右手にガンブレードを
出現させて、
先に進む。

進んでいくと通路の先にモンスターの気配がするが、前の階と違い、

複数の気配がする。

数は、1、2、3・・・と、3体。

どんなモンスターかわからないので、気付かれないように少しずつ進んでいく。

視界に姿が見えてきた。

どうやら、上の階にいたスライムと同じようだ。

少し離れているが、向こうは気付いたようで3体同時に突進してくる。

「行くぞ、魔神剣・双牙!!」

ガンブレードを2回振る。

衝撃波を2つ、別々に飛ばして、2匹のスライムを切り裂いていくが、

もう一匹がこっちに迫ってくる。

振り上げた体勢からでは、急いで体勢を戻しても間に合いそうもない。

そう、このままなら一撃は貰っていただろう。

しかし、

「魔神拳っ」

右手に持っていたガンブレードを消して、徒手空拳になる。

左拳をすぐに腰より後ろに引いて、振り上げる際に衝撃波を放ち、切り裂く。

「ピギッ」

鳴き声が聞こえた後、スライムが消え、結晶球が出てくる。体勢を元に戻して、取りに行こうとすると。

「がつ」

背中から、強い衝撃が走る。

前方に飛ばされるが、すぐに体勢を整えて攻撃してきた相手を見ると。

赤いスライムが離れた位置にいた。

あいつが攻撃したのだろう。

先ほどのスライムとは違い、威圧感が違う。

頭の中で、剣士から狼人間ワウルフにする。

すると、五感が人間の時よりも鋭くなり、筋力もかなり上がっている。

「行くぞ。うおおおおお!!」

雄叫びを上げて、力を解放すると、身体の筋肉が膨れ上がり、顔の形も獣の様な顔つきに変わる。

毛も生えてきて、牙が鋭くなり、目も肉食獣と同じ、瞳孔が縦に割れている。

人の時より遥かに速いスピードで肉薄する。

「はっ」

瞬時に近づくと、右手の鋭く伸びた爪を振り下ろして真つ二つにする。

真つ二つになった赤いスライムは淡く輝いた後、ゴブリンの時よりも強い輝きを放つ

結晶球と箒？が出てきた。

先ほどの様な不意打ちが起こらないよう、鋭くなっている感覚を使い、周囲を探る。

・・・いないみたいだ。

安全を確認した後、人間に戻り、全ての結晶球と箒？を回収する。

回収した箒を確認すると、全体がメカのようになっており、

柄の途中はトリガーのついた取っ手がある。

柄と掃く部部の要付近は、赤い蝙蝠の羽根の様なものがついている。

「これはもしかして・・・」

この箒？に見当がついて、なりきり師の特殊能力欄を確認すると。

無限のフロンティアEXCEED
キュオン・フリーオン

新しく追加されていた。

この筈は”戦術砲機” ブロンテ・クラフトの様だ。

良い物が手に入ったと嬉しくなり、試したい気持ちに駆られる。

すると、丁度いいタイミングで、ゴブリン4匹が向かってきている。

「さっそく試すか」

職業を、キュオンに変更する。

すると、身体が縮み、髪が足の付け根近くまで長くなる。

髪の色は、亜麻色で二つに分けて先端近くで、赤い色をしたメカの髪留めをしている。

服装は、魔女の様な格好をしているが、黒いフリルのスカートはとても短く、

太股をほとんど晒している。

右の太ももの真ん中辺りに赤い布に黒のフリルのついた物を巻き、頭の上には、とんがり帽子に黒いベストを着ている。

靴は黒いリングが足首に装着されて、靴がずれない様になっている。服装の色は、赤と黒で統一されている。

お尻より少し上の位置から、悪魔に似た三角形の尻尾が生えている。左手に、ブロンテクラフトを持ち、

「キュオンのマジックショウ始まるよ！」

言った後に、ブロンテ・クラフトを起動させて、跨る。

起動したブロンテ・クラフトは宙に浮き、すごいスピードで遠くにいる敵に接近していく。

「見えそうで、見えな〜い」

何となく言いたくなっただので言ってみる。
言ったあと、兵装を起動させる。

「いくよ〜、ビーーーームっ」

ブロンテ・クラフトを滞空させると、三つのビットが箒の掃わく方から飛び出してきて、

縦の円を描くように周回しながらビームを放つ。

放ったビームは、2匹のゴブリンに当たり、消滅させる。

「次いくよ〜」

帽子を持ち、敵側にかぶる方を向けると、拡散したホーミングレーザーが

一匹のゴブリンに殺到して命中する。

「これで終わりだよっ！ブロンテソードっ」

箒を敵の射線上に操作して、飛び降りる際に突っ込ませる。

「ギャッ」

箒の先端が命中して、最後の一匹に当たると、箒は向きを変えて手元に戻ってくる。

ブロンテ・クラフトを左手でキャッチすると、

「キュオンの敵じゃないね」

そう言つて、元の姿に戻る。

「何か疲れた」

元々、あんな陽気な性格じゃないせいか、精神的に疲れた。

少し、うんざりした気持ちになりながらもゴブリン達の居た場所を見ると、

ビームの当たった場所は少し焦げていたり、へこんだりしていた。特に最後の一匹の場所には、他のよりへこみが大きかった。

「威力がすごいな」

そんな感想が口から出てくる。

結晶球を回収した後、体力と魔力の回復薬を飲んで、先に進んでい

く。

10階に来るまでの間、特に変わったことは無く。
敵が複数で出てくるだけで、余り変わった事はなかった。
ココに来るまでの間、手に入れたアイテムは

時を刻む懐中時計

銀のナイフ×100

大岩で作られた斧剣

この3つだ。

そのおかげで、東方の十六夜咲夜、Fateのバーサーカーになれる。

だが、バーサーカーはゴッドハンドを発動させるにはレベルが足らず、

少し劣化した感じだ。

それでも、この階層で破格の能力を手にいれることが出来た。

レベルの方もモンスターが複数で襲ってくる。

その度に倒していたので、現在はLv15だ。

能力値も当然上がっている。

現在はこうだ。

Lv15
体力 : 1685
魔力 : 1250
攻撃力 : 655
防御力 : 620
魔法攻撃力 : 630
魔法防御力 : 600
俊敏力 : 610
幸運 : :??? (ふふ、秘密さ)

もう一つの方で表すと

属性	混沌・悪
筋力	E+ 幸運 A
魔力	E- 敏捷 E-
耐久	E- 宝具 EX

となっている。

最初に比べるとかなり上がっているのが解る。

ちなみに、ヘラクレスのゴッドハンドや他の英霊の宝具の真名を使用する場合は、

最低でもLv80は必要である。

やはり、精霊と同等に格上げされている事もあるからだろう。

いくら管理者としてのスペックがあるにしても、この情弱な肉体で

は、

強力な力を行使する事に耐えることが出来ない。

でも、咲夜の『時間を操る程度の能力』と、ヘラクレスのバーサーカーとしての

ステータスがある分、助かる。

そろそろ、この10階の目的のボスを倒すしよう。

今のところ、一直線と進んでいく通路しかない。

しかも、段々としやれにならない威圧感が身体全体を襲う。身体から吹き出る冷や汗が止まらない。

それでも前に進み続け、大きな扉の前に着いた。

この先に、この階の主がいるのだらう。

今までの、基本職では相手にならない可能性がある為、特殊職から十六夜咲夜を選択する。

今回は、見た目は変えないようにした。

これで不意打ちをしてきても『時間を操る程度の能力』を使用すれば、

攻撃を受ける可能性がかなり低くなる。

本当は、ヘラクレスにしたかったのだが、抗魔力と防御力を上回るものを出されたら

死んでしまうので却下した。

まあ、死ぬなんて事は無いのだが・・・、気分の問題だ。

いつでも武器と能力が発動できるようにしておき、扉を開ける。重厚な造りの扉は、さして重くもなく開くことが出来た。広間に入り、最初に目に飛び込んできたものは火竜だった。身体が炎で出来ているのか、生身というものが見えない。見た目は、大きな目に長いひげを生やしている。周りには、大小さまざまな炎の球が無数に浮いている。どう見ても烈火の炎に出てくる『崩』だ。この階で出てくるには、明らかに間違っていると思う。オーバーキルもいいところだ。目の前の現実が認められないと逃避していると、

「あなたが今回選ばれた管理者ですか」

この龍の見た目に反して、凜とした可憐な女性の声が聞こえた。それと同時に、龍の姿が消えて一人の女性が現われた。見た目の年齢は、18歳くらいで原作より少し大人びている。綺麗な黒髪は、ポニーテールにしている、顔付きはとても凛々しい。体型は、出るところは出ていて、引っ込むところは引っ込んでいる。服装は、白い半袖の羽織のような和服を着て、黒い野袴と呼ばれるズボンを着いて

おり、足にはわらじを履き、胸にはサラシを巻いている。見た所によると、胸の大きさは手のひらから少しはみ出す位だ。

彼女の一言で、意識を現実に戻すと、

「何故知っている。と言ってもいいかな」

「ナイアルラトホテップとクロノスという方から伺いました」

「あいつらか」

「そうです。貴方の力になって欲しいと頼まりました。
しかし、私を使役するだけの力があるか試させてから判断したい
と言つと、

この場を設けて下さいました」

「なら、おまえに力を示せたらOKなんだな」

「はい、あなたの力をこの私、崩に示してみなさいっ!!」

そう叫ぶと、火龍の姿になり、周りに控えていた炎の球が弾幕の
様に、
一斉に此方に向かってくる。

「こんな処でリアル弾幕とは、ゲームの東方以外でやることになる
うとは

思わなかったな」

炎球を左右に移動してかわしたり、避けられないものは咲夜的能力を
一瞬使つて
よける。

膠着状態が20分近く続くが、崩は特に焦っている様な姿はなく、冷静にこの戦闘状況を見ている。かなり厄介な相手だ。

このままでは埒が明かないと思い、攻勢に出る。

「いくぞ。この数を捌けるかな」

時を止めて、崩の周りに、魔法使いの能力を使用し、冷気を纏わせ、
たナイフと、
氷で出来たナイフを無数に配置する。
準備が完了し、

「行け」

「なっ!？」

止めていた時が動き出すと、今までになかった無数のナイフに崩は驚愕する。

急いで迎撃するが、数が多すぎてほとんどが命中している。

「くっ」

「そら、次が来るぞ」

崩が迎撃しているが、再び時を止めて弾幕が途切れないようにしている。

そのせいか、こちらに攻撃する暇が無く、打ち落とすことに精一杯になっている。

それを繰り返していると、ダメージが蓄積されていつているのか動きが鈍っている。

これを好機と見て一気に畳み込む。

氷で出来たナイフをさつきよりも多く展開する。

そして、自身の右手には氷で出来た刃渡り1mの剣を持って突撃する。

「これで、終わりだ。はあああああ!!」

「きゃああ~~~~~っ!!」

気合一閃

崩の真正面に跳躍して、胴体を横一線に斬る。

これが決め手になり、炎の竜はでかい音を起てて倒れる。

倒れた後、竜の姿から人の姿になり、片膝をついた状態になっていた。

顔は辛そうにして、体の所々から血が流れている。

その姿を見て、持っていた氷剣を消して崩に近づく。

「大丈夫か？」

「ええ、少しダメージが大きいですが大丈夫です。あっ」

「ん、どうした？」

「いえ、なんでもありません」

彼女の状態を聞き、右手を差し出して立ち上がらせる時、彼女はびくんと体を跳ねさせる。

顔が真っ赤になっていて、目も心持ち潤んでいる。どうしたのかと、訊ねたが大丈夫だと返された。

本当に大丈夫かと心配になったが彼女が大丈夫だと言うのだから大丈夫なのだろう。

そう、彼は肝心なことを忘れている。

副作用の一つを。

汗が女性にとって媚薬の効果があるということ。

彼は、先程の戦闘でかなりの汗を掻いている。

また、未だ慣れない特殊職の能力を多用していたために、フェロモンが強烈になっている。

そんなものが彼女に近づいてしまうと、興奮してしまうのも仕方が無い。

崩は何とか自制心を働かせて話を進める。

「あなたは見事に打ち勝ちました。これからはあなたを主として生仕えましょう。」

「よろしく願います。我が主よ」

「ああ、よろしく頼む」

崩が片膝をついた、従者の様な礼儀をすると、彼も返事をする。
次の瞬間、

「つつ」

左腕の方から鋭い痛みが走る。
黒のベストを脱いで、左腕の袖を捲り上げて確認する。
そこには『崩』の文字が刻まれていた。

「これは」

「それが契約の証です。主」

「これがそつなのか」

「はい、戦闘で私を呼び出す時は、空中に『崩』の文字を書いて呼び出して下さい」

「分かった」

契約された証の確認も済み。
後は、このワープ装置の登録をして地上に帰還するだけである。
幸い装置はすぐに見つかり、登録を済ませる。

そこまで完了して、いざ地上に戻ろうとすると。

「あの、主」

「どうした、崩？」

今だに実体化していた崩がいた。

しかも、先程より顔を赤くして、足をもじもじさせている。
息遣いも少し荒い。

ここまできて、ようやく思い出す。
彼女が性的に興奮しているのだと。
その事に到り、慌てる。

「ちょ、ちょっと待て」

「すみません、もう我慢が出来ません」

「ちょっ」

「責任とって下さいね」

今まで我慢していたが、ついに我慢の限界を突破したのか襲い掛かってくる。

このままでは拙いと思い、急いで女性になると、そのまま事に及ぶ事になった。

しばらくお待ちください

お互い、一糸乱れぬ姿になって横たわっている。
かなり興奮していた時は気にしていなかったようだが、ある程度落ち着くと、

この姿に驚いていた。

何でこの姿なのかを説明すると、納得してくれた。
そのあと頬をむくれさせて

「私はもう既に主のものです。なのでそんな気遣いは入りません」

そう言って、今度は男の姿でやりました。

言える事は一つ。

とっても気持ち良かったです。

あほな感想はさておき、この状態のままでは色々和不味い為、急いで服を着る。

彼女も起こし、服を着させる。

起きた時の彼女は、顔を真っ赤にさせていて可愛かったことをここに記す。

その後は、彼女は消えて、自分はワープ装置で地上に戻る。

無事？地上に戻ると、辺りは真っ暗になっている。

今が何時なのか気になり、ポーチに入れているカードで確認すると

0:05

と表示されていた。

道理でこんなに暗いわけだ。

そう納得して、家路に着く。

家に帰り着くと、ご飯を食べる気にもなれず、お風呂はシャワーを浴びるだけにして、

すぐにベットに突っ伏す。

今日はとても疲れた一日だったと、振り返ろうとするが、すぐに睡眠魔に誘われて眠りに就く。

第3話（後書き）

誤字脱字などがございましたら感想などで報告してください。

質問なのですが、ゲームの題名等は伏字などはしたほうがよろしいのでしょうか？

そちらの方もお答え頂けたらお願いします。

番外編 大晦日（前書き）

初の番外編です。

何とか書き上げることが出来ました。

若干？のネタバレになるようなものが含まれていますので
それが嫌な方は見ない方がよろしいかと。

それでも、大丈夫な方はお楽しみ下さい。

番外編 大晦日

これは今の所、本編とは関係ありません

時が経つのは速いもので、今年も残り一日。
つまり大晦日である。

家の住人もかなり増え、今じゃ14人と一匹になっている。
大家族となり、毎日がお祭りのように騒がしい日々が続いている。
今日もそんな騒がしい一日が始まる。

「・・・きて、お・てよ、か・・・んさん」

何か声がする。

布団に潜っている俺を起こそうと誰かが揺すっているのだろう。
だが、昨日は遅くまでダンジョンに潜っていたので、勘弁して欲しい。

まだ寝ていたいので布団に頭まで潜りこむと、

「しょうがないな、こうなったら。ふふっ」

揺すられる事が無くなり、これで寝られると思ったが誰かが横から
布団に潜りこんで来る。

そして、

もにゅ

俺の胸を揉んだ。

俺は急いで目を覚ますと、相手を引き剥がして布団をめくり、揉んだ相手を見る。

「あつ、起きた。おはよう火焰さん」

「何やってるんだ、リン」

「なかなか起きない火焰さんを起こしに来たの」

黄色いショートの髪に、頭の上に白いリボンをつけた少女に問いかけると、笑顔で返された。

今だに胸を揉んでいるので、それを止めさせて、着替えるので部屋から出てもらう。

部屋から出る時、不服そうな顔をしていたがそれを無視した。

そうしないと、また胸を揉まれるからな。

今日は、女性のままで良いか。

最近また胸が大きくなった。

そんな取り止めの無いことを思いつつも、着替えを済ませて部屋を出る。

廊下に出ると、別の部屋から

「デフォ子、いい加減に起きろー！！」

この声はテトか。

ご苦労さん、と心の中で労いの言葉を入れてリビングへと向かう。

リビングについて、中に入ると、

ハクとハル姉妹、メイコ、メグ、リンとレン姉妹、ルカ、たこルカ、ミク、ネルがいた。

カイコとモモはキッチンにいるのだろっ。

俺が来た事に気付いたリビングにいる皆は、

「おはよう、火焰さん」

「おはよう、火焰」

「おはようございます、火焰さん」

「おはよう」

それぞれが、朝の挨拶をしてくる。

挨拶を返して、ご飯が並んでいるテーブルに近づき、一番奥の席に座る。

席についた後、膝の上にピンクの生き物が乗っかってくる。

『おはよう』

声が、頭に直接聞こえてくる。

挨拶をしてきたのは、ピンクの髪に八本足でヘッドフォンを付けた蛸のような生き物だ。

「おはよう、たこルカ」

たこルカに挨拶を返すと、笑顔で答えてきた。
可愛かったので、たこルカの頭を撫でていると。

「おはよう」

「やっと起きたよ」

眠そうな目をした紫色の肩までかからないショートの子と、赤褐色のツインドリルの髪型をした女性が入ってきた。

ウタの格好は、耳にヘッドセットを付けていて、濃い藍色の襟つきシャツと紫のネクタイ、ニーソックス風ブーツ。

濃い藍色のベレー帽をかぶっている。

目は、紫色でいつも半開きで眠そうにしている。

逆にテトは、軍服を改造した服装で、襟付きの袖なしで、ミニスカートのニーソックス風ブーツ。

目は、鮮血のような赤で垂れ目だ。

しかし、テトの年齢は31歳と見た目と合っていない。

まあ、可愛いので気にしていないけど。

「おはよう、ウタ。お疲れ、テト」

「ありがとう。君だけだよ、火焰」

ウタとテトにそれぞれ返事をする、テトが肩を落とし、涙を流しながら答えてくる。

二人も席に着き、

「それじゃ、皆揃ったところで、いただきます」

「いただきます」

俺の合図の後、一斉に言って食事を始めた。
今日のメニューは、白ご飯、ナメコと豆腐の味噌汁、鮭の切り身と
なっている。

ちなみに、たこルカにはオオマさんのマグロだ。
それぞれ、思い思いに食べていると、

「そういえば火焰さん、珍しく起きるのが遅かったですね」

「ああ、昨日は遅くまでダンジョンに潜ってたからね」

「一人で潜ってたの？」

「いや、ハクとウタとルカとね。その後に少し武器の手入れもした
から」

「そうだったんですか。いつもなら起きている筈のデフォ子さん
がいなかったの、どうしたのかと」

「いや、遅くても帰ってきたのは、深夜1時前だったよ」

「えっ、それじゃあどうして？」

「どうしてなんだ、ウタ？」

朝の事を言ってきたモモに昨日の事を答えていると、デフォ子につ
いての話になった。

デフォ子は朝は、余程の事が無い限り、7時30分までには起きる

のだが、今日は8時近くに起きてきた。
昨夜の時間でも十分に起きれる時間である。
何故寝坊したのか疑問に思い、聞いてみると。

「ああ、それは。帰ってきて、たまたまテレビをつけたらお笑いを
やっててね。それを見てたら遅くなったんだよ」

「だ、そうだ」

「そうだったんですか。デフォ子さん、夜更かしはいけませんよ」

事の真相を聞けて納得したモモは、デフォ子に注意するが、デフォ
子は、はいはいと言って聞き流していた。
もも、デフォ子さん。と向こうは向こうで盛り上がり始めると、

「そういえば、火焰も中々起きてこなかったわね」

「さっき、理由は言っただじゃないか」

「そうじゃなくて、起こしに行った箸のリンが中々戻ってこなかっ
たから」

メイコが、俺の遅れた理由とリンが中々戻ってこなかった事につい
ても聞いてきたので、正直に答えた。

「ああ、それはリンがむ「わゝ！、わゝ！」どうした、リン」

「あはは、気にしないでいいよ。何回も揺すったんだけど、火焰さんが中々起きなかったただけだから」

「そうなの、火焰？」

「そうだけど。その後、俺の胸揉んで起こしただろ」

リンが途中、セリフを遮ってきて言い訳をしていたが、メイコが確認の為に聞いてきたので、補足を入れた。
言った瞬間、リビングが一気に静まり返った。
そして次の瞬間

「リ〜〜〜ン〜〜〜！！」

他の皆が爆発した。

「ちょっと、何うらやましい事してんのよ！！」

「そうよっ！、私もしたかったのに！！」

などと、本人がいるのにそれぞれの本音が駄々漏れである。
……建前は無いのか、建前は。

っていうか、そんなに揉みたいのか俺の胸。

そう考えている間に、さらにヒートアップした人達による、リンに対する鉄拳制裁が入りそうなので止めに入る。

「落ち着け。そんなに揉みたいのなら、後でいくらでも揉ませてやるから」

「本当っ！！？」

言うや否や、リンを除く皆が一斉にこちらに向き言ってきた。それに少しビビりながらも

「あ、ああ、こんな物でいいならな」

自分の手で胸を下から持ち上げてみせる。

ゴクリ

誰かの飲み込む音が聞こえた。
周りの目つきも若干怖い。
その雰囲気を見殺して、

「なら、食事を再開するぞ」

「そうね」

俺の一言で、メイコ達は納得して、元の楽しい雰囲気に戻った。
一時して、

「ごちそうさまでした」

皆で、手を合わせて言うと、メグとルカが食器を運ぶ。

「ハク姉さん、皿洗い当番は今日私達だよ」

「そうなの？、それじゃ、やりましょうか」

「うん」

今日は、ハクとハルか。

ソファーに座り、二人のやり取りを見てみると、リンが近づいてきた。

「さっきはありがとう。助かったよ」

「気にするな。でも、これからは気よつけるよ」

「うん、そうするよ。まあ、自重はしないけどね」

リンが、お礼を言ってきたので気にするなと言って、おまけに忠告もしたがあまり聞き入れられなかった。

それじゃ、と言ってミクとカイコの方に行くともう片方の片割れが来た。

「何を話してたの、火焰さん」

「食事中のことだよ、レン」

レンが何を話してたのかを聞いてきたので答える。

ちなみに、こちらのレンは、女の子なのであしからず。

何か電波の様なものが来たが無視する。

ふん、そうなんだ。と言うとおもむろに

「今、胸触ってもいい？」

「唐突だな。別にいいが」

わい、と笑顔で俺の膝の上に座り、胸を揉みだした。

「そんなにいいのか？」

「火焰さんだから良いんだよ」

「そうか」

「うん」

そのまま揉みしだいていると、次は頬擦りを始めた。
ぎゅっと抱きしめて密着していると、

「あゝもうっ、いい加減にしなさいレンっ!!」

黄色い長い髪をサイドポニーにしている少女が来た。

「どうしたのネル。ボクはさっきの約束を実行しているだけだよ」

「こんな所でやってるのが問題なのよっ!!」

「別にいいじゃん。何ならネルもやる?」

「なっ／＼／」

ネルは、レンの行動が目に残ったのか、怒りにきたのだが、レンは意に介さず、
逆に一緒にしないかと言ってきたが、恥かしいのか顔を真っ赤にし

て固まっている。
そんな姿を見て、

「なに固まってるのさ、ネル。もうここにいる皆は、既に火焰さんに食べられてるのに」

「ちょっと待てレン。それを言っちゃダメだろ」

「事実じゃん」

「そうだけど。セリフが足りない。俺は、食べられてもいるぞ」

「そうなの？」

「ああ、その日の気分が変わってるぞ」

「そんな話を朝からしないっ！！」

レンが暴露すると周りの人達も頷いている。
頬が少し赤いが。

その後、レンのセリフに少し補足を入れると、復活したネルが顔を真っ赤にして叫ぶ。

「すまん、それで今日はアルバイトは無いのか？」

「今日は無いわよ。大晦日から三箇日まで入れてないもの」

「珍しいじゃないか。いつもならバイトバイトと言っているのに」

「別に良いでしょっ、今日は皆で迎える初めての大晦日なんだから」

「そうだな」

話題変更をするため、ネルの予定を聞いてみたが、珍しくバイトを入れていないみたいだ。

その理由を聞いてみると、そっぽを向きながら言ってくる。

なんとも嬉しいことを言ってくれるもんだ。

ネルのそんな微笑ましい姿を見ていると。

「いつまで抱きついているの。レン」

ミクが話に加わってきた。

「あっ、ミク姉さん。分かったよ」

少し名残惜しそうにしながら離れる。

レンが離れて、楽になるとミクの方を向く。

「どうしたんだミク」

「今日の年越し蕎麦の具材がいるか聞いているの。あと、他に必要な

ものは無い？」

今日は、私とメイコさんで買出しに行くから、と伝えてきた。
その言葉を聞いて、

「それじゃ、具は丸天と卵にお肉で、後はチョコ系のお菓子を頼む。
そうそう、蕎麦はいつもより二人前多めで頼むぞ。あいつらが来
ると思うから」

「分かった。それと、あいつらって誰？」

「どうせ、夕方には来るんだ。それまで楽しみにしている。俺はま
だ眠いから寝るぞ」

必要な物を伝えると、まだ眠いので自室で眠ることを伝える。
ミクは、蕎麦の追加とあいつらが誰なのか気になっているみたいだ
が、
夕方に会えるので楽しみにしているよう伝える。

「あと、崩さんと碎羽ちゃん、刹那さん達とプラス八人よ」

「そうだった、そうだった」

俺がすっかり忘れていると、

『ひどいですよ、主』

『そうだよっ、碎羽ちゃん怒っちゃうよっ』

『あらあら、うっかりしちゃって、氣よ付けなさい』

『わいら空氣かいな。主はひどいな。もしかして、もうボケたんか』

『・・・・・・・・』

『何忘れてんだ、ああん、燃やされてえのか？』

『これ、落ち着かんか、刹那』

『そうよ、刹那』

『チツ、分かってるよ』

上から順に、崩、碎羽、虚空、円、焰群、刹那、烈神、墨である。
刹那は、烈神と墨に窘められて、舌打ちしながら了承した。

「すまん、皆。俺の落ち度だ」

『気にしないで下さい、主。さすがに昨日は大変でしたからね』

『そうじゃぞ。敵の数が余りに多すぎたせい。攻撃にワシと崩、守りに円を長時間使用しottaからの』

そうなのだ。

昨日は、朝から潜っていたのだが、最初は順調に進み、この分なら22時には終わる予定だった。

だが、途中で隠し通路を発見したので、そこに入ると・・・畏だった。

通路を通ってかなり広間に入った瞬間、入り口が結界で閉じられて上や四方からモンスターがわいた。

しかも、今までのモンスターよりかなり強く、一匹一匹が手こずる奴らばかりである。

急いで、円で自分達四人の頭上を守り、周りからやってくるモンスターを片っ端から崩と虚空の合成火竜で攻撃していた。

ハクは、自分達の内側にこれないよう拳打や蹴りの嵐で、ウタは銃やミサイルランチャーで空中のモンスターを狙い、

ル力は、鞭を使い中距離からの足止めとナイフを使つてのハクの手伝いをしていた。

そこからの持久力戦で、一時間近く戦い続けて、モンスターを殲滅しつくすと宝箱と転移陣が現われた。

宝箱の中身は、それぞれの数段上の新しい装備品とゲイボルクと干将・莫耶という破格のアイテムを手に入れた。

転移陣に乗る前に、体力と魔力の回復アイテムでそこそこ回復した後、後に転移陣に乗る。

隠し通路の入り口に戻った後は、そのまま下の階を目指して歩いていく。

装備も一新されて、難なく目的の転移装置のあるボスの間についてが、そこには無限のフロンティアEXCEEDに出てくる

パーソナルトルーパーのファントムにアルトアイゼン・ナハト、ヴァイスリッパ・アーベントとの戦闘が開始。

ヴァイスリッパは、銃のバルチザン・ランチャーで牽制してきて、

ナハトとファントムが突っ込んでくる。

ナハトは途中で牽制の為に両肩のレイヤード・クレイモアから弾を撒き散らして、私達を分断させる。

ファントムは巨大なビーム剣グラン・プラズマカッターを持って、私を狙ってきたので、ハーケン・ブロウニングで対抗した。

この後も色々合ったのだが、この話はまた今度にしよう。

そんなこんなで、何とか倒し地上に戻ってきたのが遅くなったのである。

事の顛末を思い返しうんざりする。

よく生きて帰れたものだ。

しみじみと思いつつもまた欠伸が一つ。

そろそろやばそうだ。

「それじゃ、今度こそ寝るから」

「おやすみ、添い寝はいらない？」

「大丈夫だ、ルカ。それじゃ」

ルカが言ってくるが一人で寝たいので、お断りした。

自室に戻り、ベットに潜り込むとすぐに睡魔が襲ってくる。

そのまま、身をゆだねて意識が無くなった。

・ ・ ・ ・ ・

「ん、今何時だ」

.

目が覚めて、時計で確認しようとする

「今は夕方の5時だよ、火焰くん。おはよう」

「おはようございます。火焰さん」

「やっぱり来たか。それと、おはよう」

ナイアとクロノスが俺の布団に潜り込んでいた。
俺を挟んで、しかも三人とも裸だ。

ナイアの仕業だな。

クロノスも良く乗ったものだ。

俺は何事もなく対応して起きる。

「火焔くんのいけず」

「恥かしいです／＼／」

ナイアは少しつまらなそうな顔をし、クロノスは頬を赤く染めていた。

クロノスよ、恥かしいならやるなよ。

心の中で突っ込み、普段着に着替える。

着替え終わり、二人の方を向くと二人とも既に服を着ていた。

それを確認するとリビングに向かう。

向かう途中、

「二人とも、この家に住んでる奴らは、二人のこと知らないから自己紹介頼むな」

「了解」

「分かりました」

「それと、俺が呼ぶまで入り口で待っててくれ」

それぞれ返事をする、丁度リビングについた。
取っ手を捻り中に入ると、

「お、皆いるな、今から紹介したい人がいるから、集まってくれ」

呼びかけると、皆が集まってくる。

「誰なのかな、ハクお姉ちゃん」

「うーん、女の人だと思うわ。カイコちゃんはどう?」

「私も、女性だと思うわ。火焰さんの」

「だよー。火焰さんだもん」

「「ね」」

「私は、どうでもいいわ」

と、上からハルとハク、カイコ、リン、レン、最後にネルだ。

ネルはどうでもいいと言いながらも、入り口をチラチラと見ている。

「静かにしてくれ。それじゃ、入ってもらうから。二人ともいいぞ」

「良いのかい?それじゃ、こんばんは」

「おじゃまします」

騒ぎ始めたので、静かにしてもらい、二人をリビングに入ってくるよう呼びかける。

その声に反応して、入り口から二人が入ってくると、ある者は胸を

比較してガツクリきたり、悔しそうにしている。他には、仲良くなれそうだと笑顔の人達もいる。概ね大丈夫みたいだ。

「それじゃ、自己紹介をさせてもらうよ。ボクの名前はナイアルラトホテップ。邪神の一人さ、気軽にナイアと呼んでね」

「次は私ですね。私はクロノスと言います。時を管理する女神です。気軽にクロノスと呼んでください。以後よろしくお願いします」

それぞれの自己紹介が終わり、皆を見ると、とても信じられないような顔をしていた。

まあ、そうだろうな。

普通なら、俺も信じないからな。そんな驚いている所に、

「信じられないと思うが本当のことだ」

俺が、駄目だしするとどうやら信じたようだ。

「ちなみに今は、火焰くんの愛の奴隷だから」

「絡め取られちゃいました」

二人がちゃかして言うが、どうやら周りの人達は違ふようだ。皆の目が、やっぱりという視線を向けてくる。

普段俺をどう思っているのかよく分かった。

今夜は覚悟しろよ。

今日はDSだ。と心に決めて、話を変える。

「それで、もう年越し蕎麦の準備は済んでいるのか」

「あつ、それなら大丈夫です。私とテトさんとメグさんで準備しましたから」

「安心してくれよ、火焰。つまみ食いは阻止したから」

「そうですね。いつの間にかウタさんやリンちゃんやレンちゃんが忍び込んでたからね」

三人の報告に、下手人たちを見ると、さつと目を逸らした。本当みたいだな。

「まあまあ、もういいじゃない。もういい加減食べようよ。わたし、お腹ぺこぺこだもん」

「そうね。たこルカもお腹減っているみたいだし」

ミクとルカのセリフで話題が変わる。

たこルカを見ると、お腹が減っているのか、ルカの腕の中でぐったりしていた。

「そうみたいだな。それじゃ、火竜たちを召喚して食べ始めるか」

火竜たちを召喚して、普段よりも長いテーブルに着席して。

「今年一年、皆お疲れ様でした。来年もよろしく頼む」

「よろしく」

「よろしくお願いします」

「よろしく」

と、それぞれ返事をしてくる。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

いつもより賑やかな夕食が始まった。

食卓の上には、それぞれの好物や、上質なお酒がたくさんあり思い思いに食べ始める。

「これいただきます」

「それは、私が狙ってたやつっ！」

「へへへん、遅いのが悪いんだよ」

「むむ、こうなったら。えいつ」

「ああ〜!!」

「へへん」

始まって少しすると、碎羽とリンの食べ物の取り合い。

「フランスパンは美味しいね」

「それより、お米だよ」

「君はじつに馬鹿だな。フランスパンの素晴らしさが分からないとは」

「はん、そんな硬いだけのパンに比べたら、此方の方が栄養価とかは断然いいよ」

「なんだって、そんな白いだけの炭水化物の塊じゃないか」

「なに」

「なんだよ」

「お二人とも落ち着いて下さいっ」

ウタとテトの争いが始まり、それを止めようとするモモ。

「これ美味しいね。ハクお姉ちゃん」

「そうね。でも私はお酒かしら」

「特にこのお酒美味しいわよ。ハク、ルカ」

「メイコさん飛ばしすぎですよ。ルカさんもなんか言ってください」

「いつものことじゃない」

ハルとハクが仲良く食べている所に、ハクの隣に、メイコ、ルカ、カイコと続いている。

メイコはどうやら、早速お酒を飲んでいるようだ。

「これおいしいですね。ミクちゃん」

「そうだね。メグちゃん。どう、楽しんでる。ネル、レン」

「あそこの、低次元の争いをしている。二人よりかはましね」

「リンもあんな恥かしい事しないでよね。それに比べて、ここは安全ね」

「そこには賛成ね」

ミクとメグとネルとレンの四人組で、少し離れた所で食べているみ

たいだ。

「ふふっ、楽しくやっているみたいだね。火焰くん」

「ええ、とても安心しました」

「大丈夫です。主は私達がこの身に変えても守りますので」

「ありがとう、崩。でも、俺はお前達も大事だから、無理だけはないでくれよ」

「心得ておりますわ、主。ね、焰群」

「・・・（こくり）安心するが良い」

「おお、珍しくしゃべったの。焰群」

「そうやな。焰群はんがしゃべるとこなんて滅多に見れへんからな」

「ちっ、・・・うめえな（ボソッ）」

「良かったな、刹那」

「なっ、聞こえてっ／＼／」

「ふふっ」

「おいしいか、たこルカ」

『うまいよ〜』

残りの、俺とナイアにクロノス、火竜達（碎羽を除く）で話しながら食べていく。

膝の上に乗っているたこルカも、普段より上質なオオマさんが食べられて嬉しそうだ。

その姿を見て、頭を撫でてやる。

すると、目を細めて嬉しそうにしている。

それから少しして。

「ごちそうさま」

「おそまつさま」

食事が食べ終わり、ゆったりする。

「もう、お腹いっぱい」

「私も〜」

「私もです」

「ボクもだよ」

「皆、満足したみたいだな」

「そっだね。ボク達も堪能させてもらったよ」

「はい、楽しかったです」

「今日は泊まっていくな？」

「そうだね。そうしようか」

「お願いします」

「そうか。崩たちはどうする？」

「私達もよろしいのですか？」

「ああ」

「それじゃお願いします」

「獲物が増えた（ぼそっ）」

俺は、二人と火竜達に今日はどうするか尋ねると、泊まると言つ返事が来た。

ふふっ、嬉しいことだ。

目が若干、赤くなる。

どうやら、興奮し始めたみたいだ。

何とか耐えて、今夜の楽しみのためにこっそりとリビングを出る。それぞれの部屋に、任意の転移陣を敷いて回る。

準備が済み、こっそりと戻る。

どうやら、周りは気付いていないみたいだ。

その事に安心すると、早く眠る時間が来ないか待ち通しくなった。それから、紅白歌合戦にバラエティー番組を見て、お風呂に入り、

就寝時間となった。

それぞれ部屋に戻るのを確認すると、俺も部屋に戻る。
鼓動が早鐘を打っている。

もう我慢できそうにないみたいだ。
すぐに転移陣を発動すると、

「きゃっ」

「どうしたの」

「やっぱり」

と、急に転移が起こり、様々な反応をしていた。

「こんばんは、皆。もう我慢できないの。なので、いただきます」

「あ~~~~~」

「あ~~~~~ん」

転移してきた皆に早速躍りかかった。

夜の空に、それぞれの嬌声が響く。

こうして、年末最後の日は、皆と楽しい夜を過ごした。

番外編 大晦日（後書き）

いかがでしたでしょうか？
楽しんで頂けたら幸いです。
今年一年、お疲れ様でした。
来年もよろしく願います。

第4話（前書き）

明けましておめでとうございます。
今年もよろしく願います。
それでは、今年最初の投稿となります。
どうぞ。

第4話

「・・・・・・・・寒い」

起きて最初に出た言葉は、部屋の寒さに対してだった。

昨夜は、疲れていたので布団に潜らず、そのまま寝てしまったようだ。

幸い、少し厚めの生地を使っている物を着ていたため、風邪はひかなくて済んだみたいだ。

そんな事を考えている間にも体は冷えていく一方なので、眠気に抗いながら布団に潜る。

最初は冷たかったが、一時すると自身の体温で温まっていき、何ともいえない心地よさが襲ってくる。

時間を確認しようと思ったが、億劫なので窓の外を見る。窓からはまだ、薄っすらとした明かりしか入ってこない。

時間が早いようだ。

なので、このまま二度寝に突入した。

「・・・じ、お・・・さい」

ん、何だ？

誰かが、体を揺さぶってくる。
だが、未だに眠いので、無視をする。

「あ・じ、おき・く・ださい」

再度、体を揺さぶられる。
一体誰なんだ。

この家には、俺以外住んでいないはずだ。

「主っ！、起きてくださいっ！」

次は、声はかなり大きくなった。
おかげで、意識がほぼ覚醒する。
目を開けて、相手を確認すると、

「崩か。どうしたんだ？俺はまだ眠いんだ」

「崩か、じゃありません主。いい加減に起きてください」

やっと目を開けた俺に、一つ溜息を吐く崩。

「さっき言っただように、俺はまだ眠いんだ。」

「しかし、主。もうお昼近くなですよ」

崩の言った事が理解できない。

「はっ？、おいおい、「冗談はよせ崩」

「これを見てください、主」

崩の起こす為の方便かと思って一笑に付そうかとしたが、崩が時計を目の前に突きつけてくる。

11:00

そう表示されていた。

どうやら嘘じゃないみたいだ。

さすがにこれを見て、このままじゃヤバイと思う。

まだ眠いが、布団から体を起こし一つ伸びをしてベッドから起き上がる。

「着替えるから部屋から出てくれ」

「分かりました、主」

そう言って姿を消そうとする。

「あつ、ちょっと待て」

「どうされました？」

崩が姿を消す前に呼び止める。
呼び止められた崩は、一体何なのだろうと、疑問を顔に貼り付けていた。

「その主と呼ぶの何とかしてくれないか？馴れてないせいかわず痒いんだよ」

「そう言われたって・・・」

呼び名を変えて貰えるよう言ったのだが、崩は困惑していた。
そんなに困惑する事なのだろうか？

「どうした？無理なのか？」

「いえ、そうしたらどう呼びすれば良いのか分からないのです」

「どうやら、他にどう呼べば良いのか分からないみたいだ。
それならと、提案してみる。」

「俺の事は、普通に火焰と呼べば良い」

「いや、それはさすがに・・・」

崩は言いよどむ。

さすがに、仕える者としては拙いのだろうか？
だが、これ以外となると他にあるだろうか？
かと言って、崩に任せたら余計堅苦しいものになりそうだなら、

「そしたら、『さん』とかをつけたらどうだ？ちなみに、様は駄目だからな」

妥協点を出してみた。

ついでに、様付けはされないよう先に釘をさしておく。

「うつ、分かりました。” 火焰殿”。これなら良いでしょう」

どうやら出して正解だったみたいだな。

案の定、様付けしようとしてたみたいだ。

後は外に出る時のことも言っておかないと拙いな。

「まあ、良いだろう。しかし、外に出る時は”さん”だ。これ以外だと呼び捨てしかないからな」

「なっ／＼、それは・・・、ちょっと」

それを聞いた崩は、顔を真っ赤にして言いよどむ。
言いよどむ崩をじー、っと見つめる。
すると、

「分かりました。うつ／＼」

顔を下に向けて、小さな声で返してきた。
それに満足した俺は、

「それだけだ。それじゃ、今から着替えるから」

「うつ、それでは」

俺が着替えることを言うと、恨めしそうな目でこちらを見てから消える。

消えるのを見た後、着替え始める。

今日はもうダンジョンに潜るとしても遅いので、ラフな格好をする。白のインナーに、黒の胸の位置から首元までジッパーの付いた長袖の服を着る。

ジッパーは、上まであげないで、下げっぱなしにする。

下は、青のジーパンにする。

着替えが済むと、昼食を外に食べに行くことにする。

首に黒をベースに白で天使の羽の間にスカイブルーの十字架の模様がのっているマフラーを巻く。

後は、財布とバイクの鍵を持ってマンションを出る。

マンションの入り口を出ると、からりと晴れた空が広がっていた。

「良い天気だ。今日は何か良い事が起こりそうだな」

そう呟くと駐車場にバイクを取りに行く。

駐車場に着き、バイクに跨るとエンジンを掛ける。

エンジンが掛かると、バイクを走らせて一路、繁華街に向かった。

さて、ここで一息入れよう。

彼は、この世界である人物達と出会う。

彼の元いた世界では、とても有名だった架空の者達と。

そう、彼の元いた世界では、電子の世界にいた歌姫達に。

有り得る筈が無い、そう思うはずだ。

だが、”有り得ないなんて事は有り得ない”、と言ったのは誰だったか。

まあ良い。

なぜ彼女達が存在しているのか。

答えは簡単だ。

ここが平行世界だからだ。

何が起こつてもおかしくはない世界。

それが答え。

触れ合えない筈の者達と触れ合う事になる。

この世界では、彼女達は”リアル”として”存在”しているのだから。

すまない、つまらなかったね。

これは所詮、自己満足に過ぎない。

それでは、本編に行こう。

繁華街にバイクを走らせて、15分。
繁華街に着くと駐車パーキングを探す。
無料の駐車パーキングを見つけると、そこに停める。
自動車用は、かなり停められていたが、駐輪スペースはそうでもなかった。

今度来た時は、また此処にしようと決める。

バイクを停めて、自動ロックを掛けて、飯屋を探す。

繁華街の路に出て、何処が良いか見て回る。

中華、洋風、和風、バイキング形式店など、様々な店が美味しそうな匂いと共に目に映る。

非常に迷うな、どれもこれも美味そうだ。

何処も美味そうだと目移りしていると、少し先のバイキング店を、六人の女の子がいた。

一人は、白に近いグレーの色をした、地面に着きそうな位髪を首の辺りで藍色のリボンで結び、

黒のワイドパンツを穿いた20位の女性に

次に、同じ髪色で、長さは太もも辺りまで伸ばして、同じ色のリボンで結んでいるが、

こちらは背が低く、ミニスカートを穿いている。

どうやら姉妹のようだ。

他には、黄色の髪をサイドポニーにしているが膝下まである娘に赤褐色の髪をツインドリルにした娘。

紫のベレー帽を被り、藍色の髪をした、肩に掛からない長さのショートにした娘、

胸辺りまである桃色の髪をした娘がいた。

その内、藍色と桃色の髪の娘以外は、色違いのノースリーブのブラウス。

そして、藍色の髪の娘以外は、色違いのアームカバーをしていた。

桃色の娘は、緑を基調としたメイド服に似たものを着ている。
藍色の娘は、濃い藍色の襟つきシャツに紫色のネクタイをしている。
色とりどりで、どんな所にいても、目に付きやすい。
でも、あいつらを見ていると結構前に見た気がするんだよな。
何処で見たかなと考えていると、彼女達の中で20才くらいの女性
が店を羨ましそうに見ている。

「はあ」

「ハクお姉ちゃん、どうしたの？」

「どうしたの？、ハク」

「お腹空いたなと思ってね」

「それを言わないでよ」

「大体、僕達の事務所は経営がやばいんだよ」

「それに、どちらも経営危機で私達の事務所、合併したのに・・・」

「事務員もかなり減らして、私とモモが担当してるしね」

「デフォ子、あんた、特に何もして無いじゃん」

「そんな事・・・ないよ？」

「なぜ目を逸らす」

「何となく？」

「疑問そうな声で返すな！！」

「落ち着いてください、テトさん」

「そうだぞ、テト」

「おまえのせいだーっ！！！！」

「煽らないで下さいっ、デフォ子さん！」

「そうよっ、落ち着きなさいテト」

「モモとハクが言うなら・・・」

「それに、このままだと本当に不味いわよ、私達の事務所」

「どういう事なの、ネル？」

「そうよ、ネルちゃん。私達の事務所には、ミクちゃんやルカちゃん達がいないじゃない」

「いいえ、それでも無理よ。この間、たまたま聞いたのだけど。あまりの赤字に私達、借金をしてた企業に質として出されるのよ」

「えっ？、その何処が不味いのですか？」

「むしろ、ラッキーなんじゃ？」

「その企業名は真黒カンパニー、裏ではかなりあくどい事をしていてね。」

しかもその社長、かなりの女好きでね。何人もの女を・・・ね」

「もしかして・・・」

「そうよ。慰み者にされるのよ」

「そんな・・・」

「その話、私とモモは大丈夫なんじゃ？」

「いえ、そうとは言い切れないわ」

「え・・・？」

「今、少ない開発費で、あんたらでも出来るようにしているそうよ。しかも、大人バージョンもあるみたい」

「ええ~~~~~っ!!」

「それじゃ、このままじゃ・・・」

「どうしよう、ハクお姉ちゃん」

「ハルちゃん・・・。ちなみにその事を他の人は・・・」

「社長代理のメイコさんとその補佐役のカイコさん、それとルカさ

んは知っているわ。

何故メイコさんが代理なのかと言うと、社長は、払えなくて当の昔に夜逃げしたらしいわ」

「だから、メイコさんがやってたんですね。社長、最近姿を見せなかったのは、

そういうことだったんですね」

「そう。ネル、ちなみに赤字いくらなの？」

「200億」

「オーマイガッ」

「無理よ、そんな金額・・・」

「こうなったら、私がダンジョンに潜って稼いでくるわ」

「無理よ、ハク。買収契約は三日後よ」

「そんな」

「それじゃ、私達・・・」

悲壮な雰囲気を出して、落ち込んでいる6人。

最初は、お腹が空いたといったものだったが、いつの間にか経営危機の話になっていた。

それにしても、200億か・・・。

余裕だな払うにしても。
能力に黄金率もあるし。

しかし、俺は経営に関してはさっぱりなので、助けたとしてもその先がどうなるか分からない。

それに、俺に対しての得が無いし、いきなり話しかけて、助けますと言っても怪しいいな。

どうしたものかと、悩んでいると。

向こうから、黒服を着てサングラスを掛けた男達が15人やってきた。

その男達は彼女達の前で止まり。

「あなた方は、弱音ハクさん達ですね」

「はい、そうですけど」

「あんた達だれよ」

「真黒カンパニーのものです。あなた方を迎えに来ました」

「そんなっ!!」

「もうなのっ!!」

「そういう事です。ちなみに抵抗はしない事です」

「くっ」

「お姉ちゃん・・・」

どうやら、先程話題に上がっていた企業の手下みたいだ。
ハクさん達は、抵抗しようとしていたが、見透かされていたみたいだ。

周りの奴らも、そこを意図的に見ないようにして避けている。

これは本格的にヤバイな。

はあ、面倒だが助けるか・・・。

それにしても、ただ働きはなんかな。

あとで何か請求しようと思って、走り出す。

途中、顔が割れると不味いと思えるが、まあ良いか、と結論を出す。
そして、さらにスピードを出し、彼女達に一番近い男に向かって、
飛び蹴りをかます。

「ぐはっ!？」

「えっ?」

「よっ、助けてやる」

黒服の顔面に当り、吹き飛ばすと、黒服たちに顔を見せない様、
彼女達の方に向くよう着地する。

俺が急に現われたことで、周囲の人間は啞然となる。

「よっ、どうした?ビックリして」

「いや、あの」

「まあ、話は後だ。ところで、そのリボン借りていいか？」

「あつ、はい」

ビックリしている彼女達に話しかけるが、脳が状況に着いて行けてないみたいだ。

そのまま話を一方的に進めて、ついでにリボンを借りる。

これで顔がばれることは無くなる。

なりきり師の能力を使い、ハクそっくりになる。

「うそっ!？」

「お姉ちゃんが」

「二人!？」

「どうなってるの!？」

「私でもわかりませんよ」

俺が変わった事でビックリしたみたいで騒がしい。
なので、

「少し静かにしている」

注意すると

「声まで一緒なんて」

「どっちがどっちか分からなくなりそうだよ」

「でも、雰囲気やオーラが違うね」

「そうですね」

無理みたいだな。

まあ、いい。

諦めて、黒服たちのほうに向く。

「すまないが今回はお引取り願おう」

「何だと、急に変身して、ごちゃごちゃ言ってるやがる」

「無理か」

「あいつをブチのめすぞ」

「来い」

黒服たちに帰ってもらえるよう言ったが、無理だった。それもそうか、仲間一人やちゃったもんな。

黒服の一人が言うと、残り14人が向かってきたので迎撃する。

「ふんっ」

「がっ！」

「だっ！」

一人目は、拳を振り下ろす前に、右の拳で腹に一撃を入れて倒す。
次に右側に来た相手を、左足での回し蹴りで吹き飛ばす。

「おらっ」

「甘い」

「うふっ！？」

蹴り飛ばした後を狙って、左側から殴りかかってきたので、右手を使つて流しながら回転し、
その勢いを使つて、肘打ちをわき腹に叩き込む。

「次はこっちからだ」

「なっ」

「魔神拳・双牙」

「うおっ」

「うあっ」

少し離れた位置にいた黒服達に魔神拳・双牙を放つ。

二発とも当たった黒服は、周りにいた3人の黒服を巻き込んで、壁にぶつかる。

あと、七人か。

その後、残り六人は掌底破に三散華に獅子戦吼で倒した。

残り一人となり、そいつを探すが見当たらない。

どうやら逃げられたみたいだ。

しょうがないと思い、彼女達の方に向かう。

彼女達の前に来ると、元の姿に戻る。

「終わった。あと、これ」

「はい」

姿が変わったことにまだ驚いているのか、彼女はリボンを受け取っても呆然としている。

他の皆も同じみたいだ。

それにしても、好い加減お腹が空いた。

飯を食べに行こうとしたが、彼女達をこのままにしておくのも後味が悪い。

なので、

「おい」

「は、はい」

「飯を食べに行くぞ」

「でも、私達持ち合わせが」

彼女達を食事に誘うが、リボンを借りた女性が言いずらそうに言うてくる。

それを見て、気にするなと言おうとするが名前を知らない事に気付く。

話を立ち聞きしていて、大体分かるがはっきりとさせておこう。

「そういえば、あんたは？」

「あつ、自己紹介していませんでしたね。弱音ハクと言います。隣にいるのが」

「秋音ハルだよ。お姉ちゃんとは苗字が違っけど、姉妹なんだ」

ハクが自己紹介をした後に、妹のハルが元気よく自己紹介をする。

性格は正反対みたいだ。

それを聞いたあと、

「そんなのは気にしなくていい。俺のおごりだ」

「やったー」

「お兄さん太っ腹」

その一言を聞いて、赤褐色のツインドリルとハルが喜んでいる。

「テト、ハル」

「でも、悪いですよ」

「気にしなくていい。えっと」

「あつ、モモです。桃音モモと言います」

「僕は、重音テト」

「私は、唄音ウタ」

「あたしは、亞北ネルよ」

二人を窘める様に言ってきた女性に返答をしようとしたが、名前が分からずに言葉が続かない。

それに気付いた彼女は、自己紹介をしてくれた。

それに続いて、残りのメンバーも自己紹介をしていく。

「モモか。気にするな。金はかなりあるからな」

「でも・・・」

「お兄さん、何処に食べに行くの？」

ハルが訊いてくる。

「そうだな、この人数だとビュッフェ形式の店がいいな」

「ビュッフェ？」

「ああ、つまりバイキングの事だよ」

「えっ、いいんですか!？」

「そっちの方が安上がりするんだよ」

「いえーい」

「バイキング♪、バイキング♪」

「バイキング」(ゴクリッ)

「何て贅沢な」

ビュッフェと聞き慣れていないのか、ハルが訊ねてきたので、分かり易い言い方に直して言った。

すると、モモは驚いて訊いてきたので、理由を言う。他の皆は喜んでいた。

「それじゃ、行くぞ」

「はい」

「ひさびさね」

一時的にでも、彼女達に笑顔が戻った事が嬉しく思う。
そう思いながら、先程通り過ぎたお店に向かった。

「お会計が10万6500円になります」

「はい、丁度で」

「はい、お預かりしました」

「レシートは結構です」

「分かりました。ご来店ありがとうございました」

バイキング店での食事が終わり、会計を済ませる。

美味そうだと見ていた店は、どうやら高級店だったみたいだ。しかし、この程度の値段など痛くも無いので、さつさと払う。お店から出ると、

「美味しかったー」

「そうね」

「僕、もう食べられないよ」

「食べすぎですよ、テトさん」

「まさか、こんな高級店だなんて」

「ふう〜」

それぞれ満足してくれたみたいだ。

さて、緩んできるところ悪いが、本題に行かせて貰おうかな。

「満足したみたいだな」

「ええ、こんなに美味しい物を食べたのは初めてです」

俺の言葉に、モモが代表して答える。

「それで、あの黒服たちのことなんだが・・・」

「それは・・・」

知らないフリをして訊ねてみた。
すると、さっきまでの雰囲気が一転して、暗い物になる。

「どうするの、モモ？」

「ネルちゃん・・・」

「話しましょう、モモ」

「ハクさん」

「ええ」

戸惑ったモモは、ネルに訊く。

ネルは、話す事に賛成し、隣にいるハクにも確認してみると、彼女も頷いた。

他の人にも確認を取るために見回すと、それぞれ真剣な顔をして頷いていた。

その姿を見たモモは、こちらに向き直り

「分かりました。お話しますので事務所までお願いします」

「分かった」

彼女の先導の元、彼女達の事務所に向かった。
と、その前に

「すまん、駐車場にバイクを忘れていたんだ。ちょっと待っててくれ」

「分かりました」

「早くしてよ」

「ああ、ここで待っててくれ」

モモとネルの返事を聞き、走って取りに行った。
駐車場について、バイクを取ってくると彼女達の元に急いで戻った。

「あつ、来た来た。おにいさん」

「待たせたな」

「うん、そんなに待ってないよ」

「それにしても、格好いいバイクだね」

「でも、とても大きいわよ」

「そうだよ、乗るとしたらネルとハルは無理だね」

「じゃあ、お姉ちゃん。乗れたら後ろにお願いね」

「ええ、任せなさい」

戻ってきた俺に気付いたハルが、声を上げて呼んでくる。
待たせたかと思い、謝罪したがそんなに待ってなかったみたいだ。
その後で、俺の持ってきたバイクの大きさに驚いて、乗ってみたい
と目を輝かせて言う。

だが、彼女には大きすぎるのか無理だと、テトが言う。

それにハルは残念そうな顔をするが、すぐに名案を思いついたのか、
ハクにお願いしていた。

それに微笑みながら了承するハク。

ちよつと待て、これは俺のであつて勝手に約束とかするなよ。
と思ったが、まっ、良いか、と思い流す事にした。

「それじゃ、行くか」

「ええ」

「ちなみに此処から遠いのか？」

「ええと、歩いて大体20分ぐらいでしょうか？」

「でも、バイクを押していくから、さらに掛かるんじゃない?」

話を進めるために、目的地がどのくらいで着くのか訊いてみる。
するとモモは、少し離れた場所にあると言ってきた。

だがネルは、バイクがあるからまだ掛かるんじゃないかと言ってきた。

「それなら大丈夫だ」

「えっ、どういうこと?」

「こういう事だ」

「えっ!?!、ウソッ!?!」

「すごい!?!」

バイクモードを車モードに移す。

質量の問題を無視した変形したバイクは、7人乗りの大型ワゴン車になった。

それを見て驚く、ハクに目を輝かせるハル。
他の人達も概ね、ハクと同じ反応みたいだ。

「ほら、驚いていないで早く乗れ」

「じゃあ、わたしは助手席ー」

「何処でもいいよ」

「さっさと乗ろー」

「そうね」

上から、俺、ハル、ウタ、テト、ハクだ。
それぞれ乗ると。

「モモ、後ろから悪いが、ナビゲーターを頼むぞ」

左斜め後ろの席にいるモモに言う。

「分かりました。それでは・・・」

快く了承してくれたモモの先導の元、一路モモたちの事務所に向かう。

第4話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は長くなったので、途中で切りました。

残りは、後日投稿します。

あと、誤字脱字なんかがあればご報告ください。

第5話（前書き）

残りの部分になります。

第5話

走る事15分

ビルが多く立ち並ぶ一角に、少し寂れたビルの前に大きなワゴン車が停まった。

「此処です」

「ここか」

「それでは着いたので、皆さん降りてください」

「了解」

モモの呼びかけで、テトが返事を返すと、サイドドアを開けて降りていく。

皆が降りるのを見ると、バイクモードに戻してアパートの駐車場に戻っておくようしておく。

すると、少し先の風景が歪み、そこに向かってバイクは勝手に進んで入っていった。
それを見た皆は。

「もう驚かないわよ」

「凄い機能だね」

「何でもありだね」

こんな反応が返ってきた。

何か詰まらないな。

流石に慣れてきたか？

まあ、いい。

「すまないが、事務所に案内してもらってもいいか？」

「すみません。ご案内いたしますね」

「こつちだよ」

バイクが行った方を、いまだに見ていた彼女たちに、事務所に案内してもらったために呼び掛ける。

逸早く此方に振り向いたモモは、放って置いた事に気づき、こちらに謝罪してハルと一緒に先を歩き始める。

俺はそれに続き、それに気付いた彼女たちも俺の後に着いて行く。

ビルの中に入ると、到る所が汚れていて、あまり清掃されていないことを表していた。ビルの中を見回していると

「こちらです」

モモがそう言つて階段の方に進んでいく。階段の隣にはエレベーターがあつたのだが、この人数では収まらないくらい狭そうだ。5人が限界に見える。階段で行くことに納得して、後に続く。なるべく距離を空けない様にする。空けすぎるとスカートの中が見えそうだ。そのまま上つていつて、3階に着く。そこから右に進むと扉を一つ過ぎた所に

歌音事務所

と看板の付いた扉の前に着いた。

「ここです」

「ただいま」

「いま帰ったわよ」

モモが此処がそうだと言うと、ハルとネルが先に入って、帰って来た事を告げる。

その後にくよくよに俺とモモ、ハクを残して、みんな中に入っていく。すると中から

「お帰り、ハルちゃん、ネルちゃん」

「お帰りなさい」

「あら、お帰りなさい。モモとハクわ？」

中から3人の女性の声が聞こえてきた。

この事務所には女性しかいないのか？

そんな疑問が出てくる。

モモとハクは、先に入って行った彼女達に顔を見合わせて苦笑している。

「それじゃ、中に入りましょう」

「メイコさん、お客様です」

ハクさんが事務所に入りましようと言って一緒に中に入る。

モモは、先に入ってメイコという人物にお客が来たことを告げる。

事務所の中は、事務机が10個の5×2列に並べられていた。

その先に少し大きめの机が、少し離れた位置にあった。

その隣で、窓の方を向いていた女性がこちら側を向いた。

容姿は、瞳の色は茶色でぱっちりとしていて、唇はプルンとしている。

髪は、ライトブラウンで顎の辺りまでの長さで、前髪は左側で分けている。

服装は、赤を基調としているのか、首から胸元近くまで開いているノースリーブのブラウスでへそ出しルックだ。

胸は結構大きいみたいで服を押し上げていた。

手には、フィンガーグローブを填めている。

下は、フレア型のミニスカートで黒のフリルが使われている物を着き、白のベルトを締めている。

靴はショートブーツのようだ。

メイコと呼ばれた女性は、俺の存在に気付き。

「モモ、この人が？」

「ええ、そうです」

「それじゃ、こちらにどうぞ」

「ああ」

「お茶の準備をいたしますね」

こちらに近づき、右手奥にある部屋へと案内する。

応接室なのだろう。

彼女の後に着いて行く。

その後に、ネルとハクが着いて行く。

モモは、お茶の準備をしに行ったようだ。

彼女の後をついて行く途中、緑の髪をツインテールにした女の子とピンク色の女性の隣を通り過ぎる。

通り過ぎる時、チラリと横目で見ると、どうやらお客様というのが珍しいのか目を見開いている少女と、

どこか警戒を顕わにした目つきをした女性。

そのまま応接室に入る。

「それでは、こちらにどうぞ」

応接室に通されると、手前のソファを勧められてそこに座る。

その後に、入口から奥になるソファにネル、メイコ、ハクの順に座っていく。

俺は、メイコの向かいになるように座っている。

ガチャ

「お茶をお持ちしました」

座って少しすると後ろのドアが開き、モモが人数分の緑茶の入った湯呑みをもってきた。

はい、どうぞ。

と、笑顔で俺の前のテーブルに置く。

置いた後、ネル、メイコ、ハクの前にも置いていき、失礼します、と言って出て行った。

置かれたお茶を一口する。

ホツとする味だな。

湯呑みを置くと、前を向く。

どうやら向こうも良いみたいだ。

「それで、どのような用件で来られたのでしょうか？」

メイコが最初に言ってきた。

それに答えようとして、

「それについては私が言うわ」

「そうね」

「ネル」

ネルが言った事にハクが同意する。

ネルが答えてくれるみたいだ。

ネルは、お昼に起こった事と、そのお礼と、家の事情を説明をするために此処に連れて来た事を彼女に伝えた。

それに、ハクが時に補足を入れたりしていた。

二人が説明をし終えて。

「そういう事でしたか。彼女たちを助けて頂きありがとうございます」

「気にするな」

彼女が頭を下げてきたので、気にするなと伝える。

「それで、そちらの事情というものを教えてもらっても良いだろうか」

「それは・・・、その、お恥ずかしながら、その・・・」

とても悲痛な顔をしていて、中々言おうとしない。
それも当然か、立ち聞きをしていて知っているが、借金だもんな。
しかも、かなり高額な。

実際、俺でも言うのは躊躇する。

しかし、中々言い出さないその姿に業を煮やしたネルが、

「あゝも〜じれったいわね。私が言っわ!」

「ネル・・・」

「借金よ、借金!しかもかなりのね!」

「金額の方が、200億です」

「で、支払いの期日が三日後。払え無かったらその会社の物になるわ」

「別に良いんじゃないのか？」

「よか無いわよ！！その社長はかなりの女好きだから、きつと私達を慰み者にする気なのよ！！」

「落ち着いてネルちゃん。向こうに聞こえちゃうわよ」

かなりの大声でしゃべるネル。

余りの声の大きさに扉の向こうにいる人達に聞こえてしまうので、ハクは落ち着くように言う。

でも手遅れだろう。
だって、

ガチャッ

「それ本当なのネルちゃんっ！！」

「「「どっいつ事っ！！」」」

「あっ」

「はぁ・・・」

扉が勢いよく開き、緑の髪をツインテールにした娘と、さつきはいなかった、黄色の髪をショートにしている双子の姉妹が入ってきた。

双子の姉妹は、片方は大きな白いリボンが付いたカチューシャをしている。

もう片方は、ボーイッシュな感じだ。

「ねえっ！」

「そういう事よ。ミク」

「メイコさん」

「「じゃあ、私達」」

「ごめんなさい」

「そんな、メイコさんの所為じゃないよ」

彼女達が乱入してきたせいで話が脱線したが、メイコさんが本当だと言うと彼女達も暗くなった。

「すまんが、話に戻ってもらってもいいか？」

「あつ、すみませんでした」

「ほら、3人とも戻つて。今はお客さんがいるから」

「「「あつ」「」」

これ以上、暗いままは嫌なので呼びかける。

いち早く、現実に戻ってきたハクが謝ってくる。

次に、メイコさんが3人に退室を促す。

そこで、俺がいたことに気付いた3人が、声を上げて驚いていた。三人は慌てて出て行き、失礼しました、と言って出て行った。3人が出て行き、暗かった場の雰囲気が幾分かましになっていた。

「こほんっ、お見苦しい所をお見せしました」

「いや、気にしていない。どうやら彼女達は知らなかったみたいだからな」

「そう言つて頂けるとありがたいです」

メイコさんが咳払いをして、謝ってきたので、大丈夫と返すとお礼を言つて頭を下げてきた。

それにしても、何時から借金をしてきたのだろうか？

途中で、銀行なんかで対処をしていても、おかしくない筈だが。その事を疑問に思い尋ねてみる。

「それで、話を戻すとするが、借金をしているのは分かったが、何時頃からなんだ？」

「と言うと？」

「いや、ここまで膨れ上がる前に、銀行なんかを使って、立て直しを図ったりしてそうなんだが」

「実を言いますと、その手は既に使っておりまして無理なんです」

「それに、この事務所、一回合併しているのよ」

「今此処に勤めている、唄音ウタさん、桃音モモさん、重音テトさん、亞北ネルさんがそうです」

「此処と、私が居た事務所がどちらも経営危機におちてね。それで合併したの」

どうやら既に使ったみたいだ。

その後、ネルが続くように現在の事務所が合併して出来たものだと言ってきた。

そういえばこの事務所は、どんなジャンルの仕事をしているのか知らないな。

「そうなのか。ちなみに、ここはどんな事務所なのですか？」

「歌手とスタントマンです」

「スタントマンと言っても、ハクだけだね」

「私は歌が下手だからね」

ハクは、てへへ、と苦笑していた。

それを聴いて、引っかかっていた事が解けた。

この人物達は、ボーカロイドやウタウの人物達なのだ。

俺の前の世界では、かなり人気があつて、動画での投稿もかなり凄い事になっていた。

やっとスッキリした。

さつきから、見た事がある人物達だと思っていた訳だ。

なら、あの双子の片割れは、男の子のレンの筈だが、どうみても女の子だった。

平行世界だからだろう。

そう結論付ける。

それなら、彼女達はそうとう歌が上手いはずだ。

それがどうして？と思い、聞いて見た。

「歌はどうだったのですか？」

「前は、かなりの人気だったのですが、何時頃から、仕事がぱったりと来なくなつたのです」

「しかも、何とか取ってきた仕事も、かなりギャラが少ないの」

「スタントマンの仕事も全く無くなってしまったんです」

「ふむ・・・」

どうやら、圧力が掛けられたみたいだ。

そのことは、彼女達も分かっているみたいだ。

十中八九、真黒カンパニーだろう。

彼女達も、何処の誰が掛けたのかまでも理解しているが、どうしようもないみたいだ。
しょうがない。

「分かりました。説明ありがとうございます」

「いえ、此方こそ」

これまでの話をして貰った事にお礼を言う。

その言葉を聞いて、メイコさんも返してきた。

「それで、こちらから話しがあるんだが」

「はい、何でしょうか？」

「まさか200億だしてくれるの？」

「まあ、待て。メイコさん、皆を集めてもらっても良いか？」

「ここでは狭いので、さっきの所で良いでしょうか？」

「ああ、大丈夫だ」

彼女達に話しを持ちかける。

その事に、メイコさんは尋ねてくる。

それに続いて、ネルが全額出してくれるの？と聞いてくるが待ったをかける。

メイコさんに皆を集めてもらう様言ったが、此处では狭いので向こうの事務所で言いか聞いてきた。

それに、大丈夫だと答えて、皆立ち上がると、隣の部屋に行く。

部屋から出ると、不安そうな顔をして彼女達は待っていた。

メイコさんと俺は、メイコさんが座っていた一番奥の机のある場所に立つ。

「みんな、彼から話があるそうよ」

メイコさんが、此方に向く様に促す。

全員が此方を向くと、

「皆様、始めまして、秋風火焰と言う。何故ここに居るのかというと、話があるからだ」

なんだ、なんだ、と少し騒がしくなる。
その様子を見て、

「すまないが騒ぐのは後にして欲しい」

すぐに静かになった。
よし、

「さて、はなしの内容なのだが」

少しためをつけて、より集中させる。

「200億。俺が肩代わりしてやろう」

そう言つと、

「うそっ!？」

「本当に!？」

と言つた言葉が返ってくる。

どうやら信じられないようだ。

何人かの人は、疑いの目で見てくる。

その人物は、メイコにハク、ルカ、テト、ウタ、ネルだ。
しょうがない。

前にいるテトにある指示を出す。

「テト、パソコンを起動してくれないか」

「もう、起動しているよ」

「それじゃ、OOX 銀行にアクセスしてくれ」

「ちょっと待って・・・、はい出来たよ」

「それじゃ、ちょっと代わってくれ」

テトに代わってもらい、パソコンの前の席に座ると、暗証番号を打ち込み、

会員サイトに入る。

会員サイトに入ると、残り残高を出す。

「これが証拠だ」

「うそっ」

「あり得ないわ」

「うわ〜」

「嘘でしょ」

「・・・・・・・・」

上から、俺、ハク、ネル、テト、ルカ、メイコ、ウタだ。

彼女達はパソコン画面の残高を見て、驚いていた。

そんな彼女達の反応を見て興味が沸いたのか、パソコン画面を見る
為に近寄ってくる。

そして、

「すごいです」

「わ〜〜、お兄さんお金持ち」

「「すごっ!?!」」

「こんなに持つてるなんて」

「本当ね」

それを覗いた、モモ、ハル、リン、レン、ミク、カイコも驚いてい
た。

それを見て。

「これで信じてくれたか？」

「ええ、信じるわ」

信じてなかった者達に問いかけると、ルカが代表で答えた。

「それで、もちろんタダじゃないんでしょ？」

「そういう事だ」

「それで、条件わ？」

そう訊いてきたメイコさんに、肯定する。
条件を聞いてきたので、答える。

「まず一つ目だ。俺はダンジョンに潜っている。そこに、パーティーを組んで入って貰いたい」

「でも私達・・・」

「大丈夫だ、無理して入ってもらう必要も無い。そちらの仕事を優先してくれ」

一つ目の条件を聞いて、ミクが言いよんだので、無理に入らなくても好いと伝えると、安堵したようだ。
それを見て、続ける。

「二つ目を話す前に、俺について語ろう」

「それが何か関係があるの？」

「ああ、そして話を聞き終わってから選んで欲しい」

言い終わると、俺の能力の一部と性衝動や体質について話した。能力は、なりきり師についてだ。

その話を聞き終わり、あの時の戦闘に納得がいったハクたち。

俺の能力を知らない人たちは、本当なのと言ってきたので、ハクに変身する。

それを見て、知らなかった者は驚いていた。

彼女達が落ち着いたのを見て、元の姿に戻る。

それから、体質での事で、どうするか聞いた。

「それで、大丈夫だという奴はいるか？もちろん無理だったら結構だ」

「僕は別にいいよ。むしろウェルカムさ」

「私もいいわよ」

「私もいいよ」

「あたしも」

「私もです」

「わたしもね」

テト、ハク、ハル、ネル、モモ、メイコが言ってきた。
言ってきた人達を見て、

「ありがとう。それで、どちらなら大丈夫なんだ？」

そう訊ねると、

「君は実に馬鹿だなー。そんなの決まってるだろ／＼／」

顔を真っ赤にして言ってくる。
他の皆も頷いていた。

「分かった。本当にありがとう」

彼女達に頭を下げてお礼を言う。
そんな姿を見ていた他の女性達は。

「ごめんね、火焰さん」

「いや、気にしないでいい。皆にとっては大事な事だ」

「そう言って貰えると、気が楽になるよ」

ミクが代表して、謝罪をしてくる。

でもこれは、女性にしたら大事な事だ。

そう思っていると、

「男性はまだ無理だけど、女性だったらオッケーよ？」

と、妖艶な笑みを浮かべてル力が言ってくる。

その姿を見た俺は、

「そう言ってくれてありがとう。冗談でも嬉しいよ」

その返事にル力は、冗談じゃないのに、と少し拗ねた様に小さな声で言った。

それがたまたま聞こえてしまった俺は、本当か・・・、と少し冷や汗を掻いた。

それにしても、彼女達は大きな問題が解決したからか、笑顔がこぼれていた。

とても良い笑顔だ。

この笑顔が、この先ずっと見れるのならあの条件はいらなかったな。そんな事を思ってしまうくらいに、彼女たちの笑顔は綺麗だった。

さて、残りの問題をどうするかだが。

借金は返済できるが、圧力があるせいか、仕事が来ない事にはどうにもならない。

どうやら、あの真黒カンパニー、ネルたちの話によると大規模な企業らしい。

色んな分野に手を広げていて、多くの成功を収めているみたいだ。表向きは、かなりの優良企業みたいだが、裏ではかなりの事をやっているみたいだ。

気に入らない会社があれば、裏から手を引いて、潰したり、気に入った物や女性がいれば、弱みを握って、強請ったり、お金に物をいわして、手に入れているらしい。

しかも、その事実を隠蔽している能力も凄い。外部に、一切漏れないようにしているからな。

ちなみに、裏にいるのは社長と幹部の数人みたいだ。

あとは、真っ白らしい。

さて、どう潰そうか。

その事で悩んでいると。

「どうしたの、考え事？」

「ああ、真黒カンパニーをどう潰そうかと考えているんだ」

俺が悩んでいたのが分かったのか、ネルが聞いてきた。

俺、表情には出ないようになってるんだが。

まあ、そんな事はどうでも良い。

なにも良い案がないので、ネルに話してみることにした。その話を聞いてネルは、ニヤリと笑う。

「私に任せなさい。要は、証拠が必要なんですよ？」

「まあ、そうだな。多ければ多いほどいいが」

「なら、私の知り合いに声をかけて、集めてあげるわ」

言うや否や、携帯を取り出し、指をかなりの速さで動かし始めた。その姿が目についたモモにウタ、ハクとメイコも、何をしているのか気になったのか近づいてきた。

「何してるの？」

代表でメイコが聞いてきた。

俺達が、真黒カンパニーを潰すという事を、彼女たちにも話した。その話を聞いて彼女達は、

「それじゃ、テレビ局の顔なじみに聞いてみるわ」

「私は、スタントマンの仕事で仲良くなった人たちに聞いてみます」

「私とウタさんは、パソコンを使って調べてみます」

「ハッキングなら任せろ」

それぞれ、頼もしい返事が来た。

しかもウタなんて、ビシツ、っという音が聞こえるくらいのサムズアップだ。

それにしても、一部、恐ろしい事をさらりと言う方たちがいるが・・。

それはさて置き、さっそく行動を開始した。

モモとテトには、作業効率の向上をする為に、最新のハイスペックのパソコンを使用して貰う為に買い出しに行ってもらった。

ついでに、俺用のパソコンと他の人達の方も頼んだ。

もちろん費用は、俺持ちで、と伝えると。

二人は、かなり嬉しそうにして、さっそく買いに出かけた。

さあ、勝負は明日から、今日を外して残り3日。

さて、彼女達の輝かしい未来のために勝ちにいかうか。

真っ赤に染まった夕焼け空を見上げながら、俺は決意した。

第5話（後書き）

如何でしたでしょうか。

誤字脱字等がございましたら、感想の方でお願いします。

あと今日は、主人公のプロフィールの方を更新して終了です。

第6話（前書き）

さて、第6話となります。

第6話

家のソファでゆっくりと寛いでいた。

今日の格好は、黒いスーツに黒と白の斜め線が交差している、グレンチェックネクタイをしている。

あれから二日経った。

今日は、約束の支払日だ。

200億円も準備できている。

現時間は、10:00で、約束の時間は11:30だ。

約束の時間までまだあるので、二日間の事を振り返った。

一日目は、とにかく情報収集をした。

ネルは、バイトで知り合った人達にメールでのやり取りに、実際に会って、話を聞いて回っていた。

ハクは、スタントマン仲間や、それに関わった監督達に話を聞きに行った。

メイコは、放送業界の方を中心に回っていた。

モモとウタは、午前中に届いたパソコンを早速起動させて、自分達に使い易い様に弄っていた。

午後からは、社内内部や系列会社にハッキングをして、証拠集めをしていた。

俺といえば、黒幕の社長と幹部の監視をしていた。

社長は、さすが悪役というような人相をしており、デブプリした体だった。

幹部の方は、意地悪そうな顔の人物が二人で、片方は中肉中背で、もう片方は細身の人物だった。そいつらを一日中、監視をしていた。離れる場合は、崩に頼んで別々に監視をした。

二日目は、ネル達は替わらずに同じ作業をしていた。

俺は、前日の夜に忍び込み、隠しカメラと盗聴器を設置して回った。当然社内には、その会社の監視カメラがあるので、設置されない、社長室と幹部の部屋に設置していった。

同時に、証拠となる物は無いかと探してみる。

すると社長室からは、次の狙っている人物の個人情報に会社のリストが見つかった。

幹部の部屋からは別々に、今まで行ってきた事に関する資料と、関係者と薬物のリストがあった。

管理がずさんだと思ったが、こちらにとってはありがたい限りだ。それらを失敬して、会社を後にした。

午前中はお金を下ろしに銀行に向かった。

あまりにも大金だったので、ちょっとした手続きが必要だったが。

その後は、特にする事が無かった為、きちんと隠しカメラと盗聴器が作動しているのかの確認をした。

ちゃんと出来ていたので、そのまま放置して、株を始める為の準備をしていた。

午後は、現在の進捗状況を知る為に報告会を開いた。

皆、頑張ったようで、徹夜もしていたのか、かなり辛そうだ。

おかげで、色々と話や証言、情報も手に入り、明日のために皆には寝てもらった。

これで、二日目は終了した。

そして、今に至るとい事だ。

回想が終わると、30分経っていた。

まだ時間が有るので、あいつらを潰すためのシュミレーションをして時間を過ごした。
もし必要なら俺は、あいつ等を

消す

11:00になったので、黒い革靴を履き、彼女達のいる事務所に向かった。

乗り物は、お金が入ったジュラルミンケースがあるので、前回と同じ、車にして行った。

マンションを出る前に、崩に会社に設置してあった隠しカメラと盗聴器を外しに行つて貰う。

運転して、15分で到着すると、外で、ハクとメイコとネルが待っていた。

ネルの横には、大きな台車が一つあった。
車を彼女達の前に停めると、

「おはよう、3人とも」

「ええ、おはよう火焰」

「おはよう、火焰さん」

「おはよう」

三人に挨拶をすると三人も返してくれた。

「すまないが、トランクケースを降ろすのを手伝ってくれないか？」

「そのつもりで、ここで待っていたのよ」

「さ、ちゃっちゃんと始めましょう」

「そうね」

ジュラルミンケースは、合計10個だ。

さつさと三人で、ジュラルミンケースを台車に乗せた。

台車に乗せ終わり、車はバイクに戻し、自分のマンションの駐車場に戻ってもらった。

バイクが行ったのを見送ると、ビルの中に入る。

「それじゃ、私はこれに乗せて、エレベーターで先に行くわね」

「よろしくね」

「私達は階段で上るわよ」

「分かった」

中に入ると、ネルは台車と一緒にエレベーターに乗って上へ。

俺とハクとメイコは階段で3階へ向かった。

3階に着くと、既にネルは事務所前で俺達の到着を待っていた。

「遅いわよ」

「すまない」

「ごめんね、ネルちゃん」

「待たせたわね」

何時までも待たせるのは悪いので、少し早足で近づく。
事務所前に着くと、ネルを先頭に中に入る。

「ただいまー」

「今戻ったわよ」

「火焰さんも来たわよ」

「こんにちは」

「おかえりなさい」

「ネルちゃんたち、おかえりー」

「火焰さん、いらっしやい」

「待ってたよー」

中に入ると、他のメンバーは全員いた。

今日がとても重要な日なので、全員真剣な顔をしており、部屋の中の雰囲気引き締まっていた。

今回、彼らと応接室で会うのは、俺とメイコとハクだ。

他の皆は、この部屋で待機になる。

残り時間が5分前になっているので、ネルにお金を応接室に運んでもらい、

俺達は出迎えの為、事務所の入り口で来るのを待った。

入り口に出て7分ぐらいで相手はやってきた。

チン

エレベーターの音が聞こえた。

そちらの方に視線を向けると、デップリした体格のおっさんと、二人のガードマンが後ろに控えてやって来た。

「待たせてしまったな」

「いえ、そんな事はございませんわ」

さすがの狸の被りようである。

社長は、朗らかな笑顔を浮かべている。

これが裏で、あくどい事をしているような人には見えない。

だが、よく眼を見てみると相手を視姦する様な視線を送っている。

メイコも挨拶をしていたが、若干引きつっている。

「それでは、中の応接室で話しましょう」

「そうだな。その前に、その君は誰かね？」

メイコは、一刻でも早く帰って貰いたいのか応接室に通そうとする。相手もそれに了承し、事務所に入ろうとするが、メイコと一緒にいた俺に気が付き、怪訝な顔をして聞いてきた。それに対して、

「お初にお目にかかります社長。私は新しく彼女の補佐になった者です」

「ほう、そうなのか。若いのに凄いじゃないか」

「そう言って頂けるとは、恐縮です」

「言葉遣いも素晴らしいな。こんな若者がいるとは、あなたが羨ましい限りだ」

「そんな、私も彼に大変助けられていますわ」

事前に打ち合わせしていた通りに言うと、相手は納得した顔をした。しかし眼の方は、胡乱気な者を見る眼をしていた。

やはり、警戒しているか。

このまま此処に居るのもなんなので、さっさと中に入ってもらおう。話が脱線しているので、元に戻すでしょう。

「此処で話しているのは、相手方に失礼な為、そろそろ中に入りましょう。メイコ社長」

「そうね。すみません、話し込んでしまつて」

「いやいや、此方も悪かつたからな、気にしていないよ」

「それでは中へ」

事務所の中へ社長達を通して、俺が扉を閉める。

メイコさん達は先に進んで応接室に入つていった。

それを見た後、カイコにお茶を入れるのを頼み、俺も応接室に入つた。

中に入ると、既に話が始まっていたようだ。

ボディーガードは、社長の後ろに控えていた。

「失礼します。遅れて済みませんでした」

「何、気にしておらんよ」

「ええ、そうよ。あなたは私の隣に座りなさい」

「お心遣いありがとうございます。それでは失礼して」

遅れて入ってきた事を謝ると、二人とも気にしていないと言ってきた。

だが眼の方は、社長は少し憎々しげにしており、メイコさんは安堵していた。

俺は、ボディガードと同じように後ろで控えていようとしたが、メイコさんが隣に座るよう進めてきた。

大丈夫かどうかを、前に座っている社長に確認のために視線を送ると、彼は頷いた。

一言断りを入れて、メイコの隣に座った。

「それで、話の続きなのだが用意は出来たのかね」

「はい、もちろんですわ」

「それは本当かね!？」

「ええ、こちらがそうです」

「頼むよ」

「はっ」

彼が、お金を準備できたのか訊ねてきた。

その時の眼は、無理だろうと愉快な感じの色だったが、

メイコさんが、用意してあるというと、信じられないといった表情をした。

確認の為に、もう一度聞くと、あらかじめ用意してあったジュラルミンケースを見せた。

それを、後ろに控えていた男達に持ってこさせて、確認している。ケースに隠れて顔が見えないが、体が心なし、震えている。それもそうだろう。

あんな大金、普通は無理だ。

だが、俺という人物が係わった事で、あいつの計画が崩壊した事になる。

10個のケース、全てを確認し終わると、

「確かに、200億。確認させていただいた」

「それでは」

「ああ、おめでとう。これで君達は自由だ」

彼が、全額ある事を認めて、終わった事を告げた。眼は、愕然とした色に包まれていた。そんな中で、

「すみません。お茶をお持ちしました」

メイコさんが、頼んでいたお茶を持って中に入ってきた。それを聞いた彼は、既にいつも通りの表情を取り繕って、

「いや、もう終わったので結構だよ」

それでは、私達はこれでお暇させてもらうよ。

と言って、帰ろうとしたので、俺とメイコさんが外の入り口まで、見送りに出た。

彼らが乗ってきたのであろう、黒の高級車がビル前に停めてあった。それに乗り込み、帰っていった。

見えなくなるまで見送ると、メイコさんは急に走り出した。

それを見て、俺も追いかけて事務所に入ると、

「終わったわよー！ー！ー！ー！ー！」

「やったー！ー！」

「おめでとう！」

「やりましたねー！」

「自由だー！」

メイコの喜びの声に、皆が思い思いの言葉を言って、騒ぎ出す。皆、嬉しそうだ。

その姿を、扉にもたれ掛かり見ている。

「あっ」

「どうした、テト？」

「火焰の表情が」

「微笑んですよ、火焰さん」

「モモ・・・そうか」

俺を見て驚いているテトとモモにどうしたのか訊ねると、どうやら微笑んでいるらしい。

普段動かない表情も、この時ばかりは微笑を浮かべているみたいだ。そんな俺の表情に、二人はほんのり頬を赤くしていた。どうやら、刺激が強いみたいだ。

二人以外の皆は、俺に気づく事もなく騒いでいる。なら、こんな目出度い日だ。

「おい、俺の奢りで飯を食いに行くぞ！」

皆に聞こえるよう、普段より大きい声でしゃべる。

それが聞こえたのか、やったー！、と歓声が上がった。昼食会は、かなり盛り上がった事を此処に記しておく。

現在、 19 : 30

すでに皆と別れて、家で夕食後の、のんびりタイムに入っている。
今日は、少し遅い昼食を食べた為、夕飯は軽く済ませた。
明日から再びダンジョンに潜る日々になる。
次はどんなアイテムが手に入るのかと、考えていると、

「主」

「お帰り、崩」

突如、俺の前に崩が姿を現す。

崩は、左足と右手を付き、頭を垂れている。

「どうなった？」

「手はず通りに」

「そうか。ありがとう」

「勿体無きお言葉です」

頼んでいた事をやってきて貰ったのでお礼を言う。
その言葉を聞き、彼女は畏まる。

「これで警察も動くか」

「時間の問題かと」

そう、俺はこの前手に入れた証拠を、崩に頼んで警察に届けてもらったのだ。

もちろん匿名にしてだ。

これを見て、社宅捜査が起こればいいがな。
さらに、逮捕されれば文句は無いだろう。

明日が楽しみだ。

口元がニヤリと形作る。

さて、今日は少し早めに寝るか。

崩にもプレゼントをあげないと。

ソファから立ち上がり、崩の前に立つ。

「頑張って貰ったお礼に、褒美をやるう。っと、その前に立ってくれ」

「はっ」

彼女はまだ、方膝と腕を付いた状態だったので、立って貰う。
立つと、彼女の顔が見れる。

その表情は、少し恐縮した様なものだ。

それを見て、生真面目だなと思う。
そんな彼女に、

「今日は一緒に寝てもらおうわけだが」

「それは、まさか・・・」

「そうだ」

一緒に寝るといふ言葉を聞いて、顔を真っ赤にしてうろたえている。
彼女が言おうとした事の途中で肯定する。
すると、さらに顔を赤くする。

その姿を見て、もう既に肌を合わせた仲だと言うのに、初心だな。
と思ってしまう。

そんな彼女に抱きついて、耳元でさらに言う。

「俺の処女をやる」

「えっ・・・」

それを聞いたとたん、彼女は微動だにしなくなった。
まさかの、男女逆転でやると言うのだ。

彼女の表情を見るために、近づけていた顔を離して見てみると、

ボンッ

そんな音が聞こえてきそうなくらい、さらに赤くして固まっていた。
ふむ

崩を離して、目の前で手を振ってみるが反応しない。
気絶してるな。

それを好機と見て、二人でさっさとお風呂に入り、寝室に行った。
彼女は、行為の途中で気が付き狼狽していたが、何度か焦らしてや
って

興奮状態にすると、俺の肉体を女にして、崩に男のアレを生やすと、
襲ってきた。

そのまま、何回かやって、男の気持ちよさを感じてもらった。
こうして夜は、更けていった。

後日談なのだが、俺がいつの間にかあの事務所の社長になっていた。
メイコ達に問い詰めてみると、

「あいつらの圧力が無くなって、私達に出演依頼が殺到して社長と
かをやってる暇が無いのよ」

だそうだ。

それを聞いた時、他の奴でも良いじゃないか、と言ったのだが。

「駄目なんですか？」

「火焰さん、お願いします」

「僕からも頼むよ」

「私からも良いかしら」

等と懇願されたりしたら断る事が出来なかった。

断ろうとすると、ハルやモモが泣きそうな顔をするし、あれは脅しだぞ。

結局、俺が折れて社長になる事を了承した。

何か仕事があるのかと聞いてみると、特に無いのだそうだ。

たまにテレビに出てもらう事になるそうだ。

そのくらいなら良いかと思った。

しかし、この甘い考えが後に、大変な事に繋がる。

それは、まだ先の話。

第6話（後書き）

如何でしたでしょうか？

誤字脱字などがございましたら、感想の方でのご報告をよろしくお願ひします。

第7話（前書き）

お待たせしました。
第7話となります。
それではどうぞ。

第7話

「うっっん」

朝日が窓から差し込み、目蓋を刺激する。

それに伴い、体の一部の違和感と、昨夜一緒に寝ていた存在が俺の腕の中に感じられる。

昨日の夜は、とても激しかった。

崩が途中から積極的になったからな。

思考がクリアになり、本格的に目を覚ますために目蓋を開く。

目を開くと、むにゃむにゃ、と崩の可愛い顔が見れる。

その姿を見ると頬が自然に弛む。

今日の朝は、二人で食べようと思い、ベットから出る。

「つつ、まだ中に入ってるみたいだ」

立ち上がると、中に物が挟まったみたいで、歩きにくい。

それを何とか無視して、お風呂場に向かう。

お風呂場に着くと、体に付いている汗やアレを洗い落とし、体を綺麗にする。

風呂から上がると、脱衣所で体を拭いて、シルクで出来た紫の刺繍のされた下着を着ける。

その後、白のミニスカートに黒のＴシャツを着る。
脱衣所を出ると、リビングに向かい、朝食の用意をする。
今日のメニューは、白ご飯にナメコとワカメの味噌汁に味ノリにした。

粗方の準備が済むと、火を止めて崩を起こしに行く。
自室来ると、中に入る。

ベットの中では、今だに眠っている崩がいた。
彼女に近づき、起こす為に体を揺する。

「ほら、朝だぞ」

「ん、んん・・・」

「起きろ」

「うっ」

何回か揺すり、声をかけて目を覚ます。

体を起こし、崩は眼を擦りながらこちらを見る。

体を起こした事で、彼女の上半身があらわになる。

崩の体は、さらに抑えられていた胸は、かなり大きく、両手からはみ出すほどだ。

腰の括れも凄く、無駄な脂肪が一切無い。

肌もきめ細かく、すべすべしている。

そうやって見ていると、視線の端に自己主張をしているものが見えていた。

男性ならではの生理現象だ。

それをまじまじと見ていると、ようやく意識が覚醒した崩が慌てて

布団で体を隠す。

その後に、こちらを潤んだ眼で上目遣いで睨んでくる。
ふふっ、それは逆効果だ。

嗜虐心をくすぐられて、弄る事にする。

「どうした、布団を被って」

「そんなの恥かしいにはう！、あっいや」

「くすくす」

なぜ布団を被ったのかを聞くと、彼女が返事をしている最中に、
布団の上から下半身を圧迫する。
すると、あまりの刺激に呻いた。
その姿を見て、さらに興奮する。
そのまま、刺激し続けていると、布団を握っていた力がなくなり、
再び裸を晒す。

「崩はエッチだな。此処をこんなにするなんて」

「ちがつ、それは生理現象でっ、うっ」

「そうなのか。なら俺が鎮めてやろっ」

「あるじっ、んむっ」

彼女に抱きつき、大人の口付けをする。
少しすると、彼女の目は、トロンとしだした。
そのまま、朝の一回目をした。

「ふう、気持ちよかったな」

「うう・・・ここでもやるなんて」

あの後、ベットでしてベタベタになったので、お風呂に二人ではいと、そのまま二回戦に入った。

終わったあと、体を綺麗に洗い、今に至るという訳だ。

お互い、体を拭き終わった後、崩の肉体を元に戻して、下着を身に着け、普段の服装に着替えた。

リビングに着くと、冷えている朝食を温め直して、食卓に並べる。
料理が出来ていた時、崩は申し訳なさそうな顔をしていたので、好きでやった事だ。と言って、席に着かせた。

食卓に料理が並び終わり、崩の向かいの席について、

「「頂きます」」

その合図の後に食べ始める。

「味の方はどうだ」

「おいしいです、火焰」

「そうか、それは良かった」

彼女が微笑んで言ってくれたので、とても嬉しく思う。
そのまま談笑しながらご飯を食べる。
少しして、食べ終わると

「「ごちそうさまでした」」

「私が、片付けますので」

「ありがとう。頼む」

「はい」

彼女が言ってきたので、頼む事にした。
湯飲みと急須を残して、残りの食器を重ねて、キッチンに消えてい

く。

「ふ」

彼女が食器を洗い終わるまでのんびりする。

「終わりました」

「それじゃ、ダンジョンに行くか」

「はい」

皿洗いは、10分ほどで終わり、こちらに戻ってきた。

それを見て、ダンジョンに行く準備をして、マンションを出る。マンションを出て、歩いてダンジョンに向かう。

少し歩き、ダンジョンの入り口前に着くと、入り口の横にあるワイプ装置で、10階に転移する。

崩と戦った広間に転移してくると、奥の扉に向かい通路に出る。通路を少し進むと、下に続く階段が見つかり、先に進む。

次の階につくと、狭い部屋の中だった。

敵がないので、能力を格闘にして、リボルバーナックルとグラスヒールを装備。

非常事態に備えて、何時でもアシエンになれる様にしておく。

今回は、火竜の使用が中心だ。

準備が整うと、扉を開ける。

扉を開けると、通路の先が見えない程、長く続いているみたいだ。

いつも通りに気配を読むために集中すると、少し先に五匹の敵の気配がした。

よし。

右手の指で『崩』の文字を、空中に書く。

その直後俺の頭上に、野球ボールより一回り大きい五つの火球が出現した。

それを敵の気配がある方に飛ばす。

「ギャー!!!?」

突然の不意打ちに、遠くにいた敵は、断末魔を上げた。

その数は五つ。

仕留められたかどうかを確認するために、近づいていく。

倒せていない可能性もあるため、油断をせずに近づく。

進んでいくと、地面に少し大きい白い結晶球が七つほど転がっていた。

どうやら、多く落としたみたいだ。

それらをカードに収納した後、先に続く通路を進んでいった。

この階を粗方回ったが、この階は敵が少なかった。
おかげで、あまり練習にならなかった。

ここが最後の部屋になるので、もしかすると残りの敵は此処にいる
のかもと思い、少し隙間を空けて、中を覗く。

中には、モンスターはいなかった。

それが解り、扉を大きく開いて中に入る。

中に入ると、視線の先に扉が見えたのでそこに向かって進む。
その途中、

パァー！ー！！

「畏かつ！？」

床が光り、俺の足元に魔方陣が出現した。

その次の瞬間、部屋一杯にモンスターが出現した。

モンスターは、スライム無色、赤。

ゴブリン、植物の葉っぱを付けた小さなモンスターで埋められてい
るみたいだ。

奥の扉の方には、人間の中学生サイズのゴブリンが見えた。
これがリーダーなのだろう。

そいつを見た瞬間、止まっていたモンスター達が一斉に襲ってきた。
くっ！

「……………」

地響きの様な叫び声とともに、巨大な斧剣が横薙ぎされて、多くのモンスターが吹き飛ばされた。

その姿は、優に2mを超えた巨体をしており、上半身は剥き出しにしている。

肉体は鋼の様だ。

眼は赤く、理性がある様には見えない。

そんな巨体が、叫びながら周りの敵を薙ぎ払っていく。

モンスター達は、まるで紙切れの様に吹き飛ばされたり、切り刻まれたりしている。

それが10分ほど続くと、モンスターが殆んどいなくなっていた。

それを見た後、再び職業をチェンジする。

職業を格闘家に、装備をグラスヒールとリボルバーナックルに変更する。

再び光に包まれて、縮んでいくと元の姿に戻り、残り六体となったモンスター達に突っ込んでいく。

「しっ」

「ピギッ」

一番近くにいた猪の様なモンスターに、右足で蹴り飛ばす。

その時、グラスヒールに搭載されているショットガンも一緒に当てる。

当たった場所は、小規模な爆発を起こし、威力が倍増されている。すごい勢いで壁に激突すると、光の粒子になり、結晶球が転がる。それを視界の片隅で見ると、こちらに突撃してきているゴブリン2

体に向かって突っ込む。

「ふっ、とっ」

「ぴぎゃっ」

「ぎっ」

「そら」

「「ぎゃっ」「」

左にいたゴブリンが棍棒を振り下ろす前に回し蹴りで高く蹴り上げる。

右にいたゴブリンのは体を捻りながら右手で逸らす。

逸らした後に、回転のスピードを乗せながら軸足を変えて、右足ですくい上げるようにして、さっきのゴブリンの方に飛ばす。

二匹がぶつかり合い重なると、『崩』を発動させて、バスケットボール台の大きさのある火球で仕留める。

残りの三体は、中型のゴブリンにその前に立つように小型のゴブリンが二匹。

その二匹が同時に突撃してくる。

距離が十分にあるので、崩の火球と魔神連牙弾で倒す。

二匹のゴブリンがやられたのを見ると、中型のゴブリンが自身の身長と同じ木の棍棒を担ぐ。

その姿を見て、特殊職の無限のフロンティアEXCEEDのアシエン・ブレイデルに姿を変える。

その姿は、モスグリーンの色をした瞳に髪をした20代に見える女性だ。

髪は、膝より少し上の位置まであり、眼は切れ長で凛々しい顔立ちだ。

格好は、お腹から下が競泳水着の様な物になっており、胸のほうは、鎖骨から上胸がくり抜かれている機械で出来たプロテクターを装着している。

くり抜かれている場所とグラスヒールと太ももの晒されている所には、緑の布のような物で覆われている。

顔は、髪を上げるようにされた耳当てのような物と一緒にになっている機械で出来た物が装着されている。

額のほうで、両側にスライドして収納されるようになっていたみた

いだ。

姿を変えた後、

「行くぞ」

「ギャッ」

こちらの声に答えるように一声ないた後、突っ込んでくる。

「ギギッ」

「フンッ」

見た目とは違う素早い動きで近づくと、ブンツといった音を立てながら棍棒を振り下ろしてくる。

それを両腕を頭上でクロスして防ぐが、普通の人間だったらそれだけで潰される威力が、腕から伝わってくる。

そう、”普通の人間”ならだ。

彼女は、戦闘用アンドロイドなのだ。

見た目は、完璧に普通の人間に見えるのだが、体の中は機械で作られている。

なので、大したダメージはない。

クロスした腕で棍棒を弾き飛ばすと、敵は腕を上げた状態になる。

「次はこちらからだ」

「行くぞつ、タンGRES・バイト!!」

胴体に四発ほど殴ると、左足を軸に右回し蹴りを放つと同時に、ヒールのショットガンも当てる。

その勢いで敵は宙に浮く。

ショットガンの勢いで少し後退するが、すぐに体勢を立て直して、敵に背中を向けるようにして体を捻る。

捻った体制から元に体制に戻る力を生かして左の裏拳を当てる。

再び背中を見せるよう体を捻り、左の裏回し蹴りを当てる。

そのまま一回転して、右ストレートを当てると、未だに宙に浮いているので、

体を捻りながら左足で跳躍。

そのまま、右の裏回し蹴りが当たると同時にショットガンを放ち、敵を壁に叩きつける。

叩きつけられたゴブリンは、バウンドして此方に向かってくる。それにタイミングを合わせて、

「ゲンブ・スパイク!!」

肘辺りから腕が外れて、ワイヤー付きのロケットパンチを放つ。それを左、右、左、体を左回転してその勢いで、右を放つ。

それで、ゴブリンは思い切り打ち上げられる。

それを見ながら、右手を飛ばしたワイヤーをすぐに巻き戻す。

体を捻り背中を向けて、そこから落ちて来るタイミングを計る。

ゴブリンの位置が、自身より少し高い位置まで落ちたのを見ると同時に、

コードD T Dを発動。

すると、緑の布の様な物は、液体になり、収納される。

額につけていた物も、左右に分かれて耳宛に収納される。

これは、体を熱暴走させて威力を上げているのだ。

性格も変わり、クールな見た目から、人懐っこいものになっている。表情もニコニコとしている。

右足を軸に体を回転させて、渾身の左ロケットパンチをぶつける。

放つ際に、風を巻き起こしながら飛んでいた。

それがヒットしたゴブリンは、壁に大きなヒビを入れて、倒れ伏した。

「これがコードD T Dの力だ!!」

テンションの高い状態で言うと、元の姿に戻る。

その後、伏した状態のゴブリンから体が粒子になり、野球ボールより大きめな結晶球に小さい物が数個転がった。それが済んだ後に、広間の中央に大きな宝箱が出現した。

宝箱はひとまず置いておき、周りに散らばった結晶球の回収をした。あちこちに散らばった結晶球を回収し終わると、ポーチにカードを直し、

体力と魔力回復のアイテムを取り出して、使用する。十分に回復すると、宝箱に近づく。

「さて、今回は何が手に入るのか楽しみだ」

心持ち、わくわくしながら宝箱を開ける。開けて中を覗くと、

「なるほど」

中に入っていた物は、赤いビー玉、頑丈なナイフ（柄の部分にナイフの出し入れのギミック）、蒼い水晶のような物で出来たグローブ、古びた一冊の本、カードが一枚入っていた。

それらを手に取って、脳内で特殊職の確認をすると、

ぴろりん♪

特殊職が増えました。

レイジングハートの入手により、リリカルなのはから、高町なのはになります。

現在、レイジングハートの起動は可能だが、リンカーコアが機能していないために、魔法の使用が不可。

七夜のナイフを入手により、月姫から七夜（遠野）志貴になれます。七夜の体術と淨眼は使用できるが、直死の魔眼が封印中のため、殺傷能力が低下。

氷精霊のグローブを入手により、テイルズシリーズから、セルシウスになります。能力制限はありません。

世界の閲覧書を入手により、地球の本棚の閲覧が出来る様になりました。

これから様々な世界に行く場合、その世界の記憶が見れます。（閲覧者が付け無い限り、ロック、パスワードなし）

この閲覧終了後に、魂と同化します。

リミッター解除のカードの入手により、全体のパラメーターの底上げ、直死の魔眼の第一リミッターの解除。

これにより、点と線が見えるようになりました。

パラメーターのランクには変動はありません。

この閲覧終了後、世界の閲覧書もある為に、意識をシャットダウンして異次元に入り、

これらの使用に耐えうるよう肉体と脳の調整を受けてもらいます。

所要時間、8時間。

異次元から脱出後、現時間の一秒後に出現設定になっています。

使用後は、カードは消えます。

これらの情報が、頭の中で流れ終わると意識が無くなった。倒れ伏した彼の真下に、彼をスッポリ覆える大きさの穴が出現。そのまま落下していった。

彼が居なくなると、穴は次第に縮んでいく。

最後には、石で出来た床に戻り、静かな空間が支配した。

それも束の間で、すぐに彼が黒い穴から押し上げられて出てきた。全身が床から全て出ると、黒い穴は消えた。

それから20分。

「くっ」

身じろぎ一つしなかった体が動き、彼は目を開いていく。

「どうやら、終了したようだな」

体を慎重に起こし、不具合が無いかの確認をする。

体を軽く動かすが、何処にも異常は無い。

むしろ、先程より体が軽く、内側から力が溢れる感覚がする。次に、脳内と魔眼の確認に入る。

各ステータスに+1000されていた。

魔眼の方は、頭の中に、三つの光球体のような物があった。青、白、黒だ。

青だけは、包帯のような物で巻かれていた。

一旦目をつぶり、試しに、白い方に意識を向けて目を開く。すると、普段より明るくなった世界が映った。

線と点が見えないところを見ると、淨眼のようだ。

再び目をつぶり、包帯が巻いてある方に意識を向ける。

それだけで、包帯は解ける。

それを感じて目を開くと、視界に映る範囲全てに、点と線の描かれた不安定な世界が見える。

これが直死の魔眼。

遠野志貴が言っていた通り、今にも世界が崩れそうだ。

次に、自身の身体を見てみる。

そこには、線と点が見えなかった。

その事に疑問を持ったが、ナイア達が元から弄っていたのだろう。

おかげで、同じ直死の魔眼もちに対抗できるから、由^{よし}としてよう。

死を理解する事で発生する問題の頭痛はしない。

普通は、死を理解するということ出来ない事をしているのだが、先程の肉体改造で平気になったのか。

これで戦闘に支障はなくなったな。

特殊職の志貴の所を見てみると、能力低下の方もなくなっていた。これで良し。

確認が済むと、普通の目に戻し、レイジングハート以外は異空間に仕舞った。

それが済むと、頭の中に崩の気遣うような声が聞こえてきた。

『もう大丈夫ですか、主？』

「ああ、もう大丈夫だ。心配をかけたな」

『いえ、主が無事ならいいのです』

「そうか。後、さっきまで周りの警戒をしてくれて助かった」

『いえ、当然の勤めです。御気になさらずに』

「それでもだ。ありがとう」

『はい』

崩の少し嬉しげな声を聞いて、先に進む事にした。
それにしても、まだ一階しか降りていないのにとっても疲れた。
そう思いながらも、20階目指して歩を進めた。

第7話（後書き）

如何でしたでしょうか？

誤字脱字などがございましたら、感想板にてご連絡ください。

番外編 バレンタイン 前編（前書き）

皆様お久しぶりです。

卒論がようやく終わり、小説を書く暇が出来ました。
注意です。

今回は、まだ書いていない話のちょっとしたネタバレになりそうです。

キャラクター的な意味で。

特にこのキャラはこの名前じゃなきゃ嫌、TS化は駄目だ、という方は見ない方が良くかもしれません。

前書きはこれくらいにして、本編をどうぞ。

番外編 バレンタイン 前編

ボカロ口＋火竜の世界

世界は、物音が聞こえないほどの静けさにつつまれていた。

今は深夜と呼ばれるほどの時間だ。

そんな時間に、とあるマンションの一室には明かりが点いている。

その一室は広く、テーブルと呼ばれる物の上には、銀色をした調理器具に様々な材料が置かれていた。

部屋を見回すと、テレビにソファーといったものや、少し離れた位置には、調理をする為の最新式のキッチンが設置されており、その横には、業務用の冷蔵庫より一回りも二回りも大きい冷蔵庫が置かれている。

所謂、リビングと言われる一室だ。

そこには、大勢の女性が集まっていた。

「皆、準備は出来た？」

部屋から大きなリボンをつけている少女のシルエットの口の部分が動いた。

「ええ」

「ばっちりよ」

「もちろん」

「買いもろしは無い」

それに答えるように、他のシルエットが頷いたりして動いていた。

「今回もまた凄い事になりそうだね。デフォこん」

ツインドリルのシルエットが、隣に居る帽子をかぶったショートカットのシルエットに話をふる。

「ああ、今回は別世界の女性達が来るからね」

「前回の事を踏まえて、今回は屋敷にあるパーティーホールを使うそうですよ」

「モモちゃん、それ本当？」

「ええ、本当ですよ、ミクさん」

ショートカットのシルエットが答えた後、他のシルエットより、スカートの裾が広がっている女性が補足を入れる。

その確認をする為に、ツインテールが聞いて、先程のシルエットが本当だと伝える。

「今回はどのくらいの世界の人たちが来るんだろうね？お姉ちゃん」

「そうね。5、6世界ほどじゃないかしらね。グミはどう思う？」

「私ですか？、私は、8世界ぐらいですかね。リツちゃんやルコちゃんはどう思う？」

ショートな髪が外側に跳ねているシルエットが小さな帽子のシルエットの持ち主と身長の高いショートツインテールに聞く。

「私は、火焰がいればいいよ」

「俺は、ハクさんと同じぐらいだと思う」

「私は、もうちょっと増えるんじゃないかと思うわ」

「私もですね」

「どれだけ増やす気なのかしらね、彼は」

二人が答えた後に、マフラーの様なシルエットの持ち主と他の女性のスカートと比べて、膝下より長めのスカートを穿いているシルエット、どのシルエット

よりショートカットのシルエットが
ため息を吐く動作をして愚痴る。
それに、新たな影が八つ増えて、答える。

「それは、我らが主だからとしか言いようが無いの」

「……ムリ」

「ですね」

「その事については、碎羽ちゃんは諦めてるよ」

「けっ、何処に行っても必ず引っ掛けてくるからな」

「そうふて腐れるな、刹那」

「そうやで、あれはもう呪いの域や」

「体質の事もありますしね」

そんなやり取りを見ていた大きなリボンのついたシルエットと同じ
大きさのシルエットが、

「お話はお終い！それじゃ、火焰さんが寝ている間に作るよ！」

その後を引き継ぐように、サイドポニーテールのシルエットが、

「ええ、全ては明日という日のために！！」

「おおー！！！」

東方の世界

此処は、多くの緑で囲まれている世界だ。
文明も明治時代くらいといった古さだ。

しかし、湖がある場所には洋館が見えたり、山の方では黒い翼を生やした人に、白い耳が生えている人が空を飛びまわっている。他の場所も、黄色い絨毯が見える場所、山の上にポツンと立っている神社の鳥居らしきものが見える。

そうここは幻想郷、忘れ去られたものたちが住まう楽園といわれる場所だ。

ここでは様々な異変が起こり、代々博麗の巫女が解決している。最近あった異変は、大きな宝船が幻想郷の空に現れた事件があったが、博麗の巫女に黒白の魔女、蛇と蛙の神を奉る現人神の巫女が解決した。

それから、かなりの時が過ぎた此处でも、幻想郷中に異変と言ってもおかしくない、異様な空気が流れ始めた。

それは今までの異変とは一線を画すと言っても過言ではない。

何故その様な事になったのか、それは数日前、妖怪の賢者にそれぞれの勢力の代表が博麗神社に集められた。

全員が揃ったのを見て、紅白の脇が出ている巫女服を着た少女、博麗 霊夢が代表して訊ねた。

「それで、何で集められたの紫？」

それを聞いて、妖怪の賢者たる八雲紫はこう言った。

「彼の居る世界では、バレンタインという意中の男性に思いとチョコを送る日があるのよ」

それを聞いた瞬間、周りはざわめきだした。

「落ち着きなさい。それで、どうやって届けるの？」

ざわめいていた周りを一言で黙らせると、どのようにして届けるのかを聞く。

「私の能力で届けにいくわ。もちろん、皆で彼のいる世界に行ってもいいわ」

「皆もそれでいい？」

「私はそれでいいぜ」

霊夢の確認に、白黒の魔法使い霧雨 魔理沙が周りを見回した後に代表して答える。
回りの代表達も頷いている。
それを見た紫は、

「それじゃ、各勢力で一つずつとしましょう」

「あら、どしてかしら？」

水色の着物のような服を着て、頭には@のついたZUN帽をかぶった女性、西行寺 幽々子が質問してきた。

「いい質問ね、幽々子。それはね、彼だからよ」

「そういうこと」

紫のその一言で納得した幽々子。

「どういふことなのですか、幽々子様？」

だが、それが分からないのか、彼女の庭師兼従者である魂魄 妖夢が尋ねる。

その彼女に、紫が答えた。

「彼が、神の一柱だという事は知ってるわよね？」

「はい、彼の仕事の事も」

紫の間に妖夢は頷き、その仕事のことにも答えた。

「つまりそういう事よ」

「??.」

紫の返答に、いまいち理解できなかったのか首を傾げる妖夢。
それを見て苦笑した幽々子が答えを言う。

「妖夢、こういう事よ。彼は多くの世界を回っているのだから当然、
彼に好意を寄せる女性が多いのよ。そうすると必然的に」

「彼を慕う様々な世界の女性達からチョコを貰う、という事なん
です」

「ええ」

ようやく理解したのか、納得した妖夢。
周りにも解らなかった何人かの人達も今ので納得した。

「それで、足りないものがあつたら彼女達に言ってちょうだい」

そう言つて、銀色のショートにした眼鏡の少女、森近 霖と数箇所
に蒼のメッシュに朱が入った羽を持った少女、朱鷺子を見る。

「最大限の協力をする」

「任せてちょうだいね」

それを聞き、

「それじゃ、他の世界の人達に負けないように頑張りましょう!!」

「お———!!」

紫の締めの一言で、周りも声を上げた後、それぞれのグループに分かれて去っていった。

それぞれチヨコを作るために。

サモンナイトの世界

異世界リンバウムの大陸に存在する三大国の一つ、『帝国』の北側に聳え立つ山岳地帯にある

小さな町『トレイユ』にある、宿屋兼食堂である『忘れじの面影亭』の扉には『本日は貸切』といった札が掛かっていた。
中には、様々な女性が集まっていた。

「それで、メイメイ。今回はどうして貸切にしてって言ったの？ 私達の知らない女性もいるし」

「そうですね、どうしてですか？」

此処の宿屋の店長代理でもある双子の姉妹の片割れである、フェアが尋ねた。

それに続くように、別の双子で長い赤髪の女性、アティも尋ねる。

「にやはははは、それは」

「それは？」

赤いベレット帽を被った金色の髪をした少女と大人の中間にいる女性、

マルティーニ家四姉妹の長女、ベルフラウが聞く。

「彼の世界で、バレンタインというイベントがあるのよ」

にやは、にやはははは。と笑うメイメイ。

「バレンタイン？」

肩に掛かる程度の長さをしたベルフラウとは違った金髪にカウボーイハットを被った女性、ソノラが疑問の声を発した。

「そつ、バレンタインよ？」

「それは、どういった物なんだ？」

メイトルパ出身のセルフアン族の民族衣装を纏い、背中に鳥のような羽を持つ女性、アロエリがメイメイに訊く。

周りの女性達もどういったものか解らない為に、同意するように頷く。

それを見たメイメイは、

「ありやりや、ここの世界ではなかったわね。ごめんなさいね。それじゃ説明するわ」

この世界にはなかった習慣だったことを思い出し、彼女達に説明する。

今はいない彼の世界では、思い人の男性に気持ちと一緒にチョコを送る日があると。

それを聞いた集まった女性達に戦慄が走る。

しかし、その中でも冷静な女性、孤島の護人の一人、機界集落『ラトリクス』を纏める女性、アルディラが疑問を口にした。

「作るのは良いとして、どうやって届けるの？」

その一言を聞いて、あっと言う声を周りは上げる。
その言葉にメイメイは、

「にやははは、それは大丈夫よ」

「というと？」

「エルゴの王の力を使って行くのよ」

「えっ！？」

「すごいのっ」

メイメイの返答に、長い明るい紫色の髪に赤い眼をしたメイド、ポムニットは驚き、
艶のある黒髪に、額に二本の角を生やした女性、ミスミが感嘆の声を上げた。

「つまり、皆で彼のところに行きましょう、と言う事よ」

メイメイが結論を言う。

「だから、この宿屋に集めたのね」

「そういうこと」

その一言に、もう一人の宿屋の店長代理である、髪がピンピンと跳ねている男勝りな少女、
ライが言った言葉に正解と言うようにメイメイは言う。

「それで、チョコレートはどの程度作るのか？」

「別々に作ってもいいの？」

軍服を纏った女性、アズリアが尋ね、それに続くように、妹のイスラムも尋ねてくる。

「いいえ、それぞれの組に分かれて一つずつね」

メイメイがそう言うと、彼女達は不満そうな顔をする。

「どうして駄目なんだよ」

茶色のショートカットをした男勝りな女性、マルチーニ家の次女、ナナが不満を發した。

「それは彼にチョコを上げる女性が多いからよ」

その事にメイメイは、簡潔に答えた。

「確かに。彼が好きな女性は多いいでしょうね」

赤髪をウルフカットにした双子の片割れである女性、レティスが納得の声を上げる。

それを聞いた周りの女性陣も納得する。

周りを見て、もう質問などが無いかを確認したメイメイは、

「それじゃ、チヨコ作りを始めましょう」

「おーーーーー!!」

宿屋組みと孤島組みに分かれて、チヨコ作りが始まった。

とあるの世界

ここは学園都市といわれる、230万人の人たちが住む巨大都市である。

そののとある一室に、様々な女性達は集まっていた。

そのメンバーは、本来の物語なら会わなかったりするのだが、この世界では一人の男性により、繋がっている。

メンバー達は、巨大モニターの前に集っている。

巨大モニターには、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも凶人にも見える人物、アレイスターⅡクロウリーが映っていた。

「やあ、揃ったようだね」

「それで。何のようなんだ、アレイスター」

その言葉に、彼女達を代表して、幻想殺しという力を右手に宿した少女、上条灯花が聞いてきた。

「ふむ、私の息子でもある火焰にチョコを思ってたね」

その一言を聞いた瞬間、周りが静かになる。

「でも私達、火焰さんのいる世界には行けないんですよ？」

「涙子さんの言うとおりです。そこはどうするんですか？」

「もちろん、考えてねえなんてこたあねえよなあ？」

至極もつともな疑問を、柵川中学コンビに一方通行が聞いてくる。
ちなみに、この世界の一方通行は女性です。
その疑問に、アレイスターは、

「そこは大丈夫だ。そもそも無理だったら、こんな事は言わないよ」

「それもそうですね」

「理事長は出来ない事は言わないじゃん」

学園教師組みが納得する。

「でも我々、天草式十字凄教の魔術でも世界間を移動する事なんて無理ですが・・・」

「もちろん必要悪の教会でもその様な事は聞いたことはありません」

ネセサリウス

「わたしの持つ知識、10万3000冊の中にもそんな魔術は無いよ」

「私達のネットワークをしてもその様なものは無いと、ミサカはミサカは言ってみる」

「ミサカワースト番外個体にも聞きましたがその様なものは存在しない、とミサカは疑心に思いながら言います」

上から、五和、神裂、インデックス、打ち止め（ラストオーダー）、御坂妹が言ってくる。

それを聞いて、御坂 美琴は、

「で、一体どんな方法なのよっ、いい加減教えなさい！」

「落ち着いてくださいまし、お姉さま」

「黒子、分かったわよ」

美琴と同じ学校、常盤台中学生であり、ジャッジメント風紀委員である白井 黒子が落ち着く様に話し掛け、美琴は落ち着く。

「落ち着いたようだね。それで方法なのだが、こちらの時間でいうところの、14日の朝6:00に私の部屋にゲートが開くと連絡が来てね」

「怪しいですね。誰からなんですか？」

誰がしてくれるのか解らない為、涙子はアレイスターに聞く。
その事について彼は、

「彼の上司ともいえる人達からだよ」

「ナイアさんとクロノスさんですか！？」

彼の答えを聞いて、初春は驚く。

「ああ、だから息子に好意を抱いている人物を集めたんだよ」

「そういう事だったのですか、とミサカは納得して頷きます」

「それに、私も久々に会いたいのですね」

「勝手に抜け出して大丈夫ですか？」

「何、大丈夫だ。問題ない」

「あんたも大分、俗世に毒されてるわね」

「ふふ、そうかい？」

「はい、いい事だと思いますよ」

「昔のあなたを知っている最大主教は、驚いていましたからね」
アークヒシヨッフ

「そうか。まあそんな事はいいとしてだ。頑張ってチョコを作ってくれたまえ。」

「ちなみに個数はチョコケーキなら二個までなので気を付けてくれ」

「どうしてなんですか？」

「私の息子は、他の世界にも当然行っている訳だ。必然的に」

「他の女性達が居るという事じゃん」

「そういうことだ。だから他世界の人達に負けないよう頑張ってくれ」

「当たり前でしょ！皆、頑張るわよ！！」

「おおーーーー！！」

灯花の音頭で、皆は拳を突き出した後、チョコケーキの作成に取り掛かった。

真・恋姫の世界

古代中国である。

漢王朝が滅び、群雄割拠の時代も終わり、平和な時が流れている四国が纏めている世界。

今日は、四国間の緊急集会ということで、残りの三国である、魏、蜀、呉の人物達が彼が治めている城の王の間に集っていた。

「それで、今回はどうして集められたのかしら？」

「雪蓮さんは、分かりますか？」

「私も分からないわ？」

その人物達は三国の王である、魏の王 曹操こと華琳、蜀の王 劉備こと桃香、呉の王 孫策こと雪蓮が集まっていた。少しの間、話していると、緑の髪を二つに分けて三つ編みにした小柄な少女、賈馭こと詠が姿を現した。

「集まっているみたいね」

「それで、どういった用件なの、詠？」

詠が集まっている事を確認し、今回の用件がなんなのかを雪蓮が聞いてくる。

「私達の主である火焰のことよ」

「えっ、どういう事ですか!？」

「ちょっと落ち着きなさい、桃香」

「あっ、すみません」

詠の知らせに興味した桃香は、窘めた華琳に謝罪した。落ち着きを取り戻したのを感じた詠は、続きを話す。

「落ち着いたみたいね。それで、要件の続きなんだけど・・・、彼の世界でバレンタインというものがあるらしいのよ」

「バレンタイン・・・ですか？」

「それはなんなのかしら？」

聞いた事も無い言葉に、桃香はハテナを飛ばし、雪蓮も気になって聞いてくる。

「何でも、意中の相手に気持ちと一緒にチョコレートを渡すらしいわよ」

「「「!?!?!」」」

詠の答えに、三国の王達の間には戦慄が走る。

これはかつての群雄割拠の時とは比較にならないほどの事態だと感じている。

しかし、いち早く冷静に戻った華琳が疑問を口にする。

「でも、彼はこの世界に居ないのにどうやって渡すというの？」

「そういえばそうね」

「どうやって渡すの詠ちゃん？」

華琳のもつともな疑問を聞き、雪蓮、桃香と続いて聞いてくる。
それについて詠は、

「それなら大丈夫よ。彼らが連れて行ってくれるわ」

「お久しぶりね」

「元気だったか？」

「久しいの」

詠の紹介で現れたのは、貂蟬、華佗、卑弥呼だった。
それを見て華琳は少し顔色が悪くなったが、何とか悟られないよう
元の表情を保つ。

「それで、こいつらがどうやって連れて行ってくれるっていうの？」

「体調が悪いみたいだが大丈夫か？」

「ええ、大丈夫よ。それより」

「ああ、卑弥呼」

「任せてダーリン。それで方法なんじゃが、我らの漢女力を使って、
あちらと此方を鏡で繋げて行き来しようと思う」

「もちろん、もう一人の御使いでもあった、本郷ちゃんも連れて行くわ」

「わゝ、久々に全員が揃う事になるんですね」

群雄割拠の時代が終わり、数年後に元の世界に戻る事になった本郷沙耶の事である。

彼女は現在、元の世界で勉強をして、大学卒業後にこちらに戻ってくる予定である。

彼女には、貂蟬が先にバレンタインの事を話している。

全員揃う事に、とても嬉しそうな桃香を見て、他のメンバーも顔を綻ばせる。

「それで、準備とかはどうするの？」

「それについては大丈夫だ」

「というと？」

「こちらで必要な物はもう揃えている」

「用意周到ね」

「で、期間は？」

「一カ月後だ」

「えらい急ね」

それぞれの国に帰って、準備して戻ってくるとしても、ギリギリである。

それについては、3人ともすまなさそうな顔をする。

「すまんの、我々の力でもこれくらいの準備期間と時期が丁度良いのじゃ」

「その日が、彼の世界とはとても近づく時でもあるのよ」

「そういうこと。連れて行ける人数は？」

「何人でも大丈夫よん」

「全員連れて行きたいけど。でも、そうするとお城の守りとかが」

貂蟬の言葉に嬉しそうな顔をするが、お留守番で残さないといけな
い人が出るかと思うと悲しそうな顔をする桃香。

「その事は気にしなくても大丈夫だ」

「ダーリンの言う通りじゃ」

「どづいつとっ。」

だが、その事について何も問題が無いと言う華佗に雪蓮が聞く。

「この世界の成り立ちは知っておるじゃろ？」

「ええ、もちろんよ」

「普通なら崩壊するのだが、ことさら特殊なこの外史は、主要人物が居なくなると時が停止するようになっておる」

「つまり、一切問題が無いということだ」

華佗の締め括りを聞いて、桃香達は皆を連れて行けることに嬉しそうな顔をしている。

「おほん。それじゃ、こちらで荷馬車と護衛を就けるから」

「あら、ありがとう。でも大丈夫よ。こちらも兵を連れてきているから」

「はい、私のところも連れてきてます」

「私もよ」

護衛を就けるといった詠に、華琳、桃香、雪蓮の順に答えていく。

「あつ、そうそう」

伝え忘れた事があるのか、詠は声を出してこちらに再び注目してもらうよう呼びかける。

「他に何かあるの？」

「作る個数なんだけどね」

「一人一個じゃ駄目なんですか？」

「ええ。各国一つでお願いするわ」

「どういつ事？」

作る個数を制限する事に疑問を持つ三人、それについて華佗が答える。

「火焰が回った世界の人達も来るらしい」

「と言うことは」

「女の人達がたくさんという事なんですね」

「これは負けられないわね」

「そういふことよ」

詠が同意を示す。

「これは力を入れてやるしかないわね」

「そうね」

「他の世界に負けないように頑張りましょう!」

「それじゃ、今度こそ行くわね」

「ええ、気をつけてね」

「気遣いありがとう」

「じゃあね、詠ちゃん」

それぞれが他の世界の人達に負けないよう意気込んで帰っていった。

リリカルの世界

第97管理外世界『地球』日本・某県海鳴市にある喫茶店『翠屋』入り口のドアには「本日貸切」のプレートが掛けられている。建物の中には、大勢の女性が集まっている。

「桃子さん。今日は貸し切って貰ってありがとうございます」

綺麗な金色をした髪的女性フェイト・テストロッサが、栗色をした髪的女性、高町桃子にお礼を言う。

「いえいえ、気にしないでいいのよ。なのはと姉さんに頼まれちゃったし」

「にやはは。明日は大事な日だからね」

「そうね。あの人に渡すんだもの」

猫のような笑い方をしたサイドポニーの女性、高町なのはと高町桃子にそっくりな女性、高町優子が笑顔で言う。

「そやね。明日はなんといつても一大イベントやからな」

ショートカットに、関西弁を使う女性、八神はやてが同意の声を上げる。

「それで、チョコを作るのは解かるけど、あいついないじゃない」

「うん、どうやって渡すの？」

勝気な雰囲気を持つお嬢様然とした女性に、その事に同意する紫色の髪をした深層の令嬢の様な女性が疑問を口にする。

「ふふん。それについてはこの私、アリシア・テストロッサと」

「私に任せてもらっていいわ」

「プレシアさんに？」

「ええ、協力者としてリンディ・ハラオウンにジェイル・スカリエッティがいるわ」

「よろしくね皆さん」

「ふふっ、よろしく」

プレシアの紹介で、翡翠の髪をポニーテールにした女性と、腰まで届く紫色のウェーブの髪を首の辺りで結んだ白衣を着た女性が前に進み出た。

「そして、船を出す事になった私の娘、クラリスとエイミィよ」

「任してくれ」

「はいはい、お姉さんに任せてね」

リンディの紹介で、黒髪を肩に掛かるくらいの長さの女性に、栗色のショートの女性がリンディの隣に並ぶ。

「運航の補助にグラム提督の使い魔とテストロッサ家の使い魔たちに月村家のメイドさんたちです」

「よろしくお願いします」

「よろしくね」

「任しとくれよ」

「道中の間はお任せください」

「微力ながらお手伝いさせていただきます」

「よろしくお願いしますっ」

上から、猫を素体としたリーゼアリア、リーゼロッテ、狼を素体にしたアルフ、山猫を素体としたリニス、
月村家のメイドであるノエル、ファリンの順に挨拶をしていく。

「そして、今回の異次元移動を可能とするロストロギアを発掘した人物」

「ユーノ・スクライアです」

金髪を持つ女性達より少し薄い感じの色をした腰より少し長い髪を首元でゴムで結んだ女性が微笑みながら前に出た。

「それで、今回のロストロギアの事なんだけど、名称はクリスタルゲートって言うんだ」

「危険度の事なんだが」

「何と！、C程度なんだよ！！」

「まあ、私達で改竄した結果なんだけどね」

「ちょっ、なんちゅう事を暴露しとるんや、プレシアさん!-!」

プレシアの思わない暴露にあたふたするはやてに、

「はやてちゃん、気にしない気にしない」

「ちょっ、なのはちゃん!-?」

「そんな今更だよ、はやて」

「フェイトちゃんまで」

親友の二人にまで言われて、ガツクリと肩を落とすはやて。

「そうそう、今までどれだけの事をしてきたと思ってんの?」

「これだけの面子が揃ってるんだよ。火焰くんに係わって生きてきた人達にとっては、これが当たり前のようなものだったじゃない」

「はあ、頭が痛いことに事実だから性質が悪い」

「そんな事言つてクラリスちゃんも十分影響されてるじゃない」

「そうね。昔はあんなに生真面目な人間だったのに。今じゃ、彼に

骨抜きにされちゃって」

「そ、そんな事はないわよ、母さん！！」

「ほらほら、落ち着きなってクラリン」

「ロツテもその名で呼ぶな！！」

クラリスも、エイミィに実の母親であるリンディ、ロツテと弄られて、大きな声を出したせいか肩で息をしている。

「それで、私達も行って大丈夫なの、エイミィ？」

「うん、大丈夫だよ。美由希」

「やったね、京ちゃん」

「ええ、久々に会えるわね」

「もうちょっと嬉しそうにしないよ。京子」

「十分してるわよ、忍」

眼鏡を掛けた、なのはの従姉妹に当たる御神美由希に膝に届くほどに伸ばした黒髪の女性、不破京子、月村家現党首である月村忍の三人が少し離れた位置で話している。そこから少し離れた位置では、

「久々にお兄様に会えるね、ヴィヴィオ」

「アインハルトちゃん、うん。どこまで強くなったか見てもらいたいからね」

「それについては、ボクも久々で楽しみですよ」

「イクスも？」

「ええ、今までの歴史上、他の追随を許さない最強の王だったのですからね」

「そんなに凄いの？、ヴィヴィオ」

「そうなの、ヴィヴィオちゃん」

イクスの言葉が信じられないと、ヴィヴィオに確認するために聞いてくる。

「ああ、リオとコロナはお兄ちゃんの本気を知らないからね」

「私の記憶にも残っていますが凄まじいものがあります」

「何てったって、ベルカ戦争を終結させた人物ですからね」

「他の王達なんて、お兄ちゃんの攻撃で地面にめり込んだりしてた

もんね」

「ええ、敵には容赦の無い方でした」

「ボクもあの時ほど敵に回さなくて良かったと感じましたよ」

「だって、イクス配下の人が暴走して、マリアーヂュをけし掛けたけど、自爆する前に跡形もなく壊されてたもん」

「ボクもアレには驚きました。どんな武器を使っても、当たる前に消し去ってたりしてましたから」

「私も未だに、どのように攻撃したか解かりません」

「とにかくお兄ちゃんは強かった。それだけだね」

遠い昔にあったベルカ戦争の記憶を持つ三人は遠い目つきをして、そんな事もあったな、と昔を懐かしんでいた。

「へー、あの人がね。何度もあった事があるけど、いつも眠そうにしてた人がね」

「そうだね、私達が知っているのは優しい姿しか見た事ないもん。とてもじゃないけど、そんな風には見えないよ」

だよねー、と少女組みは盛り上がっている。

そんな少女達の話が聞こえている、元フォワード組みとナンバーズ達と六課の大人組みは、

「どんな感じだったんだろうね、ティア」

「想像つかないわよ、あの人が切れてる姿なんて」

「私ですね」

「エリイちゃんも？」

「わたしも想像がつかないわね」

「ルーテシアちゃんも？、私もお父さんの頼みで六課にいた時に会ったけど、そんな風には見えなかったわね」

「あらあら、あの人はとても強いわよ」

「そうッス、メガーヌさんの言うとおりッス」

「うん、私が遠くから狙ってもいつも気付かれるからね」

「わたしのIS、ディープダイバーで潜っていても位置特定されるし、理不尽だ」

「私の速さにも普通に対応するぞ、強化なしで」

「肉体が普通じゃないよ。ボクとディード、セツテの攻撃でも平然と素手で受け止めるんだよ」

「それ本当なの、デイド」

あの彼がそんな事をしたとは信じられないティアナは、デイドに本当かどうか尋ねる。

「ティアナさん。ええ、本当です」

「わたしも、初めて見た時は硬直してしまいました」

「それに俺の師匠でもあるからな。射撃に関しても文句なしだな」

「処理能力に関しても、私より速いですし」

「変装が得意のあたしでも、あそこまで出来ないわよ」

「姉も、彼のようなナイフ捌きは無理だ」

「私の作戦も見破られちゃったし」

それに続いて、デイドとセツテの証言、他の能力もティアナの姉であるティリスに
ナンバーズのウーノ、ドウエ、チンク、クアットロ、と次々と言
ってくる。

それを聞いた元六課のメンバー達は、驚きに満ちていた。
あの温厚な人が、そんなにすごい人物だったのかと。

彼女達と、さらに離れた位置では、ヴォルケンリッター達が話して

いた。

「んで、私達のチョコだけど何にする？」

赤い髪を二つの三つ編みにした少女、鉄鎚の騎士ヴィータが隣に居る桃色の髪の女性、烈火の将シグナムに聞く。

「そこは、主はやてに聞くしかあるまい」

「そうね。はやてちゃんに聞かないと何個作って良いのか分からないものね」

「ふむ。だが希望を言うのは構わないんじゃないのか？、なあ、リインフォース」

「ああ、そうだな。ザフィーラ」

金色をした髪をショートにした女性、湖の騎士シャルマルに続くように、ウルフカットの烈火の将より背の高い女性、守護獣ザフィーラの提案に、夜天の書の管制人格であるリインフォースが頷く。

「リインは、生チョコがいいですう」

それに、水色の髪をした小さな妖精のような姿をした少女、リインフォース？が言う。

「何言ってるんだ、バツテンチビっ！、オペラに決まってるだろ！！」

それに対抗するよう、リインフォース？と同じ大きさの赤い髪を逆立たせた少女、アギトが言う。

「なにお、生チヨコの良さが解からないなんて。アギトちゃんはアホですっ！！！」

「言っ たなー！」

「だからどうしたんですかっ！」

「ムー……！」

言葉の言いあいのおと睨み合う、二体の融合機。
それを見て、

「落ち着け、二人とも」

瞳の色が蒼という以外リインフォースにそっくりな女性、深淵の書の管制人格であるperlセフィスが仲介に入る。

「だって、アギトちゃんが」

「このバッテンチビが」

「はいはい、落ち着いてくださいお二人とも」

「シュテルちゃん」

ショートカットにされた髪型以外は、なのはそっくりな女性にリインフォース？は飛んでいく。

彼女は、深淵の書の守護騎士の一人、星光の殲滅者であるシュテルだ。

「アギトも悪いぞ」

「そつだぞ、アギト」

アギトにも注意をする者がいる。

青い髪をしたフェイトそっくりな女性、守護騎士の一人、雷刃の襲撃者ことレヴィだ。

それに同意するように言った銀に近い髪に翡翠を薄くした瞳の女性、守護騎士の一人である、闇統べる王ことロティスである。

二人に言われ、さすがのアギトも

「分かったよ、あたしも悪かったよ」

と頭を掻きながら、バツの悪そうな顔をする。

そう言った後、ツヴァイの方に飛んで行き、仲直りをしていた。

と、それぞれ思い思いに話していたが、桃子が手を鳴らして注目させる。

「それじゃ、早速チヨコ作りを始めましょう」

「それで、作る個数なんやけど」

「四つにしようと思います」

桃子に続くように、はやて、なのはと言っていく。

「なのはさん、何で四つなんですか？」

個数制限の事に、スバルが質問をする。

「それはね、火焰くんが他の世界の女性からも貰うからだよ」

その質問にフェイトが答える。

その答えに、分かりました！。という返事が返る。
それを見てなのはが、

「それじゃ、他の世界の人達に負けないように頑張ろう!!」

「おおー!!」

その声に、皆が声を合わせて言うと、それぞれのグループに分かれて作業を開始した。

番外編 バレンタイン 前編（後書き）

いかがでしたでしょうか。

久々でしたので、文章が変になっているかもしれません。
後編なのですが、今日中には無理みたいです。

欲張った結果がこれです。

後編まで書き終わったら、加筆修正を入れる予定です。

それはさて置き。

誤字脱字などが御座いましたら、感想の方でご連絡ください。

番外編 バレンタイン 後編（前書き）

大変遅くなりました。
バレンタインの後編です。
それではどうぞ。

番外編 バレンタイン 後編

型月世界

冬木市から電車で十数分乗った場所にあるホテルに、女性達が集まっていた。

「なあ、バゼット」

青い髪を、ネギま！？に出てくる長瀬楓のより後ろ髪が少し長い髪型をした女性が男装の麗人ともいえる女性に尋ねる。

「どうしました？ランサー」

「どうして、こんな所に集められたんだろうな」

ランサーがばやく理由は、かなり広い調理室に集められているからだ。

秋葉いわく、今日のためだけに拡大工事をしたらしい。

どんだけ金持ちなんだ、とため息が出てしまう。

だがバゼットは、ランサーのそんな姿をみても気にせず、

「さあ、分かりません。しかし、ここは遠野グループ系列のホテルの一つだという事は調べています」

「へえ、あの有名なね。やっぱあいつが係わってんのかね」

「ええ、おそらくそうでしょう。そうでないと、魔法使いであるミス・ブルーに伽藍の堂の主で人形師でもある彼女がいませんからね」

そう言ったバゼットは、視線を此方よりは慣れた位置にいる並んで立っている二人に向ける。

右側にいる女性は、赤い髪を膝より少し長い程度まで伸ばして、蒼のジーパンに黒のYシャツを着ている。

左にいる女性は、橙に近いくすんだ赤毛をショートボニーにしており、服装は、黒のパンツタイプのスラックスに白のYシャツ装飾品は両耳のピアスと小さなペンダントを身に着けている。

「ああ、確か、姉妹仲が最悪なんだったっけ？」

「ええ、でもそれは昔の話です。今は一人の男のおかげで、仲は以前より良好と聞きました」

「それって」

「ええ、十中八九彼です」

「あいつもやるね」

ひゅー、と口笛を吹き、今はいない彼に感心するランサー。

「他にも、アトラス院にいた、シオン・エルトナム・アトラシア。その母であり、

死徒二十七祖・十三位であるズエピア・エルトナム・オベローン。シオンの友であり、聖堂教会が擁する異端審問騎士団の一つ「ヴェステル弦楯騎士団」の元団長、リーズバイフェ・ストリンドヴァリに弓塚さつき、埋葬機関の第七位である『弓』のシエルこと、エレイシアに彼女が所有している概念武装『第七聖典』に宿っている精霊、セブン。

また、死徒二十七祖・第一位プライミッツ・マードー、第三位アルクエイド・ブリュンスタッド、第五位オルト、第六位リイゾ・バール・シュトラウト、第七位腑海林アインナツシュ、第八位フィナ・ヴラド・スヴェルテン、第九位アルトルージュ・ブリュンスタッド、第十五位リタ・ロズイーアン、第二十一位スミレ、最後に第零位朱い月のブリュンスタッドこと、アルティミア・ブリュンスタッドがいます」

「あとは、第四次と第五次に電腦空間の聖杯戦争に参加した、ディルムッド・オディナ、ランスロット、

ギルガメッシュ、アルトリア、オルタ、リリイ、メディア、メドゥーサ、ステンノ、エウリュアレ、

エミヤ、佐々木燕、アンリマユ、ネロ・クラウディウス、玉藻の前、

アリス、フランシス・ドレイク、
ガウエインの英霊組み」

「マスター側は、デイルムツドのマスターである、ソラウ・ヌアザ
レ・ソフィアリ、

アルトリアのマスターである衛宮 詩織、メドゥーサのマスター遠
坂 桜、エミヤのマスター遠坂 凜、

ヘラクレスのマスターイリヤスフィール・フォン・アインツベルン、
その御付のセラとリーゼリット、

ギルガメッシュのマスター、カレン・オルテンシア。

火焰を喚んだ如月 優、ガウエインのマスターレオナルド・ビスタ
リオ・ハーウェイ、

アリスのマスターありす、バーサーカーのマスターだったラニィ？
だな」

「それと、大聖杯であるユスティーツア・リズライヒ・フォン・ア
インツベルンに、

遠坂家と同じ魔術の家系であるルヴィアゼリッタ・エーデルフェル
ト、衛宮切嗣の片腕たる久宇 舞弥がいます」

「あと、あいつの使い魔の夢魔つつたか？、のレンと白レン、遠野
家の末娘、遠野 秋葉、

退魔一族の一つ七夜家の次期頭首、七夜 詩姫、巫浄家の双子姉妹
の巫浄 琥珀、翡翠に

同じ家系の巫条 霧絵。両儀家の両儀 式に、伽藍の堂の職員であ
る黒桐 要、妹の鮮花に

友人の浅上 藤乃、とそうそうたるメンバーですね」

相当な人数の女性を落としてきたようだが、余りにも多い。

この世界が何番目か知らないが、他にも多くの女性がいるとなるといったい何人の女性がいるのか考えたくない。

だが、それでも彼を慕う女性は後を絶たないのだろうし、自身を含めたこの世界での彼が好きな女性達の間には、争いは起こっていない。

クー・フリーンがそんな事をバゼットの隣で考えていると、一番前にある壇上に、精悍な顔つきに体格をした老人が立った。

彼の名は、キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。

魔法使いの一人であり、宝石の翁といった異名を持つ人物である。

彼が壇上に上がる姿を見た瞬間、今まで騒がしかった空間が一瞬にして静かになった。

老人はそれを見て、二回ほど頷くと、しゃべりだした。

「今日は忙しい中、皆に集ってもらって大変嬉しく思う。今回なぜ集まってもらったかという説明を今からするので質問は後にしてくれ。さて、明日に迫った女性達にとって大切な、一大イベントのためだ」

その言葉を聞いて、全員が明日が何の日か解かっているのか納得の表情をしている。

「うむ。既に知っての通り、バレンタインじゃ。だが、せっかくの大切な日なのにあやつが居らん！」

それを聞いて、そうだそうだ！という者や、頷く者もいる。

その声を十分に聞いて、

「うむうむ。なので、ワシの力を使ってあやつのいる世界に？げようと考えておる。だから、君達には彼に渡すチヨコを作ってもらうのだが、個数を制限しようと思う。理由は、多すぎると印象に残らんからじゃ。また、あやつの上司たる女神たちからもなるべく少なくしてくれとの話もきた。なんでも他の世界の女性達も送るらしいので、チヨコの個数を制限したのだ。ちなみに作る数は、既に別れて貰っているグループで作ってもらう。人数が多いので個数は八つじゃ。材料の方は、遠野家、エーデルフェルト家、ワシの方から最高級の物を用意させてもらった。足りなかったり、欲しい物が有ったら遠慮なく言ってくれ。以上で説明を終わる。何か質問は？」

それを聞いて、黒のロングスカートを穿き、赤い服を着た女性が拳手する。

それを見たゼルレッチは、

「遠坂 凜」

「はい、師父。あいつの居場所は分かっているのですか？」

彼女のもっともな質問に、頷く人がちらほらと見える。

「確かに。その疑問はもっともじゃな。あやつの魔力パターンは解かっておる。それを辿ればすぐに着く。幸いにも魔力、存在感と共

に桁違いじゃからの」

その言葉を聞いて、凜は納得して下がる。

他の人物たちも見ろが質問は無いみたいだ。

それを見て、

「ふむ、ないようじゃな。それじゃ、始めい!!」

解散の合図と共に、月姫＋死徒組みが三個、F a t e組みが四個、空の境界組みが一個とそれぞれのグループがチョコ作成に入っていた。

シャッフル世界

ここは、12年前に『開門』と呼ばれる事となるある古い遺跡に在った2つの扉が開放され、

神族が住まう『神界』と魔族が住まう『魔界』の2つの世界が、現代の『人間界』と繋がった。

そこは人間界にとつて空想上の存在だったはずの『魔法』によつて支配された世界であり、

その事実は物理法則で支配された人間界に住まう人々を驚愕させるには十分だった。

その後は三世界との交流を経て最終的に”三種族共存”の道を歩むことになり、

やがて『神界』と『魔界』の住人たちが人間界へと移り住むようになった。

そんな世界で、日本にある三種族が共に通う国立バーベナ学園に通っていた人物達が、

休日を利用して進学した国立バーベナ大学の調理室に集まっていた。ちなみにこの大学、偏差値が結構高いのだが、彼女達の内、数名以外は優秀なため普通に合格して、

それぞれの学科に進んでいる。

それはさて置き、調理室に集まっているのは、15人の乙女達に神王に魔王だ。

乙女達の名前は、土見稟、芙蓉楓、八重桜、リシアンサス、キキヨ

ウ、ネリネ、リコリス、プリムラ、
時雨亜沙、時雨亜麻、麻弓「タイム、カレハ、ツボミ、紅薔薇撫子、
アイ、である。」

「それで、今日はどうしてここに集められたんですか？」

オレンジ色をしたショート髪に赤いリボンを結んでいる女性、芙蓉楓が代表して、魔王たちに聞いてくる。

「うん、いい質問だね。明日が何の日かは知っているよね？」

黒髪の温和な男性、魔王であるフォーベシイが聞いてくる。

「バレンタインですよね、お父様」

青の髪を太ももまで伸ばし、赤い色の瞳をした女性、ネリネが答えを言う。

「うん、正解だよネリネちゃん」

「それで、それがどうしたの？」

隣にいたネリネと同じくらい伸ばしている赤い髪の女性、リシアンサスが自分の父親に訊いてくる。

「おう。合同研究所でようやく火焰殿のいる世界に行ける装置が完成してな。それを使ってチョコを届け様っていう話よ」

大柄でガタイのいい男性、神王であるユーストマが質問に答える。装置が完成した事を聞いた女性陣は、驚きの表情を見せる。

「それは本当なの、父さん」

「おう。本当^{まじ}だぜ、キキヨウ」

釣り目な所以外はシアそつくりの女性、キキヨウの問いに、彼女の父親であるユーストマが自信を持って言う。

「やったっすね、キキヨウちゃん」

「ええ」

シアが嬉しさのせいか、キキヨウの手を握って飛び跳ねている。他の女性達も、それぞれ嬉しさを顔に表している。

「それで、その為の準備という事で今日集められたという事ですな」

茶色の髪を、腰辺りまで伸ばし首辺りで紐で纏めている中性的な女性、土見稟が結論を言う。

「うん。それで、チョコの数なんだけど、皆で大きいのを一つ作って、ビックリさせようじゃないか」

「それは面白そうね。頑張ろうね、お母さん」

「うん、ボクも頑張るよ、あーちゃん」

魔王の言葉に、翠の髪のショートに左側の髪をシックな黒のリボンで巻きつけて留めている女性、時雨亜沙が隣にいる自身より童顔で亜麻色の髪をショートにしピンクのリボンに白い猫耳に見えるような帽子を被った女性、時雨亜麻に声をかけると亜麻も笑顔で答える。それにしても、亜麻さんはどう見ても一児の母には見えない、良くて亜沙の妹、下手すると母親が逆転しそうだ。

まあ、そんな事を言っていると亜沙が切れそうだが・・・。

そんな二人の隣では、美しい金色をした姉妹が

「まままあ」

「きゃきゃきゃあ」

トリップなさっていた。

最初に言った女性は、カレハ。

神族の女性で、亜沙とは親友の間柄である。

長い髪の右側を1房だけ、長いシックな黒のリボンで巻きつけて留めている。

もう一人は、カレハの妹である、ツボミだ。

こちらは、姉とは違って肩に掛かるくらいの長さで、両サイドの髪をピンクのリボンを巻きつけて留めている。

「ちょっと、二人とも戻ってきなさい」

亜沙が呼びかけるが、二人は戻ってくる様子がない。

それを見て、はぁ、とため息をついて放置する事にしたみたいだ。

「それにしても、火焰くんがいる世界ってどんな所なんだろうね、リコちゃん」

外側にはねる黒の髪に、右が赤、左が青のオッドアイの女性、麻弓がネリネにそっくりな瞳が青色の女性リコリスに話をふる。

彼女は、高校の間は、胸がペタンコだったが大学に入ってBカップにも育ち、狂喜乱舞していた。

現在も成長中である。

話が逸れたが、話を振られたリコリスは、そうね〜と言って、

「きつと自然の多い場所だと思うわ。リムちゃんは？」

と、董色の髪を赤い髪留めでツインテールにしてる少女、プリムラに聞く。

「ん〜。私は、色んな動物がいて月が二つとかありそうな、幻想的な場所だと思う」

少し考えた後、そんな答えを返す。

それを聞いたリコリスは、それもいいわね〜、とプリムラの頭を撫でる。

プリムラは、猫のように目を細めて気持ちよさそうにしている。

そんな様子を少し離れた位置で他の女性陣たちよりも、大人な二人が全体を見て微笑んでいた。

「あの人に久々に会える。楽しみですわね」

ネリネたちより少し薄めの色をした髪に上品にあしらわれたフリルのドレスを着ている女性、アイがグレーのタートルネックに青いジーパンを穿いた黒髪の凛々しい女性、紅薔薇撫子に上品に微笑みながら言ってくる。

そしてこの二人、大人の色気に一、二位を争うほどのバストの持っている。

「そうだな。会えなくなってから何年経ったかな」

彼がみんなの前から居なくなっただけを思い出すように遠くを見る。その横顔を、アイは微笑を浮かべながら黙って見つめる。

「おっと、すまないな」

「いえいえ。そんな事ありませんわ」

意識が遠くに行っていた事を謝るが、気にしなくて良いと、彼女は言うてくる。

「そうか。でも本当に楽しみだな」

「ええ、本当に。チョコレート作りも頑張らないといけませんね」

「そうだな。あいつを驚かせたいからな」

「ふふ、そうですわね」

二人は微笑みながら、彼に会う事に思いを馳せていた。

「それじゃ、そろそろ良いかな？」

手をパンパンと二回鳴らし、フォーベシイがこちらに注目するように呼びかける。

それを聞いた女性達は、おしゃべりを止めてフォーベシイ達の方を向く。

「それでは、チョコ作りに入ろうかと思うけど良いかな？」

オッケー、いいよー、といった声が返ってくる。

「それで、作るのはいんだけど個数を制限しようと思うんだ」

「えっと、それはどうしてなんですか？」

背中まで伸ばしている黒髪を白いリボンで両側を結んでいる女性、八重桜が質問してくる。

その質問に、周りの女性達も疑問そうな顔をしている。

その表情を見てフォーベシイは、頷く。

「うん、もっともな質問だね。理由はね、人数が多いからさ」

「人数が多い、ですか？」

フォーベシイの答えに、カレハが首を傾げながらしゃべる。

「おう。さすがにこの人数のチョコを、火焰殿一人で食べるのは厳しい」

「それに彼は、色んな異世界を旅している」

「そうすると、必然的に火焰ちゃんに渡そうとする女性も多い」

「亜沙さんの言う通りだ。だから、個数を制限する。それに多分、他の世界の人達もそうしてくるだろうね」

フォーベシイが推測を口にする。
それを聞いた女性達は、

「よし、それじゃ。他の世界の人達に負けない物を作るッス」

「ええ、やるわよ」

「頑張らしましょう、皆さん」

「リムちゃん、一緒に頑張ろうね」

「うん、リコリスお姉ちゃん」

「私達も頑張りましょう。稟ちゃん、桜ちゃん、麻弓ちゃん」

「ああ、頑張ろう」

「うん、頑張ろうね」

「やりますか」

「おかあさん、カレハ、ツボミちゃん」

「あーちゃん、任せて」

「頑張りますわ」

「わたしも、全力でいきます」

「頑張りましょうね」

「そうだな、腕になるな」

それぞれ決意して、やる気を漲らせている。

「皆やる気は十分だね。個数は二個だよ」

「それじゃあ、始めいー!!」

フォーベシイとユーストマの開始の合図で、一斉に作り始めた。

こうして、計7世界の他の世界にいる女性達が火焰のために作った
チヨコを持って、彼のいる世界に転移してくる。

二月十四日 バレンタインデー当日

女神の二人に貰った星にある屋敷の一室、その中にある一室の中は、ダブルベットにパソコン、本棚、姿見が置かれている。

そう、ここは火焰のプライベート部屋である。

女性陣たちと寝る様の部屋は別にあるが、今回はこちらで寝たようだ。

この部屋のダブルベットに、当の本人である火焰が寝ている。

現在の時間は、午前7:30、ベットの上にある時計が示している。普段通りなら、そろそろ起きてもいい時間だ。

「うつゝん、んゝふあゝゝゝあつ」

布団の中で身じろぎをした後、手を伸ばして時間を確認すると、起きる時間なのか体を起こし、大きな伸びをして眠気を飛ばす。どうやら今日は男性体のようだ。

窓から入ってくる朝日に目を細めて、外を見る。

天気はとても良く、青空が広がり惑星が浮かんでいるのが見える。

それを見て笑顔を浮かべると、ベットから起き上がり普段着に着替える。

着替えて、おかしな所が無いか姿見で確認する。

「おしっ」

どうやら無かつたらしく、満足するとリビングに向かうためにドアを開けて廊下を歩く。

「あつ、そういえば今日は広間に来てくれと言っていたな」

昨夜、寝る前にハクが言ってきたことを思い出し、リビングから広間の方へと進行方向を変えて歩き出す。

ちなみに、この部屋は3階にあり、言われた広間は一階にある。他にも地下といった階もあるがその説明は、また今度にする。

目的の場所に着くと大きな扉があるので、取っ手を引っ張り中に入る。

すると、

「ハッピーバレンタイン!!!!!!」

クラッカーの大きな音と、広間全体にいた女性達が声を揃えて言うてくる。

「うおっ!!」

それにビックリして驚いてしまう。

そして昨日、何故ハクが広間に来て欲しいと言ったのか理解が出来た。

分かったとたん、何時までもここでボサッと立ってても何なので、彼女達がいる所まで歩を進める。

「はい、お兄ちゃんこれ」

「主、これを」

そう言っつて、最初に渡してきたのはハルちゃんと崩のボカロと火竜組みだ。

「ありがとう。大事に食べさせてもらう」

そう言っつと、二人は嬉しそうに微笑むと、下がっていく。

次に来たのは、

「はい、火焰さん。ハッピーバレンタインです」

「忘れじの面影亭の皆からだよ」

「皆で協力して一生懸命作りました。大切に食べて下さいね」

アティとフェアのサモナイト組みが一個ずつ、ケーキホールのようなサイズの物を渡してくる。

「ああ、そうさせてもらう。ありがとう」

その言葉を聞いて、二人は満足そうな笑顔を浮かべて戻っていく。

それにしても、このままだと他のが受け取れないな。
そう悩んでいると、

「はい、これに置いたらどうかしら」

その声が聞こえ終わると、俺の隣に隙間が開き、大きなテーブルが出てくる。

「ありがとう、紫」

お礼を言って、テーブルの上に貰ったチョコを置いていく。

「どういたしまして。次は私達よ」

そう言つて、紫の横にそれぞれの代表なのか、霊夢、魔理沙、咲夜、慧音、輝夜、橙と妖夢、レティ、小町、さとり、文と早苗、星が前に出てきた。

「はい、これは私と萃香、天子と衣玖で作ったから、大切に食べなさいよ」

そう言つて、照れくさそうに渡してくる。

「分かった」

それを聞いて、嬉しそうな顔をして霊夢は下がる。

「次は、私だな。アリスと霖、それに朱鷺子と一緒に作ったんだぜ。味の方もばっちりだ」

二カッと笑つて渡してくる。

「そいつは楽しみだ」

その言葉と共に受け取ると、保障するぜ、と言って下がる。
次に出てきたのは、

「次は私ですね。こちらは紅魔館一同からです」

そう言って、咲夜は恭しく渡してくる。

「ありがとう。大切に食べさせてもらっ」

それを聞くと微笑み、一礼して下がっていく。
貰ったものを一旦テーブルに置いて、次の人のを待つ。
次は、

「火焰。ハッピーバレンタイン。私と妹紅とミスチーにプリズムリ
バー四姉妹に阿求で作ったんだ、口に合えば嬉しい」

微笑みながら渡してくる。

「慧音たちが一生懸命作ってくれたんだ。美味しさに決まっている
さ」

それを聞くと顔を赤くさせて、そうか。と言って下がる。
次に出てきたのは、

「はい、これ。永遠亭の皆からよ。レア物なんだから、しっかり味わいなさい」

そう言うと、ウイंकをして渡してくる。

「確かに、レア物だ。しっかり味わわせてもらっ」

それを聞くと輝夜は、美味しすぎて腰を抜かさないでね。と言って下がる。

貰ったものを再びテーブルの上に置き、次を待つ。

次は、

「火焰さん、これ私達マヨイガと白玉楼からです」

「お口に合えば嬉しいです」

橙と妖夢の二人から手渡される。

「ありがとう。美味しく頂くよ」

その言葉を聞いて、二人は嬉しそうにして下がっていく。
二人が下がった後に、前に出てきたのは、

「はい、ハッピーバレンタイン。妖精の皆で作ったのよ」

レティが微笑みながら渡してくる。

「ありがとう。楽しみにさせてもらっよ」

そう言うと、ええ。と言って微笑を深めると、下がっていく。
次に出てきたのは、

「今度は、アタイだね。これ映姫様と私と幽香で作ったんだ。大事にしとくれよ」

そう言って、ニカツと笑いながら渡してくる。

「ん、ありがとう。大事にするよ」

そうかい。と笑顔で言って下がる。
貰った物をテーブルに置き、次を待つ。

次に出てきたのは、

「ハッピーバレンタインです、火焰さん。妖怪の山の代表で私と桜、はたて、にとりで作りました。どうぞ」

「妖怪の山に住む神様たちで作りました。どうぞ貰って下さい」

二人同時に渡される。

「二人ともありがとう。美味しく頂くよ」

それを聞いて、約束ですよ。と、はい。という二人からの返事が返ってくる。

そのあと、二人は後ろに下がる。
次に出てきたのは、

「はい、これ。地霊殿の皆からよ。お酒を使ってるから気をつけなさい」

少し顔を赤くしたさとりから貰う。

「ああ、気をつけよう。チョコ、ありがとう」

ん。と言って下がっていく。
そして最後、

「命蓮寺一同からです。どうぞ」

笑顔と共に、手渡してくる星。

「ありがとう、星。あいつらにもそう言っといてくれ」

彼女にそういって、受け取る。

それを聞いた星は、はい。と返事をして元の位置に戻る。

貰ったチョコをテーブルに置く時に数を数えると、東方勢だけで1
2個も貰った。

彼女達は全員後ろに下がると、次に出てきたのは、四人が代表で前に立ち、その後ろにそれぞれの将達が付き従っている。
その代表四人が俺の所に来て、

「お久しぶり、ご主人様。これは蜀の皆からだよ」

最初に渡してきたのは、桃香だった。

「ありがとう、桃香。蜀の皆にもそう伝えてくれ」

その言葉に、うん。と言って次の人に譲る。

「次は私ね。はい、火焰。ハッピーバレンタインのチョコよ。魏の皆で作ったわ」

そう言って、華琳が渡してきた。

「ありがとう。魏の皆にも伝えといてくれ」

華琳は、分かったわ。と言って、次の人に譲る。

「三番目は私ね。久しぶりね、火焰。はい、これ。呉の皆からよ」

雪蓮が、ウィンクして渡してきた。

「ああ、ありがとう。呉の皆にもそう伝えといてくれ」

雪蓮が、任せなさい。と言って、次の人に譲る。

「お久しぶりです、ご主人様。これ、ご主人様の将の皆で作りました」

月が恥ずかしそうにして渡してくる。

「ありがとう、月。皆にもそう伝えてくれ」

月は、はい。と言って微笑むと、四人は、将を引き連れて後ろに下がっていく。

次に前に出てきたのは、リリカルなのはの皆のようだ。

代表して、なのは、ヴィヴィオ、ウーノ、優子が前に出てきた。

「火焰くん、これ、皆からだよ」

「火焰兄様、これ」

「火焰さん、こちらをどうぞ」

「火焰、はい」

「ハッピーバレンタイン！」

上から、なのは、ヴィヴィオ、ウーノ、優子と渡してきた。

「ありがとう、四人とも。他の皆にもお礼を言っておいてくれ」

それを聞けて満足した笑顔を浮かべて、四人とも了承の返事をする
と、みんなの方に戻り、後ろに下がっていく。

次に前に出てきたのは、とあるの世界の人たちだ。
代表で、チョコを持った灯花と美琴に、アレイスターがこちらに来
る。

「久しぶりだな、火焰。これ私達から」

「ありがたく思いなさいよ」

二人は照れくさそうにしながら渡してくる。

「ありがとう。大事に食べさせてもらっよ。他の人たちにもそう伝えてくれ」

灯花と美琴は、おう。わかったわ。と言って下がっていく。
アレイスターを残して、

「久しぶり、父さん」

「ああ、元気そうで何よりだ。息子よ」

二人の間に和やかな空気が流れる。

「それで、どうしたんだ？」

「統括理事の事でね」

その一言で、空気が少し変わる。

「何だ、また事件か？」

「いや、そういう事じゃない。だから警戒なくていい」

その言葉を聞いて、空気を和らげる。

「それで？どんな話なんだ」

俺の言葉に、父さんはフツ、と不適に笑うと

「統括理事を入れ替えたよ」

「本当か?!」

それを聞いて、驚く。

やっと、あの害虫共がいなくなったのに安堵する。

それで、誰が新しく就任したのかを聞くと、

「聞いて驚け、息子よ。新メンバーは、君の彼女達だ!!」

「マジかよ」

「ああ、本当だ。メンバーは、一方通行、固法くん、初春くん、禁書目録、風斬、美琴くん、月詠くん、吹寄くん、黄泉川くん、木山くん。

そして、元からいたメンバーの内、親船 最中に貝積 継敏の12人だ」

「そうそうたるメンバーだな」

「ふふっ、そうだろう。これで安心して運営が出来る」

「頑張れよ、父さん」

アレイスターは、ああ。と言って、彼女達の元に戻ると、一緒に後ろに下がっていく。

次は、型月組みのようだ。

代表で、詩姫、アルティミア、琥珀&翡翠、詩織、優、アルトリア、玉藻の前、式が出てくる。

その中で、詩姫、アルティミア、琥珀&翡翠がさらに前に出てくる。

「ハッピーバレンタイン、火焰。はい、これ」

「火焰。これ、死徒を代表して」

「ハッピーバレンタインです、火焰さん」

「どうぞ。お受け取り下さい」

上から、詩姫、アルティミア、琥珀、翡翠の順だ。

詩姫は、両手で持って渡してきて、アルティは少し俯き加減で片手で、琥珀は翡翠の後ろにいて翡翠が両手で差し出してくる。

「ありがとう、貰えて嬉しいよ。他の皆にもありがとう、と伝えてくれ」

それを聞いた四人は、了承の返事をした後、後ろに下がる。次に前に出てきたのは、詩織、優、アルトリア、玉藻の前だ。

「ハッピーバレンタイン、火焰。これは、遠坂たちと一緒に作ったんだ、食べてくれ」

「こっちは、電脳世界のマスターやバゼットさん、カレンさんと作ったんだよ」

「私のほうは、第四次と五次のサーヴァント達で作りました」

「次は私ですね。こちらは電脳世界のサーヴァントと一部あちらのサーヴァントの方たちと一緒に作りました。味は保障しますよ」

四人が、そう言って渡してくる。

「ありがとう、美味しく頂くよ。作ってくれた皆にもお礼を言っておいてくれ」

その言葉に了承すると、後ろに下がる。
ラストは、式みたいだ。

「ほら、バレンタインチョコだ。私や伽藍の堂の皆、青子と霧絵で作ったんだ。味わって食べよ」

ぶっきらぼうに言いながら渡してくる。

「ふふ、そうか。ありがたく食べさせて貰おう。皆にもお礼を言っておいてくれ」

式は、分かった。と言って下がる。

その後、全員が後ろに下がり、次の人たちが前に出てくる。

シャッフルの世界の皆か。

それにしても、何故か懐かしのバーベナ学園の制服を元生徒だった人たちと現役の学生は着ている。

あれか？、インパクト的な感じか？

それでも、少し懐かしく感じる事が出来て嬉しく思う。

あの頃が懐かしい。

そんな感慨にふけっていると、代表で凜と楓が前に出てくる。

「ハッピーバレンタイン、火焰。はい、チョコ」

「これ、皆さんと協力して作りました。美味しいですよ」

二人とも、笑顔で渡してくる。

「ああ、ありがとう。他の皆にもそう伝えてくれ」

そう言つて、受け取る。

それにしても、学園にいた頃は、こういう場面でよくあいつらが来てたんだよな。

そんな事を考えていると、

バンッ！！！！

「久し振りだな。秋風火焰っ！！」

その声と共に、俺の後ろにあるドアから大勢の男性人が崩れ込んできく。

しかも、鉢巻やハッピを着ているもの、バリアジャケットを着ている者までいる。

おいおい、マジかよ。

考えたら起こるとか、どんだけだよ。

ああ、これが世に聞くフラグか・・・、怖いな。

それに、他世界の奴まで混じってやがる。

具体的に言つと、とあるの世界とリリカルの世界だ。

三世界の奴らが来るとか、どうやってきたんだ。

そんな現実逃避をしていると、

「秋風っ貴様、我等がプリンセス達にチョコを貰っていたなっ!!」

「ああ、そうだが」

集団の前にいた、KKKの文字が入った鉢巻にハッピを着た男性が
言ってきたので、普通に返す。

「チッ、このリア充が!!」

リア充っておい。

まあ、否定はせんが。

「だが、今日の我らは一味違っ!!」

別の奴が、バンッ、という効果音がつきそうな登場の仕方と叫びを
上げる。

「今回は、他の世界の同志たちがいる！」

「ああ、秋風っ。リア充たるお前を倒すために！！」

「まあ、我らに倒される前に遺言を聞いてあげよう」

そう口上を上げた奴らを見て、うん。

今日ぐらいは、はっちゃけても良いだろう。
そう思い。

「稟、楓」

「うわっ！？」

「きゃっ！？」

二人の腰を両腕でそれぞれ抱き寄せると。

「羨ましいだろう」

「あっ」

「あんっ」

おもむろに二人のお尻を撫でて相手を見る。
相手がそれを見た瞬間、

「秋風ッ、総員突撃！……………ッ！……………！」

「あの、不埒な奴を仕留めろ……………ッ！……………！」

「生きて返すな……………ッ！……………！」

と思いいいに叫びながら、魔法やサイコネシスといった能力に突撃をしてくる。
それを見て、

「二人とも下がっててくれ」

「うん」

「はい」

二人は顔を真っ赤にして下がる。
それを見て、

「さて、始めるか」

「ちょっと、待ちなさい」

その声に反応して後ろを向く。

「おう、美琴か」

「何してんのよっ、あんた!」

「尻を撫でただけなんだが」

「なんてうらやm、もとい、あんな破廉恥な事はしないで下さいまし」

「おお、黒子」

「とにかく、先にあれを片付けよう」

「うん、話はそれからだよ」

「そうですね」

「それにしても、ここは召喚獣は呼び出せるんですかね」

「にやははは、それは大丈夫よん」

と、黒子に続き、なのは、フェイト、アティ、ミント、メイメイと

言いながら前に出てくる。

それを見て、他の奴らとも思い、後ろを見ると、戦闘が出来る奴は出てきている。

は、愛されてるな。

そう思い、

「それじゃ、さっさと片付けるか」

「そうだね」

「この建物に被害が出ないよう固有結界だす？」

「詩織、頼むわ」

「ふむ、その未熟者に任せておくのは心許ないな。わたしも出そう」

「むっ、どういう事だよ。アーチャー」

「クッ、そういう事だよ」

「ほら、落ち着きなさい。あんたたち、二人でだしなさいっ!!」

「むう、遠坂がそういうなら」

「マスターが言うなら仕方が無いな」

「じゃあ、俺達も思いつきり暴れられるな」

「クー・フリーン。あなたは最初からそのつもりだったでしょうに」

「まあまあ、良いじゃねえか。気にすんなよ、んな、細けえこたあ」

「はあ、もういいです。行きますよ、オルタ、リリィ、ガウエイン、ランスロット」

「我に命令するな」

「大丈夫です」

「我が聖剣ガラティーンに懸けて、必ずや勝利しましょう」

「心配は無用ですよ。アーサー王」

「頑張ろうね、ライダー」

「ええ、桜。姉さまたちも」

「安心なさい、メドゥーサ」

「そうよ。お姉さまと私があなたのバックアップとマスターを守つてあげるから、存分に暴れてきなさい」

「はい、姉さま」

「我らも行くぞ」

「何いちゃってるんですか、この王様は。ご主人様ー見ててくださいいねー」

「ほら、早く行こうよ。狐耳のお姉ちゃん。それにしても。ふふ、お兄ちゃん達はアリスとどれだけ遊んでくれるかな？」

「我らも行こうか。火焰さまの死徒として」

「まあ、私とアルティミア姉さんとアルトルージュ姉さんは真祖だけだね」

「まあ、私は半分だけだけど。プライミッツ、リイズ、フィナ、行くわよ」

「ワンッ」

「御意」

「任せてよ」

等と言った声が後ろから聞こえてくる。
それを聞いて、

「行くぞ、みんなっ!!」

その声に、おうっ!!、任せろっ!!と言った返事が返ってくる。
ああ、この無限に沸いてきているような奴ら、どんだけいるんだろ
うな。下手したら・・・。
なんて考えながらも合体剣を右手に持ち突撃していく。

現在は、夕方の6時、朝の9時30分から始まった戦いもようやく終わる。

無限に湧いてくると思っていた奴らを全員吹き飛ばし、それぞれの世界に強制送還させて無事に終わる。

みんな、長時間戦ったせいか肩で息をしている人もいる。相当疲れているようだ。

今日はこのまま帰すのもなんだと思い、泊まる事を提案すると二つ返事で了承して、この屋敷の構造が分かるミク達に案内されて出ていく。

皆が出て行ったのを確認して、

「出てこいよ」

振り向かずに、後ろの空間に呼びかけると、

「おや、お見通しみたいだったね。はい、火焰くん。ハッピーバレンタイン」

「はい、火焰。ハッピーバレンタインです」

振り向くと、ナイアとクロノスの二人の女神がこちらにチョコを差し出していた。
それを受け取り、

「ああ、ありがとう。ナイア、クロノス」

「ふふっ、どういたしまして」

「喜んで貰えて嬉しいです」

お礼の言葉に、二人は微笑んで言葉を返してくる。

「それで、二人も泊まるか？」

その提案に、

「お言葉に甘えようかな」

「はい。お願いいたします」

了承の返事を貰い、客室に案内しようとする階に上がるが、

「ああ、そこじゃなくて」

「火焰のプライベート部屋で」

二人の言葉に、

「おい、まさか三人で」

「そのまさかさ」

「それに、力を消費しすぎて抑えが効かないんでしょう」

クロノスの言葉を聞いて、二人には敵わないな、と思い。

「相変わらず鋭いな、二人とも」

「ふふつ、火焰くんの事だからね」

「私達にはお見通しです」

「はあ、完全に負けだよ」

そう言つて、二人を俺の部屋に入れる前に風呂に入りに行く。
どうやら、皆はまだ来ていないらしく、いない間に風呂を済ませて出てくる。

二人が出てくると部屋に行き、二人が入れるようドアを開ける。

三人で部屋に入り、俺は今日一日を振り返る。
今年は、素敵なバレンタインだった。来年も、みんなと楽しく過ごせたら良いな。

そう思い、抑制していた感情を開放して二人に襲い掛かる。
その日の夜は、朝方まで三人で楽しんだ。

後日談

次の日の朝からは、他の皆も今までの会えなかった分という事で、二週間ほど一緒に過ごした。
もちろん、夜も相当楽しんだが。

番外編 バレンタイン 後編（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回は長くなりました。

もし、誤字脱字などが御座いましたら連絡をお願いします。
お読み頂きありがとうございます。

第8話（前書き）

遅れてしまい大変申し訳御座いませんでした。
それでは、最新話をどうぞ。

第8話

奥の扉を通り、次の階に降りる前に、先ほど手に入れたレイジングハートを起動させてみる事にした。

「レイジングハート、起動」

おはようございます。マスター

「ああ、おはよう。レイジングハート」

なぜ私の名前を知っているのですか？

「ああ、それはだな」

火焰は、レイジングハートに自身の存在と知識について話した。それを聞いた彼女は、

なるほど。理解いたしました。それでは、マスターの名前を教えてください

「俺の名前は、秋風 火焰だ」

マスター 認証を秋風 火焰で登録します

「登録が終わった所すまないが、お前の性能を教えてほしいのだが」
分かりました。私は祈願型のインテリジェントデバイスとなります。

現在搭載しているモードは、マスターも知っているシーリングモード、デバイスモード、シューティングモードの三つになります。
また、ブラックボックスと封印されているために、機能の一部の使用不可があります

ブラックボックス？原作とは何か仕様が変わっているのか？
レイジングハートから自身の知らない事があることを聞き

「ブラックボックスと機能の使用不可の部分を教えてくれ」

イエス、マスター。ブラックボックスはこの機体の三分の一を占めています。その中に、擬人化と擬似リンカーコアの搭載があります。容量はA A A + ほどです。

ただし、現在マスターのリンカーコアが起動していない為に、この機能を使用することが出来ません

そうなのだ、俺は”まだ”リンカーコアが目覚めていない。

他にも、魔術回路に種族的な問題で使えていないモノもある。
できれば早く使えるようになりたい。

なので現在俺が使えるものは、魔力と気だけだ。

他のものも早くどうにかしなければ、そんな事を益体無く考えそうになるのを無理やり断ち切って、彼女との会話に戻る。

「すまん。少し考えに耽ってしまっていたな。なら、俺のリンカーコアが覚醒すれば擬人化と自身だけで魔法を使える様になるという事だな」

そういう事になりますね。次に使用できない機能なのですが、カートリッジシステムが無い為に、高機動中距離戦用のアクセルモード、砲撃重視のバスターモード、最大出力用のエクセリオンモードに、

それを改良したエクシードモード、エクセリオンモードを超越した、プラスターモード、対AMF、ゼロエフェクト用武装「ストライクカノン」と単独飛行形態の使用が出来ません

「そうか、レイジングハート。魔法の最大出力に対してフレームの強度は大丈夫なのか？」

それは大丈夫です。私のフレームは、マスターの魔力に耐えうる強度となっています。なので、ルシフェリオンモードやプラスタービットを出した状態でプラスターモードを長時間使用しても平気です。

また、カートリッジシステムを搭載しても問題の無い構造になっています

「ん、ルシフェリオンモード？」

もう一つの機能です

「それは何だ？」

攻撃力に特化したモードです

「通常との違い、また、フレームなどは大丈夫か？」

はい。こちらはさらに高出力に加えてスピードが強化されたモードです。もちろんフレームもそちらに耐えられるようにもなっています

「そうか。それを聞いて安心したよ」

お気遣いありがとうございます、マスター

「当然のことだ。これから頼むぞ、レイジングハート」

イエス、マイマスター

レイジングハートに、自身の性能を教えて貰い把握すると、ポーチの中に入っていた紐を通して、首に掛けて下の階に降りていった。

先程の戦闘と説明で結構な時間を要したので、早く20階に行くために職業を鬼に装備を氷精霊のグローブにして、目に見える敵を片っ端から殴りつけて倒していった。それから数時間たった。

職業を鬼にして、19階まで普段よりさして時間が係らずこれだが、これもひとえに鬼の性能がかなり高かったおかげだ。

攻撃力は出てくるモンスターは一発殴るだけで倒され、防御力の方は、六匹と対峙した時に何回か攻撃を受けたが、

何かぶつかっただのか程度の衝撃しかなかった。

なので、短時間で此処までこれた。
で、今。

次の階に進もうと扉を開けて広間に一歩踏み込んだ瞬間、部屋の中に不可思議な力で背中を押されて中に押し込まれると、

何かが歪む感覚と扉が消えて閉じ込められた。

また罠か。

今日は二回も掛かるとは、どんな厄日だと思いつつも広間を見渡す。

この広間は、天井が遙か高い位置にあるのか天井が見えない。

奥行きも深く、所々に細工の施された石柱が立ち並んでいる。

このまま立っているのも埒が明かないと思い、先に歩を進めた。

歩き始めて、何分たったか分からないが、未だに端に行き着かない。

それどころか、周りの景色が変わらないせい、か、本当に進んでいるのか分からなくなってくる。

途中、ループ式の罠に掛かっているのではないと思い石柱に傷を付けて目印を付けたが、

今の所その石柱を見ない為、ループしているわけではないみたいだ。その事を確認しながら先に進む。

それから、数分たった。

いい加減うんざりし始めたとき、

「お、開けた場所が……はっ？」

中央の位置まで来たのか、かなり開けた場所に来たのだが、そこには、見上げるほどの大きな透明の物が1個鎮座していた。何故この様な物があるのか気になり、調べる為に近づく。後もう少しで、手が触れられるほどの距離になった時。

ブルン、ビシュッ

「うおっ!？」

俺の頭の位置にある部分が震えたかと思うと、信じられない速さで先端のとがった触手が、心臓めがけて伸びてきた。

これを咄嗟に体を捻ることで交わして、転がりながら距離をとる。

あの大きな物体は、巨大なスライムみたいだ。

正体が解るが、次の攻撃を受ける前に急いで起き上がり、体勢を立て直して、視線をあの物体に向けようとするが、

すぐに次の触手が迫っている。

防御をしている暇は無いので、近くの石柱に転がり込むように身を隠す。

次の攻撃がすぐに来るのではと思い、体勢を立て直す為に奥の方に一端逃げようとするが、

「来ない？」

先程の攻撃スピードなら、次の触手が来てもおかしくないのだが、来る気配が一切無い。

それを確認するために、柱を盾に体を少しずらして、顔を出して確認してみる。

そこには、攻撃してくる前と同じ状態で佇んでいた。

どうやら、一定の距離に近づいた獲物を狙う様になっているようだ。試しにこの距離からの魔法攻撃はどうかと思い、基本職の魔法使用に変更して、ファイアーボールを撃つための詠唱に入る。

「揺らめく焰、猛々ちっ!？」

詠唱途中で魔力の高まりを感知したのか、こちらに向かって触手をすごいスピードで飛ばしてきた。

詠唱を破棄し、回避する。

どうやら魔法も駄目のようだ。

なら、火竜はどうだと思い、『崩』を虚空に描き発動させ、空中に六個の火球を相手に向かって打ち出す。

打ち出された火球は、六本の触手に迎撃され、当たった瞬間爆発した。

煙が晴れて相手の姿が見えたが、ダメージは一切無いかのように佇んでいる。

まだ、よく分からないし、このまま様子見じゃ埒が明かないな。

どうせならあの巨体を一瞬で消滅させたいが、それをする為には凍らせるか蒸発させるしかないだろうな。

その為には、魔法使いだけでは防御力や回避能力に乏しいし、出来るとしたらセルシウスの最上級氷魔法だろうが。

だが、詠唱速度が速いわけではないから、向こうが攻撃してくる間は耐えなければならない。

魔力に反応して攻撃もしてくるしな。

本当に厄介な相手だ。

この相手に、どう対処しようモノか悩んでいると、

『主』

「ん？、崩か」

『はい、私があの方の者の意識と主に攻撃してきた際の盾になりましたよ』

「出来るのか？」

『はい、可能です。しかし、主の魔力がかなり消費されますが』

「どの程度だ？」

『迎撃や防御に要する魔力、顕現で最低でもほとんどは持っています』

「だが、それが出来ればあいつの相手は可能なんだな」

『はい』

「ちなみに、火竜の姿と人間の姿どっちなんだ？」

『どちらでも可能ですし、途中で姿を変えても魔力の消費はありません』

「分かった。それじゃ、頼むぞ」

『御意』

彼女の提案を受け入れ、作戦を決行するための準備に入る。

「我が前に、その姿を現せ！竜之炎壺式、崩！」

そう唱えると、魔力をこつそりと持っていられるための脱力感が襲ってくる。

それに耐えている間に、俺の正面に魔法陣が表れて人型の崩が出てきた。

「頼むぞ、崩」

「はっ」

現れた崩に頼むと、短めの返事が返ってきた。

それを見て、魔力を全回復させるために、ポーチの中にあるMP回復薬を三個使用する。

その次は、職業を特殊職のセルシウスに変更。

すると、人とは違う、氷のような青い肌に、長い青の髪を赤の太目のリボンで髪を上げているが背中の中ほどまである。

服装は、かなり露出度が高く、白の生地で出来た胸しか覆っていない服。

下は、濃い青の生地で作られたスカートを穿いているが、左側に腰まで届くくらいのスリッドが入っている。

スカートが落ちないよう、革で作られたベルトに、スリッドの方に合わせるための氷のような色をした紋様の入った紐が垂れていた。

靴は革で作られたショートブーツ、首と腕には細工が施されている金のリングを着けていた。

容姿は、とても凛々しい感じで、人には無い長く尖った耳をしている。

「さて、行くぞ。崩」

「お任せを」

柱に隠れていた俺達は飛び出した。

崩が自分に注意を引き付ける為に、相手に向かって無数の火球をぶつけて、意識を崩に向かわせる。

当然、向こうも触手を伸ばして弾いたり、崩に向かって攻撃しているが、崩には当たらない。

さすがは、忍びだった事も在り、回避と見切りは凄い。

崩が十分に引き付けて貰った所で、詠唱に入る。

眼を閉じると、精神を集中する。

体の中にある魔力が表に出てきて、足元に魔法陣が表れる。

その魔力に気付き、巨大なスライムはこちらにも触手を伸ばしてきたが、

「そつはさせん！」

俺の少し前に立ち、触手を火球で打ち落としていく。
その間に詠唱を完成されていく。
どんどん膨れ上がる魔力に脅威を感じているのか、触手の数を増やして攻撃してくるが、崩が悉く迎撃していく。
完成した瞬間。

「戻れ！！」

「御意！」

相手に駄目押しの火球をぶつけて、俺の後ろに下がる。

最初は！！

「荒ぶる氷雪の乙女よ 疾風の調べに乗り舞い散れ！ブリザード！
！」

そう唱えた瞬間、スライムの居る空間が急激に温度が下がり、吹雪が吹き荒れ始め凍らせていく。

凍りつつも此方に向かって攻撃してこようとしているのか、体を震わせて全身が凍るのを防ごうとしながらも、触手をこちらに伸ばし
てきている。

その姿を見て、止めを刺すために新たに詠唱に入る。

「これで終わりだ。静寂の森に眠りし氷姫よ　かの者に手向けの抱擁を、インブレイスエンド!!」

巨大なスライムを包む様に氷の柩に閉じ込められ、完全凍結する。その後、一陣の冷たい風が吹くと、氷の柩が砕け散る。

しかし、相手が消えるまで油断しないよう、二人で戦闘態勢を取り続ける。

少しすると、スライムの体が光の粒子となり消え始める。次の瞬間、

「まあ、こんなものだ」

「お見事。さすがです、主」

青い髪を右手で払い、眼を閉じる。

その俺に向かつて、崩が賞賛の声を向ける。

ちよつとテイルズを真似して、勝利時の様にセリフとポーズをやってみた。

それにしても、ノリが良いな崩。

やり終わると、体が少しだるくなる。

氷魔法の上級を連発したからだろう。

減った分のMPを回復するために、ポーチの中にある回復薬を一個取り出す。

ついでに、HPとMPの回復薬が残りいくつなのかの確認もする。

・・・HPの回復薬が二個、MP回復薬が一個か。

20階を攻略したら補充しなきゃな。

頭の隅にでも覚えておいて、回復薬を飲んでだるさがなくなると、

倒した場所に歩き出す前に。

「ありがとう崩」

「いえ、勿体無きお言葉です」

「また何かあったら頼むぞ」

「はっ、それでは戻らせて頂きます」

そう言い終わると崩の姿は消えた。

未だに元の姿に戻っていなかった事も思い出し、元の姿に戻って歩き出す。

そこには、まぶしい位に真っ白に輝く結晶球2個にそこそこ輝いている結晶球が6個落ちている。

その後ろに、白い宝箱、光り輝く魔方陣と光っていない魔方陣の2つがあった。

ポーチの中からカードを取り出して結晶球を回収すると、宝箱に近づく。

中を開けてみると、双剣、大剣、大きさの違う月輪が数枚付いている大剣、銃ランス、青色で出来た三又の槍が入っていた。

これらを異空間に収納して、特殊職に何が追加されたか確認する。

双剣・虚空ノ双牙、大剣・大百足を入手しました。これにより、hack G・U・のハセヲ2ndフォームになれるようになります。

後で、右側の光っている魔法陣でジョブエクステンドをして下さい。

護式・斬冠刀を入手しました。これにより無限のフロンティアEXCEEDの楠舞神夜になれるようになりました。

フェイスレイヤーを入手しました。これにより無限のフロンティアEXCEEDのネージユ・ハウゼンになれるようになりました。

ウンディーネの三叉槍を入手しました。これによりティルズシリーズのウンディーネになれるようになりました。

また、この槍は、他の武器になることも出来ます。

頭の中にそう響いてきた。

説明が終わると、ハセヲの1stフォームの姿になり光っている方の魔法陣に進みジョブエクステンドを開始する。

開始されると、中世のような石で出来た静謐な空気が満たしている神殿の中に立っていた。

中は、所々にコケが生えていて、かなり古い事を教えている。

前後左右を見ると、自分が立っている所は通路の交差点の丁度真ん中みたいだ。

その後に、頭上を見上げるとステンドグラスが目に見え込んでくる。次の瞬間、光の奔流が俺に向かって突き進み、体が光に包まれる。

暖かいと感じる光に感覚で数秒後、体が勝手に包まれていた光を腕で薙ぎ払う。

すると光がはじけ飛び、姿が変わった俺が出てきた。

格好は、額から両目にかけて描かれていた雷のようなマークは消え、代わりに両方の目の下に二本の線が入る。

その内の下の一本は”ー”に似たものになっている。

両肩の方も、円が重ねて描かれていた紋様もシンプルなものになり、中の円が無くなった様なものになっている。

服装も肩だし、ヘソだしルックのモノだったが、黒のレザーで覆わ

れ、腰の方から朱の円に金色の紋様が囲ってある黒の垂れが付き、金属でできた肩当てと前腕の部分だけのガントレットが追加されていた。

背中の方にも、垂れ掛けと同じ紋様が描かれていた。

瞑っていた目を開くと、巨大スライムと戦っていた空間に戻っていた。

無事ジョブステンドが終わった事が分かり、元の姿に戻り、今まで光っていなかった隣の魔方陣が光りだした。

どうやら、この空間から出られるようだ。

早く20階を攻略して外に出たいと思いながら、魔方陣に乗ってこの空間から出た。

魔法神に乗ったあと、一瞬 目の前の景色がぶれると次の瞬間、眼前に大きな扉が鎮座していた。

無事脱出できた事は嬉しいが、そのせいで緩みそうになっていた気持ちを引き締め、周囲にモンスターが居ないかをすぐさま確認する。武器はガンブレードを出して、すぐに相手を斬れるように戦闘体制を作り周囲を見渡す。

しばらくモンスターの気配が無いかを探るが、近くに何も居ないことが分かり、身体に入っていた力を抜いて大きな扉に視線を戻す。そして自身が現在、何階にいるのかが気になりもう一度周りを見渡すが、見たことが無い場所に立っていた。

ここは奥の通路に進むか、この大きな扉を開けて進むか。どちらにするべきか迷い考えていると

『お考え中のところ申し訳ございません、主』

崩の声が頭の中に響く。

『どうした、崩』

『はい、あの扉の奥から私と似た同じ力が感じられます』

『なに？、という事は』

『はい、もしかするとここが20階かもしれません』

『ふむ…』

崩の憶測に、その可能性も加えて考える。

自身の体力に魔力量、現在なりきる事の出来る数、回復アイテム数、どちらに進んだら有益なのか…等といった様々なことを次々に検討していく。

その結果

『崩』

『はっ、何で御座いますか？』

『この向こうにいるお前と似た力の持ち主はもしかすると…』

『はい、この懐かしい鋭い獲物を捕らえた鷹を彷彿させる感じ……
二式「碎羽」っ！…！』

『やはりか』

彼女の答えを聞き、納得する。

10階のボスが崩なら、この20階と思われる階層のボスは碎羽だと。

これで、ここが20階という可能性が濃厚となった。
なら、取るべき選択は、

『この扉の先に行くぞ、崩』

『はっ。お気をつけ下さいませ、主』

崩の気遣いに頷くと、新たに気を引き締めて扉に手を掛ける。
この先に待っている相手を倒すために。

第8話（後書き）

如何でしたでしょうか？

誤字脱字などが御座いましたら、感想でのご報告おねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6981o/>

数多の世界を回りし者

2011年5月12日01時56分発行